
カイザー養成学園
君は世界を支配する。
著者
尾久山ゆうか
イラスト
明咲トウル



カイザー養成学園

君は世界を支配する。

尾久山ゆうか

Kaiser Yousei Gakuen
Kimi wa Sekai wo Shihaisuru.
presented by Yuuka Okuyama

三笠書房



カイザー養成学園

君は世界を支配する。

尾久山ゆうか

Kaiser Yousei Gakuen
Kimi wa Sekai wo Shihaisuru.
presented by Yuuka Okuyama

三笠書房

イラスト／明咲トウル

CONTENTS

カイザー養成学園
君は世界を支配する。
5

あとがき
264

※本作品の内容はすべてフィクションです。

ここにもう一つの世界がある。
私たちは、探している。
白い虎が出迎える常夏の島を、支配できる者を。

序章

陽炎のたつ路上に、一頭のホワイトタイガーがいた。
美しい。神の御遣いではないかと、思うほどに。
尻尾の先まで、染められたかのように真っ白で、毛並みのよさもさることながら、我はジャングルの王者だと名乗らんばかりに、威風堂々としているのだ。
不思議な銀色の瞳。その双眸は、ライデンをただじっと見つめつづける。
「まがまがしくも美しい『白』だな。お前も『地底嵐』の被災者、後天性アルビノか？」
雷電・E・シャフトは、低い声で虎に問うた。
虎に届かぬことは承知の上。直線上とはいえ、双方の距離は五十メートルはある。
灼熱の太陽を受け、ライデンの手元がキラリと光った。
虎はその輝きにわずかに背を低くし、前脚で軽く路面をこする。
ライデンの右手にあるもの。それは抜き身の日本刀だ。不意に出現した虎を目にしてすぐ、

彼はためらわず、いや、あたかもそうすることが当然とばかりに抜刀したのだ。
その刀を、静かに正眼にかまえる。
緊迫した一本の糸が生じ、虎と人を固く結んでいく。
さっと、ライデンの深紅の髪と、片耳を彩る錦紐の耳飾りが、南国の熱風になびいた。
凛とした立ち姿からは、武術を体得した者だけが纏う「美」が顕現している。
青年特有の瑞々しさを感じさせる引きしまった肉体。意志の強さを物語る薄茶の瞳。
彼は負けてはいない。存在感は、白き虎と対等だ。
中国の清時代を連想させる、ジャケットを身につけた若き武道家は、すっと一歩、右足を前にだした。
虎は動かない。いや、動いた。わずかに左に。
コンクリートで造られた道に、陽炎が揺らめく。
「この先は空港だ。戻れ。さもなくば……斬る」
脇道のない一本道だった。それも、地上十メートル上空に造られている。
眼下や周囲には、亜熱帯ジャングルが、緑の巨大な絨毯のように広がっているのだ。
もう少し遠くを見れば、紺碧の海が四方を取り囲んでいる。
大自然のなかにある「高架道路」で、虎と人は互いに、道を譲りあう気がないかのようだった。
ライデンがまた一歩、前にでた。

すると、虎は身を低くして威嚇のうなり声を発した。
気にもとめず、彼は飄々とした表情で、歩きだした。
緊迫した糸がリールで巻き取られていくように、距離が縮まっていく。
虎はもうそこだ。ライデンに向かって、真っ白な牙を剝く。
「戻る気はなさそうだな」
そのとき、虎が咆哮とともに跳んだ。
ライデンは刀を振りかぶった。頭上から襲いかかる猛獣に向かって、刀を一閃する。
グッ…ガウッ！
白く美しい毛皮に、真っ赤な花が咲く。
虎は一旦、ライデンの背後で見事に着地を決めたが、それも束の間、身体が大きく傾ぎ、高架道路の縁を乗り越えた。
十メートル下にある緑の絨毯に、身を委ねるがごとく転落していく。
「急所は外したつもりだが……」
一瞬の決闘を終え、ライデンは刀を一振りすると鞘に戻した。
虎が落ちていったジャングルを、もの言わぬ二つの瞳で見つめる。
彼はそのあとすぐ、無遠慮なまでに照りつける太陽を睨んだ。
「暑い……それになんていう湿気だ」
高温多湿のうえ、照りかえしの強い高架道路だった。

白いコンクリートが眩しくて、目が痛む。肌さえも痛む。
ライデンは陽炎のたつ道路を歩きだした。
じっとしていても暑いなら、歩いたほうがまだマシというわけだ。
歩き始めて五分ほどすると、急にサイレンが響いた。
道路の向こうに現れたのは、白い車体に赤十字のマークを入れた一台の救急車だ。
車はライデンの手前で急停車し、後部の患者搬送口から一人の少女を吐きだした。
「……また『白』か」
とライデンが呟いたのも無理はない。
救急車から飛びだしてきた少女は、白かった。先刻の虎と同じくらいに。
歳は十五、六だろうか。ボブカットと呼ぶより「おかっぱ」と表現したほうがいいほど、あどけない様相をしている。
髪も肌も爪までも漂白されたように白く、大きな二重の目は銀色だった。
細い足に巻かれた包帯も、小さな顔を半分覆う眼帯もみんな真っ白だ。
少女は丈の短い、モノトーンのメイド服を着ていた。
メイド服にだけは「黒」という色が入っている感じだ。
「東アジア連合共和国の皇嗣、雷電・E・シャフト様でございますね？」
雛鳥が鳴くような高い声で、少女はライデンの名前と素性を口にした。
皇嗣とは、もともと英語のプリンスのことだ。今では「国の次期代表。あるいはその最有力

候補」という意味で使われている。
「そうだ。お前は？」
とライデンが反問する。
「遅くなって申し訳ありません。空港でお待ちいただければ、お迎えにあがりましたものを……私はミュゲと申します。貴方様の『カナリア』における召使い（シルビエンタ）です」
シルビエンタ？　とライデンは目を細めて訊き返した。
「そうです。奴隷です。下僕です。無難に表現すると、メイドです」
無難な表現を最後に付け足してすぐ、ミュゲはよろけた。
包帯がぐるぐる巻かれた足から崩れそうになる少女の脇を、ライデンがすばやく支える。
少女の腕は細かった。それに、炎天下にさらされた枯れ枝のように熱い。
「お前、熱があるぞ」
「そそそ、そんなに高熱では……まだ、は…働けます！」
ライデンの介助を「大丈夫です、大丈夫です」と固辞すると、ミュゲは細い両足でふんばった。だが、その足が小刻みに震えている。
チラリとライデンが救急車を一瞥（いちべつ）した。
「お前、アレで搬送される途中だったのではないのか？」
ミュゲの顔が強ばった。
「だいたい救急車で迎えにくるのはおかしい」

えっとそれは……とミュゲがなにか言いかけたが、ライデンは無視してつづけた。
「それにお前はさっき、運転席でも助手席でもなく、怪我人が搬送される後部扉から飛びだしてきたぞ」
人の行動は、虎に敵意があるかないかを探るより簡単なのだった。
とりわけ、ミュゲの登場には不審な点が多い。
「……ええっと……その……なんとご説明したらいいか……」
ミュゲは、しどろもどろになった。軽く握った手を口元にあてて困る様は、問いただすのも気が引けるほどだ。
「言えない事情があるなら、答えなくていい。お前に肯定してもらわなくても、俺の推理は当たっているはずだ。そろそろ行くぞ。こんなところで立ち話をしていたら、蒸し焼きになる」
ライデンはさっさと救急車に向かいだした。
開きっぱなしの後部搬送口から車内に乗りこむ。
ミュゲがあわててライデンにつづいた。
「あの、お荷物は？」
「これだけだ」
座り心地がいいとは言えない、備えつけの椅子に腰をかけると、ライデンは一振りの刀を持ちあげた。
「生活に必要なものは揃っていると聞いている」

ミュゲがライデンと対面する形で座る。するとすぐ扉は自動的に閉まり、車が静かに動きだした。

車内は適度な温度と湿度に調整されていて、ライデンの肌に滲んだ汗をとばしてくれる。

高架道路を走る車のなかから、ライデンは亜熱帯植物の生い茂る島を見つめた。

「ここが『カナリア』か……」

濃厚な緑の大地。

むせ返るような湿度と白熱の太陽。

かつてサイパンがあった地点に位置する『カナリア』は、『地底嵐』のあと、世界の崩壊を食い止めるため造られた、人工の島だった。

ここに、世界中の皇嗣たちが集められている「学園」がある。

学園設立の目的はただ一つ。

世界統一国家の、初代帝王を選出すること。

雷電・E・シャフトは今、一振りの日本刀を携え、そこに乗りこもうとしているのだった。

一章　シルビエンタの鈴蘭

「さっき、道路にいたアルビノの虎を斬った……」

ライデンは空調の行き届いた救急車のなかで、前置きもなくその話をした。

先刻の白い虎は、なぜかライデンの脳裏に強く焼きついていたのだ。

美しさのせいなのか、罪悪感のせいなのか、ライデン自身にもわからなかった。

正式名、後天性アルビノ症。

突如、身体のすべての色素が抜けるという奇病だった。

『地底嵐（アンダーグラウンド・テンペスト）』が吹き荒れたとき、未知の放射線の影響を受けたのだとか、地底から吹きだした有毒物質のせいだとか諸説あるが、未だ解明されていない。

「あの虎がどこから道路に入ってきたのかわからないが……まったく退（の）く気配がなかった。襲いかかってきたから、斬った。虎はジャングルに落ちていった」

とライデンが説明すると、ミュゲはこう返した。

「『保護区』の虎が脱走したという報告は聞いていました。ご主人様にお怪我（けが）がなくて幸いで

す」

「虎の心配はしないのか？」

「虎、ですか？　脱走したアルビノは、どのみち殺処分ですから」

どっちでもいいのだ、と言わんばかりのミュゲの顔を見て、ライデンは意外だというように問うた。

「見掛けによらず薄情だな。お前も虎と同じ、後天性アルビノ症だろう？」

そうです、とミュゲは首肯した。

「『カナリア』のシルビエンタはみんな、国連に保護されたアルビノです。カナリアは、アルビノと皇嗣様しかいない島です」

「アルビノと皇嗣しかいない島か……」

ミュゲの言葉を反芻し、ライデンはふたたび緑の絨毯を見つめた。

ミステリアスな島だと思い、一瞬後にはオカルティックな島だと思い直した。

「ですから、私たちも脱走したら殺処分です」

ゲームのルールを読みあげるような口調でミュゲがそう言ったから、ライデンの思考はオカルトからホラーに移行した。

ミステリーかオカルトかホラーかわからないものの、この島に独特のムードと価値観があるのは確かなようだ。

ミュゲは虎に同情していないし、自分に対する哀れみも匂わせない。

そう教育されているのか、感情になんらかの制御がなされているのか？
迫害で受けた心の傷が原因というのも、大いに考えられた。
人の生活と、歴史と、心を一変させてしまった未曾有の危機。『地底嵐（アンダーグラウンド・ナンバスト）』略して『UGT』が起きたのは、今から八年前だ。
突如、世界中にある「大地のエネルギー集束点」に異変が生じた。ようするに、地熱が一気に地表に吹きだしたのだ。
急速に温暖化が進んだせいで、内陸部では旱魃（かんばつ）が起き、生態系は壊滅的なダメージを受けた。海でも同様だ。水温の上昇により南極、北極の氷は一気に溶け、海面は上昇し、たった数ヵ月で無数の島を海底に沈めた。
雷電・E・シャフトの出生地である東京も、今はもうない。
幸い、といっていいのかわからないが、異変は半年後、なんの前触れもなく沈静化し、集束点から吹きだした地熱も、徐々に収まりはじめた。
人類は陸地の二十二パーセントを失い、約二億五千万人の犠牲者をだしたが、絶滅を免れたのである。
「いつアルビノ症に？」
ライデンはミュゲに訊いた。
「三年前です。十三歳のときに」
ミュゲも発症する以前は、親から譲り受けた「色」を持っていたのだろう。

気の毒なことだ、とライデンは思う。
ＵＧＴ以後、「アルビノ狩り」という言葉が生まれた。
難治性の「後天性アルビノ症」にかかった者を、人々は忌み嫌い迫害したのだ。アフリカのある地域では、白い皮を剝ぎ、火あぶりにしたというから、まさにホラーだった。
国連は観察と治療と保護を目的に、世界中のアルビノをカナリアで保護した。
だが、果たして「保護」なのだろうか？
実態はそう綺麗なものではないようだ。
脱走は殺処分。これだけで「保護」とは真逆の印象を受けることは否めない。
「その足や顔の傷、どうした？」
ミュゲは、ピクッと頬を強ばらせた。
「言えないのか？」
「そ、それは……」
「お前は俺の召使いなんだろう？」
ライデンが問うと、ミュゲはコクコクと頷いた。
「そうです。私は雷電・Ｅ・シャフト様の、奴隷で下僕です。どのようなご命令にも従います。私は『カナリア』で、ご主人様が快適にお過ごしいただくための道具です」
「説明書に書いてあるような回答だな。まぁいい。では命じる。その眼帯をとれ」
端的に命じると、ミュゲは素直に従った。

少女の目の周囲にできた浅黒い痣。明らかに、拳で殴られた痕だ。
「誰かに殴られたのか？」
「……」
「質問を変えよう。誰に殴られた？」
「ま…前……以前のご主人様です」
「皇嗣の一人か？」
ミュゲがわずかに頷く。
「手や足の傷も、そいつがやったのか？」
アルビノの少女は、また一つ首肯した。
「他にも傷はあるのか？」
ミュゲが困ったように黙りこんだ。
「では命令する。服を脱いで背中を見せろ」
「はい。ご主人様」
救急車のなかでミュゲはためらうことなく、全裸になった。
惜し気もなく曝けだされた白い肌を見て、ライデンは「もういい」と呟いた。
「あの、『もういい』とは、どういう意味でしょうか？」
小さな二つの胸の膨らみを隠そうともせず、少女は問いかえした。
真ん前にある少女の裸体から、視線を外したのはライデンのほうだ。

「……下着まで脱ぐとは思わなかった。というか、羞恥心がないのか？　脱ぎ慣れているのか……いや、その歳で……まさか」

とブツブツ。最後に「理解できない」という表情で、救急車に備えつけられていたバスタオルを放って渡した。

受け取ったものの、ミュゲが首を傾げている。

「わかったよ。いちいち、命令すればいいんだな。服を着ろ。男の前で裸になるときは、前ぐらい隠せ。目のやり場に困る。わかったか？」

「わ……わかりました、ご主人様」

ライデンが声をやや荒げたせいか、ミュゲは萎縮して即答した。

ミュゲが服を着こむまで、ライデンはずっと窓の外を見ていた。

苦いモノを噛みつぶしたような顔をしている。

彼の脳裏には白い虎にかわって、ミュゲの裸身がこびりついていた。

まさに白滋の肌だ。だが、美しいとは思わなかった。あえて言うなら痛々しい、だ。

いくつもの内出血の痕があったからだ。

誰に殴られたのかはわかった。では、なぜ殴られたのか？

考えこむライデンの視界が、徐々に変化してきた。

鬱蒼（うっそう）としげるジャングルが開けてきたのだ。

「街だ…」

ライデンが呟く。そうです、と背後からミュゲの声が響いた。
「この島は名前のごとく翼を広げた鳥の形をしていて、その半分はアルビノ保護区、半分は皇嗣様たちの居住区となっているのです」
高架道路はぐるりとカーブし、視界の中央に巨大なタワーが見えてきた。
カナリアの管制塔だ。道路の終着点『ゲート』もそこにあった。
タワーを中心に、何百もの建築物があるのがわかる。
真っ白なドーム。広々とした公園。プール。
整備された道路の左右に並んでいるのは、商店街だろうか？
教会。モスク。仏寺。
そして点在する豪邸。おそらく皇嗣たちの住居だろう。
ライデンはその街を見下ろしながら、ミュゲに向き直った。
「……お前、どうして俺のシルビエンタになった？」
「以前のご主人様に破棄されて……『ホーム』に向かう途中、指令が……」
ミュゲはメイド服のリボンを結びながら、そう答えた。
「破棄？」
「はい。言い換えればクビです」
「命令されて俺に宛がわれたということか？」
「そうです。あ、でも、シルビエンタの交換や破棄は、皇嗣様のご自由です。私がお気に召さ

なければ、他の者と交換できます」
　また説明書を音読するような口調で、ミュゲは告げた。
「前の皇嗣は、お前をさんざん殴った挙げ句、破棄したのか？」
「そうです」
「それでお前はなんとも思わないのか？」
「あの、ご質問の意味がわかりません、ご主人様」
「本当にわからないのか？　わからないフリをしているのか？」
　ライデンは問うた。あどけないミュゲの表情を観察する。
　今度はミュゲが居たたまれないように視線を落とした。
「本当に……わかりません」
「本当か？」
「本当です」
「じゃ、わかるヤツと交換したい。殴られてなんとも思わないなんて、こっちが理解に苦しむ」
　ミュゲはドキッとしたようにライデンを見つめた。
「それは……無理です。シルビエンタはみんな『わかりません』と答えるように躾けられているのです」
「やっぱり、わかっていて、わからないフリをしているんじゃないか」

「うっ……えっと……」
ミュゲが言葉を逸する。口元に拳をあてて、露骨に困惑している様子は、まるで苛められている子供のようだ。
「問いつめられると口ごもる。予想外の質問には、うまく答えられないみたいだな」
ライデンは苦笑とも冷笑ともとれる表情を浮かべた。
「シルビエンタがどういう存在か、おおよそわかってきた。『皇嗣がカナリアで快適に過ごすための道具』だとお前は説明した。シルビエンタは皇嗣が自由にできる人形だ。人形だから殴られてもなんとも感じない」
「……」
「だが、実際は違う。感じないフリをしているにすぎない。人形じゃない。お前たちは人形のフリをしている人間だ」
ライデンの揺らぎのない視線に、ミュゲがたじたじとなったとき、微かな電子音が割って入った。
少女はその音を聞いて、ホッとしたように話をかえる。
「もうまもなくゲートです。ご主人様」
説明口調に立ち戻ったミュゲから視線をはずし、ライデンはもう一度外を眺めた。
高層タワーが間近に迫っていた。
「ご確認のために、パスポートを拝見いたします」

「今更だな」
と苦笑しつつ、ライデンが懐から一枚のカードを取りだす。パネルに左手をのせてくれと言われ、ライデンは従った。生体認証システムらしい。
ミュゲがスキャン作業をするなか、ライデンは問うた。
「ところで、もしも俺が偽者の皇嗣で、そのカードが偽造だったら、どうなる？」
「ゲートが開きません。それから自動排除装置が作動して、この車ごと爆破されてしまいます」
「ミュゲはどんなことも淡々と言う。お前も巻き添えなんだぞ」
パスポートのスキャンを終えたばかりのミュゲが、はたと顔をあげた。
「なんだ？　エラーでもでたのか？」
「いえ。今、ご主人様が初めて私の代名詞をお呼びになったので……」
「名前のことか？」
「シルビエンタに名前はありません。みんな花の名前を代名詞にしています。あ、それから、エラーはでませんでした。ゲート、開きます」
彼女の声とほぼ同時に、道路とタワーの接合面がスライドし、扉（ゲート）が現れた。
一台の救急車がタワーのなかに吸いこまれていく。
「一応、ご説明を……このゲートを潜ったら、ライデン様は『ご卒業』まで、カナリアの外にでることができません」
「わかっている。『学園』でカイザーを選出すること。それが皇嗣の使命だ。カイザーが決ま

れば解散…いや卒業なんだろう？」

UGT後、各国の秩序は崩壊の危機に瀕した。

陸地の二十二パーセントが水没したせいで、当然国境線は引き直しとなった。ところが、この国境線を巡って、各国は争った。

この争いを回避するため生まれたのが合併国家だ。近隣諸国が合併することで、無益な争いを回避し、危機的な情況を乗りこえる協力体勢を作った。ライデンの国、東アジア連合共和国もその一つだ。北アメリカ一の民主国家だったアメリカ合衆国はカナダと合併し、メアトリア合衆国となっている。

アラブ、アフリカ、南アメリカの小国は、民族や宗教による争いを回避するため、小さな国を新たに再編した。

それでも混沌と貧困と、荒廃はなかなか収まらず、UGTから二年後『ネオ・エデン』計画が提唱される。

各国の次代の担い手……つまり皇嗣が一堂に会し、公正で平等な立場で対話するのだ。彼らの「決議」を世界中で実行していくことで、世界秩序の再編をはかる。それが『ネオ・エデン』計画だ。

皇嗣たちは対話によって世界を導きつつ、「学園設立後十年以内に、世界統一国家の初代カイザーを選出しなければならない」とされた。

皇嗣たち全員で一人のリーダーを選出するのだ。そのリーダーを各国の皇嗣たちが支えるこ

とで、国境なきグローバル国家は実現する。
簡単に言うと、世界中の皇嗣たちが手を繋ぎ一つになれば、人類が一つとなることも夢ではないという考え方だった。
だが、学園ができて五年。いまだカイザーは誕生していない。
残り時間はあと五年だ。
救急車が停止した。
扉が開くとすぐ、ライデンは刀を片手に飛び降りた。
白い壁に仕切られたガレージのような場所だ。
振りかえると「ほら」とミュゲに手を差し伸べる。
「足、痛いんだろう?」
「いいい……いえ、結構です。一人で大丈夫です」
ミュゲは扉の手前で大きく首をふって、その手を拒んだ。
顔がほんのり色づく。
「よくわからないが……俺が助けるのは反則なのか?」
「そそそ、そういうことではありません。ただ……」
「ただ?」
「皇嗣様と私は身分が違いますから……シルビエンタは皇嗣様の奴隷で、下僕で……無難に言うと……」

「メイドなんだろ？　その説明はさっき聞いた」
ライデンがやや呆れた顔つきで言葉を引き継ぎ、ミュゲは真っ赤になったままひどく困惑した。また口元を拳で隠して、うつむいている。
その手をライデンが、ぐいっと引っぱる。
「そうやっていても埒があかない」
少し力を入れただけで、ミュゲの身体は簡単にライデンの手元に引きよせられた。
「お前、枯れ木か……花みたいに軽い」
細い腰を抱くと、少女は声にならない悲鳴をあげた。驚きすぎたのか、青ざめている。
小さなバレリーナをリフトするようにミュゲを抱きあげ、車の外にそっと下ろす。
「小さくて白い花。いつもうつむき加減で……思い出した。ミュゲとは鈴蘭のことだな」
ライデンは呟いた。そのあと、まっすぐにミュゲを見つめる。
「鈴蘭……今日からそれがお前の名前だ」
ぽん、とライデンの手が少女の頭のうえに落ちた。
「私、名前を……いただけるのですか？」
白く小さな少女は、奇跡が起こったかのように目を見開いた。
「そうだ。お前は今から鈴蘭だ。さて、鈴蘭。命令だ。早く医療室へ行って、ちゃんと怪我の手当てをしてこい。包帯と眼帯で痣を隠していただけだろう？　治療していないことはお見通しだ」

「……は、はい。ご主人様」

ミュゲ、いや鈴蘭は誰が見ても明らかなほど、頬を朱に染めた。きゅっと口元を引きしめて、喜びを隠そうとしているようだが、これこそ無駄な努力というものだ。

「お前は俺に名前をもらっておいて、俺のことを代名詞で呼ぶつもりなのか？」

頬を染めた鈴蘭は、はたと、自分のすぐ前に立つ、新しい主人を見あげた。

深紅の髪。東洋系の艶やかな衣裳に包まれた、瑞々しい肉体。

彼は日本刀を携え、強い光を宿す瞳で鈴蘭を見つめている。

ライデンはただ立っているだけなのに、鈴蘭は大きな存在感に気圧されたように一歩退いた。

彼は皇嗣なのだと、彼の立ちふるまいが物語るのかもしれない。

「はい、雷電・E・シャフト様」

「長すぎる。それじゃ、呼びにくいだろう」

「えっ……そ、それではラ…ライデン様」

それでいい、というようにライデンは一つ頷いた。

鈴蘭は言葉もなく、はにかんだ。

銀色の瞳を潤ませた少女の姿を、雷電・E・シャフトはただじっと見つめていた。

＊



東アジア連合共和国。通称「東ア連」。
旧中国、モンゴル、日本、韓国が、UGT後に興した四ヵ国連合国家だ。
首都は北京。だが、雷電・E・シャフトは日本の東京生まれだった。
だから彼の食生活や趣味は、どこか日本人らしいものが多い。
ライデンがカナリアに来て、二日目の朝。
「朝食はやっぱり味噌汁と白米じゃないのか？」
目の前のシリアルとヨーグルトを見ると、ライデンは朝一番のクレームをつけた。「これはあり得ない」という顔で食卓を睨んでいる。
シリアルの種類は豊富だし、オムレツにフルーツもある。食卓の中央にはスティック野菜を入れたグラスが並んでいた。
高級ホテルの朝食に劣らぬ豪華さだったが、ライデンのお気に召さなかったらしい。
「す……すみません。塩分の過剰摂取になるより、こちらのほうが適切かと」
銀のトレイで顔を半分隠して、鈴蘭は謝罪した。
顔の腫れはずいぶん引いていた。昨日とは違ったモノトーンのメイド服を着ている。
彼女が早朝の五時頃、屋敷に「出勤」する物音を、ライデンは寝室で聞いていた。
皇嗣の食事や衣類の洗濯、屋敷の掃除は、みんなシルビエンタの仕事なのだ。
屋敷のセキュリティは、ホームと呼ばれる高層タワーが管理していて、家主であるライデンとそのシルビエンタ以外は、無許可で入ることはできない。

「せめて中国粥にしてくれ。コーンフレークやパンは好きじゃない」
と命じるライデンは、緑のシルク生地で作られた、丈の長い上着を着ていた。菊花の刺繍が施された華やかな上着は、ライデンの深紅の髪をよくひきたてている。
「わかりました。すぐにご用意いたします」
鈴蘭がいそいそと、食事を下げる。焦ったせいか、鈴蘭の手元から皿が落ち、派手な音をたてたが、ライデンは無視した。
「スクランブルエッグは食べない。目玉焼きか卵焼きがいい」
と一方的に告げる。
「わかりました。ライデン様」
鈴蘭が一礼してでていくと、ライデンは広々としたリビングから見渡せる石庭を眺めた。
リビングは重厚な中国式家具で統一されている。
漢詩の書かれた屏風や、水墨画が飾られていて、インテリアには瑪瑙、翡翠といった天然石が使われているものが多かった。
今、ライデンが見つめている石庭は、日本庭園と中国庭園を折衷したものだ。
いわゆる「東アジア風」と、今では呼ばれている。
ただし、池には錦鯉ではなく、淡水の熱帯魚が泳いでいた。
桜や桃の木はなく、シンビジウムとブーゲンビリアの花が咲き誇っている。
これぱかりは、気候のせいで仕方ない。なにせカナリアの気温は、日中四十度を超えるのだ。

「この、やたらに芸術的な屋敷の造り。爽矢の趣味か？」
ライデンは鈴蘭の作る朝食だけでなく、カナリアでの住居もあまり気に入っていなかった。
彼の趣味は、機能重視のマンションだ。それも４ＬＤＫくらいがちょうどいい。
だだっ広いのは移動が面倒だし、骨董品と芸術品は手入れが大変だ。
「しばらくは我慢するしかないな。遺品の整理が先だ」
とため息まじりに呟く。
半月前まで、ここには別の家主がいた。
爽矢・Ｅ・シャフト。ライデンの双子の兄だ。
彼が死んで、ライデンはここへ来た。
来なければならなくなった、と言ったほうがいいだろう。
今着ている服も、ライデンのものではなく爽矢のものだ。
サイズはピッタリだが、ライデンの趣味ではなかった。足元にまとわりつくほどに長いパオより、ジーンズのほうが機能的で、ライデン好みなのだ。
「おおお……お待たせいたしました。ライデン様」
籐細工のワゴンを押して、鈴蘭が戻ってきた。
「早いな。待つというほど待っていない」
「実は、お食事のお好みがわからず、和、洋、中と一通り作りまして……」
目の前に改めて配膳されたものを見て、ライデンは束の間、絶句した。

「鈴蘭、これを全部食えというのか？」
中国粥に、なぜか豆腐の味噌汁。
卵焼きにチンゲンサイとベーコンの炒め物。
その横に焼き魚と饅頭が並んでいた。饅頭は三つもある。和と中華が喧嘩しそうな朝食だ。
「どれだけお召しあがりになるかも……わからなかったので……」
恐縮する鈴蘭を見て、ライデンは呆れ顔を作った。
「なるほど。少ないより多いほうがいいと思ったわけだ」
「はい……」
静かに箸を持ちあげる。ふと鈴蘭の視線に気づいて、ライデンは動きを止めた。
「そう、凝視されていると食べにくい」
「も、申し訳ありません！」
鈴蘭が大慌てで三度頭を下げると、逃げるように退出した。
その後ろ姿を眺めつつ、味噌汁を一口すする。
「塩辛い」
と呟いて、椀をおいた。そのあと「そうか」とライデンは独りごちた。
「俺の口にあうか、心配で見ていたのか」
鈴蘭が真剣な顔をして、ライデンの口元を見ていた理由だ。
「追い払うべきではなかったかな。味噌汁は濃すぎる。粥は水分が少なすぎる。卵焼きは

……」

ライデンは一口食べて、口元をムッと引きしめた。

「なぜ砂糖を入れる!?」

パタンと箸を置くと、ライデンは頬杖をついた。

ちょっとうんざりしているものの、鈴蘭を呼んで、ガミガミ叱りつける気はないようだ。

「教えるべきことが……たくさんありそうだ」

風の奏でる鈴の音がして、彼はリビングに面した石庭に視線を向けた。

縁側に、青銅の風鈴が吊ってある。

室内はクーラーが効いているが、外はすでに暑そうだ。

爽矢はこの庭を眺め、どんなものを食べていたのだろうか?

ふとライデンは、そんなことを考えた。

何時頃、起床していたのだろうか?

どんなシルビエンタが彼に仕えていたのだろう?

「なぜ、こんなでかい屋敷を建てた? 見栄をはりたかったのか?」

皇嗣はそもそも不確かな存在だ。「次期代表の最有力候補」とはいえ、それはあくまで候補にすぎない。

「皇嗣とは不確定極まる未来における、不確定極まる存在にすぎない。そのような若者に世界を託そうという考えは、昨今の混乱を『丸投げ』したい政治家の発想に等しい」と論じた有識

者に対し、『ネオ・エデン』計画を提唱した国連のイワン・サジ事務総長はこう返した。
「私は政治家ではない。私は世界を憂う一人の老人にすぎない。政治家たちは利権を巡り争うことはできても、世界中に広がる飢餓や貧困に有力な解決策を打ちだせずにいる。このような時代だからこそ、世界を導く若き力が必要なのだ。彼らが一つになり、その力を発揮すれば、ひっ迫する世界情勢を好転させる原動力になるはずだ」
単なる理想論だという根強い反対もあったが、計画は実行に移される。
サジ氏の情熱が世界中の人々の心を動かしたのだ。
皇嗣選抜の方法は国それぞれだが、東ア連は「厳密なる審査の結果」世界有数の複合企業（コングロマリット）であるシャフト家の御曹司、爽矢に白羽の矢を立てた。
爽矢は東アジアの大国を担う「皇嗣」として、カナリアに召喚された。五年前の話だ。
爽矢はここで五年、皇嗣としてカナリアに在学し、そして、半月前、亡くなった。
自殺、と聞いている。熱心に「国境なきグローバル国家実現」を訴えたサジ氏が亡くなった、ちょうど一年後のことだった。
「爽矢がここへきたのは十三歳のときか……。今、俺が十八だからな」
皇嗣はたった独りきりで自国を背負い、カナリアで学園生活を送る。
それが皇嗣の役割で、試練なのだ。
若い……いや、幼い皇嗣は、ここでどんな生活をしていたのだろうか？
シルビエンタが身の回りの世話をしてくれるとはいえ、孤独感は否めないはずだ。

「？」

急に、ライデンの顔つきが変わった。なにかに気づいたのだ。

「おかしいな。屋敷をリフォームしたのはつい最近だ。家具がみんな新しい」

ライデンはおもむろにリビングをはなれ、庭に面したガラス窓を開けた。

風鈴は涼しげに鳴っているが、湿度は高い。

庭におりると、高温多湿の外気がライデンの肌にまとわりついた。

「リフォームのとき、石庭も併せて造ったのか？　ここはそれまで、普通の庭か花壇だった」

ライデンは庭の中央で、探偵か刑事のように、独自の推理を展開した。

ほら、見てみろ、と彼は自分自身に語りかけた。

「石庭を取り囲むようにブーゲンビリアの花が植えられている。多すぎてアンバランスだ」

つまり、とライデンはつづけた。

「花は石庭を造る前からあったんだ。花を避けて豪華な庭を造った。シンビジウムは後で植えた。不自然に並んだブーゲンビリアを……誤魔化すためだ」

そのとき、室内で電子音がなった。電話の呼びだし（コール）に似た音がしたと思ったら、英語の放送が始まる。カナリアの公用語は英語なのだ。

ライデンはリビングの天井の端に、小型スピーカーを発見した。

『おはようございます。皇嗣の皆様。十月二十日、月曜日です。本日のセッションは午前九時より行なわれます。繰りかえします。本日のセッションは……』

鈴蘭とよく似た可憐な声だ。シルビエンタの一人だろうか？
「まるで、学校の校内アナウンスだな……そうか、ここは『学園』だったな」
記念館か有形文化財のような屋敷に、学校放送が流れる。
それがここ、カナリアの日常らしかった。
「さて、他の皇嗣たちの顔を拝みにいくか……」
午前八時。すでに気温は、三十度を超えていた。

＊

「どうして、こんな暑苦しい色の制服なんだ？　おまけに南国でジャケットスーツって…」
とライデンが言うのも、もっともだった。
今、鈴蘭が手にしているのは、黒い制服だった。スタイリッシュな白のラインが入っているジャケットは、名門学園の制服としては「可」だが、カナリアでは色々な意味で「不可」だとライデンは思った。背抜きの仕立てとはいえ、暑苦しいことこの上ない。
「カナリアは、日中四十度を越えるんだぞ。こんなもの着ていられるか！」
「でも、セッションのあいだはこれを着るのがルールなのです、ライデン様。学園まではお車を用意しておりますし、学園内はクーラーが……ですから暑くはないのです」
「いやだ。俺は着ない。俺の好みじゃない」

言い捨てるようにして、ライデンはパオのまま屋敷をでた。
「お待ちくださいライデン様！　校則に従ってくださらないと、ライデン様も私も減点されてしまうのです！」
黒い制服を持って、鈴蘭は走った。額に汗が光っている。たぶん冷や汗だ。
ライデンは不承不承、立ち止まった。
鈴蘭は、そのライデンの背中にぶつかって止まった。
よろけて、後ろに引っくり返りそうになる鈴蘭の腕を、ライデンがぐいと摑む。
ドジ……とは言わなかったが、ライデンの顔は呆れていた。
「も、申し訳ありません。ライデン様！」
露骨に恐縮し、鈴蘭がライデンの手からそっと身を遠ざける。
「私、ま、まだ色々と緊張して……失敗を連続……な、慣れれば、多少マシに……」
「そんなこと、聞いていない。前を見て走れ。言いたいのは、それだけだ」
「は、はい。……ライデン様」
小さくなる鈴蘭の手から、ライデンは黒いジャケットをひったくった。
「着て、くださるのですか？」
「初日から減点は避けるべきだと思っただけだ」
ライデンはそっけなく返答した。無邪気に喜んだ鈴蘭から、顔を背ける。
自分の減点よりむしろ、鈴蘭に課される減点を気にしていたとしても、彼は決して顔にださ

なかっただろう。
ライデンは一旦、屋敷に戻り、制服に着替えた。鈴蘭は甲斐甲斐しく彼の着替えを手伝った。
「よくお似合いです。ライデン様」
とほほ笑んだ鈴蘭に「世辞は言うな」と突っかえす。
「お、お世辞じゃありません……！」
鈴蘭が反論すると、ライデンはなにをムキになっていると言わんばかりに彼女を一瞥し、さっさと玄関に向かいだした。

＊

ここ、カナリアには世界中の皇嗣たちの屋敷がある。国際色豊かな豪邸が点在する様子は、万国博覧会さながらだ。
彼らは午前八時半になると、黒い制服に身を包み、高級車で登校する。
それがここカナリアのルールだからだ。
「ですから……車にお乗りくださいライデン様」
と鈴蘭は懇願したが、ライデンは「歩く」と言ってきかなかった。
「第一、徒歩十五分弱だぞ？　車というものは、何十キロという単位で移動する手段だ」
「距離の問題ではなく……皇嗣様方が決めたルールなのです」

「それはＶＩＰらしく見せたいか、暑いから歩きたくないかのどっちかだ」
ライデンは一口の日本刀を左手に、歩道を歩いていた。上下黒のジャケットスーツ姿だ。
暑くないのか？　と問われれば、暑い！　と答えただろうが、徒歩十五分弱なのに車を使う感覚に迎合する気になれなかったのだ。
ちなみに、学生鞄も教科書も持ってはいない。学園は学園でも、ライデンの向かう学園は、勉強を目的に創られていないのだ。
「それともなにか？　俺が徒歩で登校したら、お前に罰がくだるのか？」
「そういうわけではありません。ただ暑いので……」
鈴蘭は小さな黒い日傘をさして、ライデンの背中を小走りで追いかけている。
いつまでも追いかけてくる少女の気配に、ついにライデンが振りかえった。
「見送りはここまでいい」
「いえ、シルビエンタは皇嗣様にご同行する決まりなのです。私も学園に……」
「どうしてシルビエンタが同行する？」
「学園内でのサポートも私たちの仕事だからです」
「シルビエンタは皇嗣に、朝から夜までひっついているのか？」
「はい。ご希望があれば二十四時間、ひっついています」
「二十四時間？」
「はい。二十四時間」

「……それは……夜もずっとという意味か？」
「あ、はい。ベッドのなかも、という意味です」
鈴蘭は小鳥がさえずるような声で答えた。
恥ずかしがりもせず「ベッドのなかも」と答える鈴蘭から、ライデンのほうが視線をさけた。
顔をくるっと正面に戻すと、鈴蘭から逃げるように足早に歩きだす。
「お前には羞恥心がないのか？　それとも奴隷生活を強いられて、羞恥心をなくしてしまったのか？」
ライデンは呟いた。鈴蘭はライデンについていくのに必死で、彼の独り言は聞こえなかったようだ。
少女がわずかに足を引きずっていることに気づいて、ライデンは歩くペースを落とした。
「ついてくると知っていたら車を使ったものを……」
「なにかおっしゃいました？」
背後から鈴蘭の声がした。
「足はもういいのか？」
「はい。骨に異状はありませんでした」
「痛まないのかと訊いているんだ」
鈴蘭が沈黙して、ライデンは大きくため息をついた。
彼女が答えにつまるときは、答えにくいことを尋ねられたときだ。

つまり、彼女は痛いとは言わないが、痛いのだ。今朝、ライデンの背中に追突したのも、ひょっとすると、足の痛みがあったからかもしれない。

「明日から車を使う」

「ほ、本当ですか!?」

「お前の怪我が治るまでだ」

鈴蘭の声と足音が、唐突に途切れた。

ライデンが振りかえると、そこには両手で日傘を握りしめ、突っ立っている少女の姿があった。

「どうした?」

「……私のため……なん…て……その」

鈴蘭の顔は、日傘の作りだす陰のなかにあった。

うつむき加減な姿から、木陰にある小さな白い花を連想する。

儚げで、どこか危なっかしい。

「行くぞ鈴蘭」

「はい、ライデン様」

名前を呼ばれ、鈴蘭は小走りでライデンの側に寄り添った。日傘のなかの銀色の瞳は、懐きはじめた子犬のようだ。

車道のほうでは、続々と「学園」に向かう高級車が、彼と鈴蘭を追い抜いていく。

なかには、わざわざ徐行して、ライデンを観察していく者もある。
「俺はサファリパークの虎か？」
車のガラスは遮光ガラスのようだ。こちらから中の様子は見通せない。
どんな皇嗣が、どんな顔でライデンを観察しているのだろうか？
防音のせいで、声も聞こえてこない。だが、ライデンはこう想像した。
「『あれが爽矢の後釜か』という会話が八割。いや、九割だな」
ほどなく白亜の西洋門と、博物館のような校舎が見えてきた。
校舎の前に噴水があり、高級車はその噴水を反時計まわりにまわりながら、正面で皇嗣たちをおろしていく。
ライデンは西洋門の手前で立ち止まり、校舎の奥に見えているドーム状の屋根に目をとめた。
「あれは？　室内競技場か？」
「いえ、合同会議場です。通称『コロセウム』と呼ばれています」
「コロセウムとは古代ギリシャの円形競技場のことだろう？」
剣闘士がローマ市民の余興として、決闘をさせられた場所のことだ。
どうして会議場が、コロセウムと呼ばれているのか？
ライデンはこのあとすぐに、知ることになる。

二章　対話（セッション）は、言葉にあらず

ライデンは鈴蘭に導かれ、コロセウムに向かった。
モダンな校舎に見えるのは、小会議室、データ管理室、喫茶室、医療室、リラクゼーション施設などで、いわゆる「教室」というものは、学園にないらしい。
授業がないのだから、当然といえば当然だ。勉強したい者は、余暇を使って独学するシステムになっている。
「お待ちください」
コロセウムの入り口で、プロポーション抜群の美女がライデンの足をとめた。
二十歳そこそこの妙齢で、病院の看護師のように髪を結いあげ、純白のユニフォームをつけている。もちろん、アルビノだ。胸のプレートには、「スタッフ」と刻まれているから、コロセウムの受付係のようなものらしい。
「武器の持ちこみは禁止されております。こちらでお預かりいたします」
「断る」

ライデンは即答した。譲る気配は皆無という面構えだ。
すると、受付係はどこかに連絡を入れた。
一分としないうちに、同じユニフォームを着たスタッフが続々とやってくる。女性だけではない。二、三人、男性のアルビノもいた。
円陣を組み、ヒソヒソと小声で話しだす。
ライデンはそのとき、異質なものを見るように、目を細めた。
白い羊の群れが、会議をしている。そんなおかしなイメージがしたのだ。
そこに、鈴蘭が黒い日傘をさしたまま、トコトコと近づいた。
「シルビエンタ・ミュゲです。『ホーム』に申告いたします。皇嗣様が持参しているのは貴重品です。とてもとても大切なものなので、お預けするわけにはいきません」
鈴蘭の申告で、また白い服を着た群れが話しはじめる。
おい、とライデンが鈴蘭の腕をひっぱった。
「連中はなにを話している?」
「協議をしています。全員で刀の持ちこみを認めるか否かを決めます。それがここのルールなのです」
美人の受付係が代表でやってきた。
「それは殺傷能力の高い武器ですか?」
「抜けばな」

とライデンは答えた。
「では抜かないとお約束ください。抜刀した場合、相応の罰を受けることになりますがよろしいでしょうか？」
「いいだろう」
彼女はニコリともせずに、戻っていった。
「愛想のない受付だな」
とライデンが言うと、鈴蘭は「スタッフは笑うことを禁じられていますから」と返した。
白い羊に見えた理由が、なんとなくわかった。
表情がないのだ。服も統一されていて、女性はみんな同じようなヘアスタイルだ。
相談ごとがあると集合し、輪になってヒソヒソと小声で話す。
同時に振りかえって見つめられでもしたら……背筋が寒くなるに違いない。
「連中はシルビエンタではないのか？」
とライデンは尋ねた。
「違います。シルビエンタは皇嗣様に宛がわれた者を指します。彼女たちはホームの所属です」
「役割が違うということか？」
「そうです。でも……お気に召すスタッフがいましたら、いつでもシルビエンタとして交換できます」
鈴蘭は自分の胸をさし、「チェンジ」とゼスチャーした。

シルビエンタやスタッフは、係の名称のようだ。
いつでも交換できるというから、どっちが「上」というわけでもないらしい。
お前は……とライデンは少々、冷たい口調で問うた。
「チェンジされたいのか？　昨日から、破棄だの交換だのと……」
「ち、違います。ルールをご説明しているだけです……！」
「俺の世話がイヤならはっきりそう言え」
「イヤじゃないです！」
鈴蘭が甲高い声をだした。その声が異様に大きくて、ライデンより本人がびっくりする。
「はっ！　申し訳ありません！　はっきり言えと申されたのでつい……でも、こんなに大声をだすつもりは……」
「自分で怒鳴っておいて、自分でびっくりすることはないだろう？」
ライデンは困ったヤツ、と言いたげな顔をした。
自己嫌悪に苛まれているらしい鈴蘭を置き去りにして、先にコロセウムのなかに入っていく。
だが入場してすぐ、彼は立ち止まった。視界に広がった光景に圧倒されたのだ。
そこは、まさに円形競技場だった。
だが、会議室でもあった。
階段状に設置された座席には、それぞれネームの刻まれたプレートが立っている。
テーブルもある。そのうえに液晶モニター。ミネラルウォーターまで置いてあった。

首脳会議でよく見かける風景だ。

違うのは、演説台がないこと。中央は、広々とした競技場になっている。

「こちらです。ライデン様」

鈴蘭が席に案内する。彼女は階段をおり、いわゆる一階席にライデンを誘った。

ライデンが座ると、鈴蘭も彼の背後に設けられた席に座った。秘書か補佐といった感じだ。

すでに、何十人もの皇嗣たちが席についていた。

全体的に若い。平均年齢は二十代前半だろう。皇嗣に年齢制限があるわけではないので、中には濃い髭を生やした三十代の男性もいる。みんな一様に黒の制服姿だ。

背後に控えるシルビエンタは、みんなモノトーンのメイド服。

黒と白の世界が、階段状に広がっている。異様に圧倒される光景だ。

「あそこの……テラス席の一群はなんだ？　あそこだけ、なにか違う」

ライデンの対角線上に、いかにも「特別席」といった一角があるのだ。ここが古代ギリシャなら、皇帝が座っただろう場所だ。

特別席の中央、奥に一人の男性が足を組んで座っている。奥まっているせいで、胸からうえはよく見えなかった。

その人物を囲むように、四人の皇嗣たちが集っている。

一様に軍帽のような黒い帽子を目深に被っているせいで、重苦しい雰囲気をかもしだしている。

「それに、武装しているな」
刀を持ちこんだライデンが言うのもなんだが、左右に立つ二人は、柄の長いメイスを持っていた。メイスとは棍棒の先に金属のプレートやスパイクがついたものだ。
中世では傭兵や騎士だけでなく、聖職者も用いているから、「武器」と括るのは早計かもしれない。
席にネームプレートはない。シルビエンタの姿すらない。
あれは……と鈴蘭は声をひそめた。
「アルクス・ケイン様と『七葉』のメンバーです」
聞き覚えのある名前に、ライデンの瞳に剣呑な光がやどる。
「北の巨大軍事国家『アンバー』の皇嗣か。いや、去年国王が病死して、繰りあげで国王になった男だな」
ライデンの席からは、顔は陰になっていて見えない。黒髪で白人。それぐらいはわかる。長い足を組んでいるから、背は高いだろう。
「アルクス・ケイン様は、カナリアで唯一、皇嗣ではなく国王陛下なのです」
王子ではなく王。鈴蘭はそう言った。
その圧倒的な存在感は、ライデンの席まで伝わってきた。
アルクス・ケイン。このカナリアで唯一、実際に国を治めている男だ。
非常に頭が切れるという噂があった。

徹底した実力主義者で、前国王の死後、大臣や官僚のなかで実力のない者を、すべて更迭したことは新聞に大きく載った。高官の汚職にはきわめて厳しく、発覚したら即、処刑。ついた二つ名が「若き独裁者」だ。

強気な外交手腕で、アンバーを急成長させている。

「七葉とは？」

とライデンが問う。

「学園にある特別なグループの名前です。実力のある『Sランク』の皇嗣様で構成されていて、中心のアルクス・ケイン様は、現在、もっとも『カイザー』に近い方です。七葉が七人集まれば、カイザーが誕生するという都市伝説みたいなのがあって……」

「学校につきものの怪談話か？」

都市伝説には苦笑するしかないが、学園を牛耳っているグループがあることは想像していた。集団生活の場では、必然的にそういうものができあがるのだ。

鈴蘭は学園内のランクについて説明した。

Sランクを筆頭に、A、B、C、Dの五段階にランク分けされているらしい。

これも「ありがち」で、ライデンの想像の範疇にあった。

「俺は一体どの……」

ランクなのだ？　と問おうとしたとき、始業のチャイムがなった。

午前九時ジャスト。皇嗣たちが雑談をやめる。

中央のフロアに整然とならんだのは、先程「白い羊」に見えたスタッフたちだ。
『それでは、これより本日のセッションを行ないます。メアトリア合衆国皇嗣、スタンレー・ファーナム様。そしてスカンジナビア共和国皇嗣、ラーシュ・エリクソン様は中央へ』
アナウンスで、二人の人間がコートに姿を見せた。
「セッションは通常一対一で行なわれます。このセッションに他国は干渉できません」
と鈴蘭はライデンに説明した。
「それより、どうして二人は防具をつけている？」
二人のうち、どちらがエリクソンでどちらがファーナムなのか、わからなかった。
二人とも似たような背丈のうえ、フェンシングをするような格好で登場したからだ。
「それは……ご説明申しあげるより、ご覧になったほうが早いかと」
すでに二人の男性は、中央で細い剣をかまえている。
それぞれのシルビエンタたちが、主人のかわりに握手をする。
その後、シルビエンタたちは、スタッフの列に加わった。
『はじめ！』
響いた声とほぼ同時に、剣と剣はクロスした。
カシャン！と、鋼の交わる音がする。
「あの剣、競技用のものじゃないだろう!?」
鈴蘭を振りかえると、ライデンは血相を変えて問うた。

遠目でわかりにくいが、護拳（ナックルガード）のついた、細身で両刃の刀剣に見えた。
「フェンシング用のものではありません。でも刃は磨（と）いでいないので、殺傷能力は低いです。また、イタズラに相手を傷つける行為も許されていません」
鈴蘭は平常通りの表情で、ルールの説明をする。
ライデンはさすがに、ついていけなかった。急いで、競技場の中央に視線を戻す。
左側の男が一歩、踏みこむ。足さばきからみて、フェンシングをよく知る者のようだ。
「ルールもフェンシングとは異なります。ここでは、フェンシングや剣道などを『剣術』と一まとめにしてあるのです」
右側の男が前に踏みこんだ。正眼にかまえ振りおろしたところをみると、剣道のフォームに似ている。
対する男は、その剣を弾（はじ）いて、相手の脇を突いた。
突かれた男が短く叫び、片膝（かたひざ）をつく。
「一本、決まったぞ」
とライデン。
「フェンシングならそうですが、ルールが違うので……」
「どうすれば勝てる？」
「相手の剣を弾いて落とすか、相手を場外に押しだすか、頭が床につけば『一本』です。でも剣術では、直接相手の身体に触れることはできません」

つまり、手で押しだしたり、蹴り倒したりすることはできないということだ。
「フェンシングや剣道といった、既存のルールを適用すると、皇嗣様たちに不公平になったのです。ですから新しいルールを。『セッション』は公平でなければなりませんから」
「なるほど。剣道しか知らない者にフェンシングで勝負しろというのは、不公平だということだな。だが、問題はそこじゃない。これのどこがセッションなんだ？」
ライデンは「根本的に、ここがわからない」という顔をしていた。
「セッションとは、世界秩序を取り戻すために必要な話し合いだろう？　公正で、平和的に行なわれるべきものだ。小国も大国も平等に意見が言えて……」
「『ネオ・エデン』計画の提唱によればそのとおりです。ただ、簡単に言うと……改正されたのです」
「改正って……これは対話じゃなく、スポーツでもなく、決闘だぞ!?」
それは、ライデンが想像もしていないセッションの実情だった。彼は昨日まで何の疑いもなく、「プリンス合同会議」のようなものを想像していたのだ。そう。重厚な雰囲気のなかに、ちょっと気品と優雅さを感じさせるような、だ。
試合は三分戦っては二分休憩というスタイルで、つづいている。
十ラウンド制。双方、二回まで作戦タイムがとれるらしい。
なにがどうねじ曲がってこうなったのか？
対話のはずが、決闘に「改正」とはどういうことなのか？

ライデンの脳裏には、忙しなく疑問が飛びかっている。
それとは別に、目前の試合は白熱していく。
勝敗の行方が、否が応にも気になりはじめた。
「うまいな……あの、左側の男。フェンシングのマスタークラスの腕前だ」
ライデンの口から、そんな賛辞がとびだした。
「彼はスカンジナビア共和国の皇嗣、エリクソン様です。ライデン様のおっしゃるように、フェンシング界では有名な方です。彼は七葉のメンバーでもあります」
アルクス・ケインの取り巻きの一人、ということだとライデンは解釈した。
「相手の腕も悪くないが……せいぜい剣道三段ぐらいだな」
「対戦しているファーナム様は、UGT前、日本に留学なさっていました。剣道の有段者だという情報も入っています」
「メアトリア合衆国の前身はアメリカ(スティッツ)だ。今はアンバーにおされているが、世界有数の先進国だ。国としては……負けられないな」
とライデンが呟くと、背後で鈴蘭は「お見事ですね」と小さく感嘆した。
「どっちがだ？」
「いえ、ライデン様がです。ぴたりと、相手の実力をお当てになりました」
「……おだてもなにもでないぞ、鈴蘭」
ライデンがちらっと鈴蘭の顔を窺(うかが)う。

「おだててなんて！　本当にそう思っただけです」
違う違う、と手のひらをパタパタさせて鈴蘭は否定した。
「ほ、本当に凄いなと……」
いつまでも手を団扇のようにパタパタさせている鈴蘭に、ライデンの表情がゆるむ。
それを見て、鈴蘭がポッと頬を上気させた。
「なぜ赤くなる？」
不思議そうにライデンが尋ねると、鈴蘭は恥ずかしげにうつむいた。
「そそ……それは……ライデン様が」
「俺が？」
「私に向かって、ほほ笑まれたから…です。もったいない……です」
答えてさらに真っ赤になる鈴蘭を、ライデンはどうあしらっていいものかと悩んだ。
ほほ笑んだつもりはなかった。苦笑……に近い顔なら、したかもしれない。
否定するか？　勝手に誤解させておくか？　束の間悩む。
悩んだ結果、バカバカしくなり、ライデンは無視することにした。
「この試合、長くなりそうだな。腕に差はあるが、相手を負かすまで打ちこむには時間がかかる」
かくして、ライデンの予想どおり、試合は長期戦になった。
試合の合間に、ライデンは鈴蘭からセッションの色々な情報を聞きだした。

「それで、いつ改正された？」
「セッションが対話から五種類の『勝負事』に移行して、三年たちます」
「五つ？」
「はい。『剣術』『格闘術』『棒術』『投擲術』です。あと知能戦として『Dチェス』があります」
と鈴蘭は答えた。
格闘術には、柔道、空手、ボクシング、レスリングなどが含まれる。
異種格闘技戦のようなものだな、とライデンは理解した。
ルールは剣術と同じく、カナリア独自のものらしい。
と、ここでブザーの音が鳴りひびく。五ラウンド目の中盤だった。
「メアトリア合衆国側のシルビエンタが、作戦タイムを申しでました」
鈴蘭の解説と同時に、会場内のムードが一気に緩和した。
観戦している皇嗣たちのほうも、相当肩に力が入っていたのだ。
作戦タイムは三分。その間に、複数の観戦者が中座した。トイレ休憩とは違うようだ。
「メアトリアが押されているな……」
背後からそんな囁き声が聞こえてくる。
「ああ、予想どおりだが。私はちょっと本国に電話してくる」
「私も行くよ」

皇嗣が連れ立ってコロセウムを抜けだす姿を眺めつつ、ライデンは問うた。
「この試合、負けたらどうなる？」
ミネラルウォーターを手に取り、鈴蘭の顔を窺う。
「負けた国は、勝った国の要求を一つ、聞き入れなければなりません」
「負けたほうは、泣き寝入りか？」
「すべての要求を公平に聞いていては、世界はなにも変わらない。皇嗣様たちは三年前、結論づけられたのです。対話によるセッションが打ち切られたのは、そういう理由なのです」
なるほどな、とライデンは呟いた。
皇嗣たちは長いあいだ対話を試みた。それこそ、公正に平和的にだ。きっとその頃は、ライデンの想像した「プリンス合同会議」に近いものだったのだろう。
だが、話し合いは堂々巡りする。公平に要求を聞こうとすればするほど、泥沼に足をとられたように見動きできなくなり……やがて、彼らは諦めた。話し合うこと自体を。
作戦タイムの三分は、瞬く間に終わった。
ライデンは口を閉ざした。背後にいる鈴蘭の存在すら忘れたように、試合に集中する。
始終優勢だったのはスカンジナビアのほうだ。
彼は優勢であるにも拘わらず、攻撃の手を緩めなかった。
メアトリアは、劣勢に回されても粘り強い。起死回生の一打を狙っているようだ。
息苦しい。ライデンには、どす黒い執念が剣先から迸っているように見えた。

露骨に顔を歪め、フロアの隅にたたずむメアトリアのシルビエンタを窺う。
すらっとした女性で、美しい長髪が印象的だ。鈴蘭より少し年長で、理知的な顔をしている。
彼女は片時も目を離さず、試合を見守っている。
劣勢なメアトリア合衆国は、もう一度、作戦タイムをとることができる。
その判断は、シルビエンタに委ねられているようだ。
相手のペースを崩し、わずかな隙を作るためには、そのタイムをいつ、どのタイミングでとるか？　これは非常に重要だった。
この決闘、知略も必要なら、パートナーシップも必要だ。
第七ラウンド。
メアトリアが、打たれて膝をつく回数が、目に見えて多くなってきた。場外に追いやられそうになる回数もだ。辛うじて躱しているが、荒い息づかいはコロセウム全体に響き渡っている。
もう、やめておけ。ライデンは心のなかで呟いた。
これ以上やるのは、残酷だ。
だが、スカンジナビアの皇嗣は、膝をおって自分を見あげる相手に、ピタリと剣の切っ先を向けたまま微動だにしない。
と思えば、目にもとまらぬ速さで相手の面をうった。
次に胴をうつ。ふたたび面を。もう一つ面を。
さらに脇を。

メアトリアの皇嗣が「畜生！」と罵る。
見ていられなくて、ライデンは観戦者を見回した。
誰も止めようとしない。鈴蘭すら平然と観戦している。
どこか変だと感じる。みんな、目が尋常ではない。
これはセッションでもなく、ゲームでもなく……決闘だ。
そう言った自分の言葉を実感する。
第八ラウンド。
始まった直後だった。場内があっ！　とざわめいた。
「突きでバランスを崩された！」
ライデンが久しぶりに言葉を吐いた。
メアトリアの皇嗣は、フロアのほぼ中央で大の字になって伸びている。倒れた拍子に頭をうって脳震盪でも起こしたのか、起きあがろうとしない。
「メアトリア合衆国が負けたぞ！」
周囲は騒然となった。
ライデンは終わってほっとした。
斬れない剣で一方的になぶり殺すような試合だった。とりわけ終盤は一種の私刑を見せつけられたかのようで、ずっしりと重い不快感が胃に残っている。
『皆様静粛に。ただいま、セッションの結論がでました。スカンジナビア共和国皇嗣、エリク

ソン様の勝利です。シルビエンタ・オルテンシア、異論はありませんね？』

美しい白銀の長髪を持つシルビエンタが、寡黙に頷いた。

そのあとすぐ、彼女は長い髪を乱して、伸びた皇嗣に駆けよった。

「オルテンシアは、負けたファーナム皇嗣のシルビエンタです。勝敗の意義申し立てをできるのは彼女だけです。混戦の場合、シルビエンタの発言はジャッジに大きな影響をあたえますが、今回は誰が見ても彼の負けですから」

「その審判は誰がしている？」

とライデンは問うた。

フロアでは救護班が駆けつけ、メアトリアの皇嗣を担架に乗せている。

「スタッフです。フロアにならんだ二十名のスタッフの総意で、勝敗が決まります」

公正といえば公正だった。

皇嗣には、ランクと派閥がある。シルビエンタも微妙な立場だ。

仕える皇嗣を持たないスタッフなら、審判も公正にできるというわけだ。

ライデンは、オルテンシアの姿を目で追っていた。

担架に乗せられた主人を見守る彼女の様子は、まるで実の妹か恋人のようだった。

敗者が退場すると、勝者であるスカンジナビアの皇嗣、エリクソンはフロアの中央で防具のマスクをとった。

彫りの深い北欧系の美男子だった。みごとなブロンドが、汗で額にはりついている。

長身のシルビエンタがタオルを持って駆けより、彼の額の汗をふく。
パシッ！　とエリクソンは、そのタオルをシルビエンタの顔面に叩きかえした。
「なんて乱暴な」
ライデンが思わず呟く。ところが他の誰も驚かないから、輪をかけて驚きだ。
エリクソンは審判をしていたスタッフになにか指示した。
「『決議』がでます」
鈴蘭の声とほぼ同時に、場内はしんと水を打ったような静けさに包まれた。
「決議とは？」
「メアトリア合衆国に対する要求のことです」
「勝者はどんなことでも要求できるのか？」
「『世界統一国家に向けて必要とされる要求』であればなんでも」
二人のスタッフが、演説台を運んできた。
フロアに演説台が設置されると、コロセウムは一変して会議場らしくなった。
「決議は、すぐにだす必要もありませんが、エリクソン様は、すでにお考えを決めておられるようです」
鈴蘭が言葉をきるとほぼ同時に、エリクソンは語りだした。
肩で息をしながらも、非常に滑舌がよい、しかもかなりの早口だった。
『私はメアトリア合衆国に対して次の要求をする。メアトリア・カナダ州西部「ホワイトホー

ス」における「北方支援軍事基地構想」の即時撤回を要求する』

場内はこの瞬間、どよめいた。立ちあがってなにごとか叫んでいる者もいるが、声に声がかぶって、なにを言っているか聞き取れない。

エリクソンはそっけなく退場した。長身のシルビエンタが、後を追いかけ走りだす。

「メアトリア合衆国の軍事拡張を阻止して一番得をするのは、アラスカを挟んで睨みあっているアンバーだな。というか、この決議、アンバー以外の誰が喜ぶ？」

ライデンは騒然となっている会議場で意見した。とはいえ、誰もその意見を聞いてはいない。コロセウムは喧々囂々といった雰囲気だ。

ふとライデンは気づいた。

「エリクソンは七葉のメンバーだと言ったな？」

「はい。ライデン様」

「なるほど。七葉はアルクス・ケインに利益を貢ぐ、腰ぎんちゃくというわけか」

裏事情は理解したが、納得できないという顔をライデンは作った。

セッションの決議は、世界に大きな影響力を与える。だから本来、私的な決議も利益供与もあってはならないのだ。

「七葉の目的は一つです。アルクス・ケイン様を『カイザー』に立てること。それが世界統一国家創立へのもっとも近道だと考えているからです」

「そういうふうに理由づければ、どんな要求も通りそうだな」

ちょっと嫌味っぽいライデンの言い方に、鈴蘭は押し黙った。
ライデンは鈴蘭を振りかえり、こう訊いた。
「こんなやり方で、カイザーが決まっていいのか？」
それは……と鈴蘭は口ごもった。またしても「答えにくい」らしい。
「私たちは、世界統一国家とカイザーを誕生させる礎です。カイザーが誕生することは、喜ばしいことなのです。逆に、いつまでもカイザーが生まれないと、カナリアは困るのです」
「と、言えと強制されているのか？」
「そうではありません。本当に、嬉しいことなのです。カナリアは、一日も早いカイザーの誕生を心待ちにしています」
「それが、軍事国家の君主でもか？」
「差別してはいけません。それはカナリアの絶対ルールです！」
鈴蘭は、ライデンの顔をまっすぐに見つめ、言いかえしてきた。
たしかに、差別はよくないとライデンも思う。だが、アンバーのやり方は、目に余るのだ。
最近ではアンバーの『イーリス』という平和維持部隊が、国連軍より幅をきかせている。
テロや暴動があると、蜜を求める蜂のように押しよせ、過激なやり方で鎮圧するのだ。
民主主義国のあいだでは、昨今、批判が相次いでいる問題だ。
ライデンはガシガシと、頭をかいた。
「まずいだろう、これは……」

ライデンの対角線上にいた、アルクス・ケインが立ちあがった。
ライデンは、遠目で彼の姿を見つめていた。いや、睨んでいた。
「？」
ふと、目を細める。向こう側で、アルクス・ケインも自分を見ているような気配がしたのだ。
「まさかな」
アルクス・ケインが退出した。
彼につづき、メイスを掲げた二人の皇嗣が、そして残りの七葉が順々にでていく。
ライデンも鈴蘭に誘われて、会場をあとにした。
コロセウムをでたところで、ライデンは深呼吸した。
湿度の高い南国の空気が、このときばかりは、心地よいと感じた。
カンカン照りの太陽もだ。心に巣くった濁りを、浄化してくれそうだったからだ。
「今日のセッションはこれですべてです。夕刻まで、学園でおすごしになることもできますが、ご帰宅なさいますか？」
「帰る。ムナクソ……いや、気分が悪い」
本当に胸がムカムカしていた。いくら深呼吸しても、気分は晴れない。
「あ、でも登校初日ですから、学園内をご案内いたしましょうか？　リラクゼーション施設もありますよ。イライラするときは、マッサージつきのアロマテラピーがお勧めです」
プールもあります。サウナも！　と鈴蘭は息を弾ませて勧めた。

きっとライデンが恐い顔で「どんより」していたからだろう。
「……お前に任せる」
ライデンは力なく呟き、鈴蘭に一任した。ピヨピヨと雛鳥が鳴くような彼女の声を聞いていると、そうすることが一番賢明な気がしたのだ。
「こっちです、ライデン様！」
おかっぱ頭の鈴蘭は、ライデンの前を走っては立ち止まり、手招いた。
ライデンはゆっくりした足取りで、鈴蘭を追った。
校舎のなか。中庭。プールサイドにデータ管理室。どこにいても、ライデンは注目された。
オリエンタルな容貌に赤い髪。それだけで充分人目をひく。
だが、彼は双子の兄、爽矢の後継としてカナリアにきた皇嗣だ。
「似ているな……そっくりだ」
「頭の中がどうかはわからないが」
「中身がもぬけの殻だとありがたい」
「あの刀、ホンモノか？　伊達じゃないのか？」
帯刀していたことも、人の視線を集めていた。
だがライデンは他人の視線もヒソヒソ話も一蹴した。
彼が見つめているのは、前を走っては止まり、自分を手招く鈴蘭だけだ。
彼女だけを見ていれば、心はカナリアの空のように爽快でいられるような気がした。

「走るな鈴蘭」
ライデンが命じたそのとき、前方で鈴蘭が転んだ。
みろ言わんことか、と呟いてライデンが駆けよる。
「お前は……自分が足に怪我をしていることを忘れているぞ」
と軽く注意して、ひっぱって助け起こす。
ライデンにとっては自然なことだったが、鈴蘭はびっくりして飛びあがった。
「ひゃっ……ラ、ライデン様……お放しください！　おおお、恐れ多いことです。スタッフに見られたら、げ…減点されます」
「なぜ？」
「自分の不注意で皇嗣様にご迷惑をかけたら、減点なんです！」
鈴蘭が甲高い声で叫ぶから、ライデンは手を放した。
鈴蘭は、はぁはぁと息を荒げ、真っ赤になっている。
「アロマはいい。帰ろう、鈴蘭」
ライデンは踵(きびす)を返した。
「ライデン様？　ご気分を害されたのですか？」
「いや、反対だ。お前を見ていたら、なにに腹を立てていたのか忘れた」
半分は本当だったが、半分は嘘だった。アルクス・ケインと七葉のことは、忘れていない。
とはいえ、気分はコロセウムをでた直後よりずいぶんマシだった。

「ライデン様、こっちが近道です！」
来た道を戻ろうとするライデンに、鈴蘭は右側の小道をさした。
「北側の通用門からだと、ライデン様のお屋敷まで歩いて五分なんです」
「そういうことは、朝に言え」
とライデンがつっこむ。
「すみません。ルールで、登校は正門からと定められているのです……」
北門は、群生した巨大なソテツの向こうにあった。
鬱蒼としたジャングルが、間近まで迫っている。
しだれるソテツの葉の下で、自分が小人になったような不思議な感覚がしてくる。
人工島とはいうが、建設されて五年。
樹木はすでに、天然のジャングルと違わぬほど豊かに茂っているのだ。
「……まえは！　役立たずめ！」
ライデンと鈴蘭は、ほぼ同時に足をとめた。
群生するソテツの向こうから、人の怒鳴り声が響いてきたからだ。
ほんの少し位置を変えると、葉の陰から二人の男女の姿が見えた。
アルビノの美女には見覚えがあった。美しい長髪に理知的な顔をした、シルビエンタ・オルテンシアだ。となると男性は――
「メアトリア合衆国の皇嗣、スタンレー・ファーナム様です」

と鈴蘭がそっと耳打ちする。

先刻セッションで敗れたスタンレーは、明るいブラウンの髪をした青年だった。歳は二十四、五ぐらい。衣服のうえからでも、ほどよく筋肉質であることがわかる上半身。なんとなくアメフトの選手といった印象がした。

ニコリと笑えば、抜群の好青年だったろうに、彼の青い瞳は怒りに満ちていた。

「どうして俺をフォローしないんだよ！」

と唾をとばして怒鳴る。

「しかしご主人様。今日のセッションでは、誰がどう見てもあちらの勝ちでした。私は、嘘の申し立てはできません。それをすれば、殺処分に……」

オルテンシアは、姿勢よく直立し、そう明言した。

「たとえ殺されようと、己れの皇嗣をたてるのがシルビエンタの仕事だろう!?」

スタンレーがシルビエンタを突き倒す。

「お前があそこでタイムをとっていれば勝てたかもしれないのに！　お前のせいだぞ！　オルテンシア！」

オルテンシアはソテツの陰に蹲ったままだ。

そのシルビエンタを、スタンレーは蹴った。何度も何度も……。

「お前の、お前の、お前のせいだ！」

容赦のない暴行に、さすがにライデンが動いた。

すると鈴蘭は彼の前に立ちふさがり、無言で頭をふった。
「助けるなというのか？」
とライデンが驚きつつ囁く。
「止めてはいけません。彼はシルビエンタ・オルテンシアになにをしてもいい権利を持っているのです」
「自分が負けたのは、相手の剣技が勝っていたからだ。シルビエンタのせいじゃない」
「そんなことは、彼もわかってます。負けて悔しいから、八つ当りをしているのです。この島で彼が八つ当りできるのは、オルテンシアだけです」
「理由になっていない……！」
「いいのです！　私たちシルビエンタは、この孤島で皇嗣様がよりよい精神状態を保つために、精一杯のことをしてさしあげるのが仕事です」
「……」
「止めてはいけません、ライデン様。ここは『カナリア』です。カナリアには、カナリアのルールがあるのです」
と鈴蘭は真摯なまなざしで、ライデンに訴えた。

三章　カイザーランドの黒と白

カナリア。

『UGT』の被災者、後天性アルビノが保護されている人工の島。

と同時に、世界中の皇嗣が『ネオ・エデン』計画のため、召喚されている島だった。

皇嗣たちにはセッション、すなわち「世界を救済するための、公正で平和的な話し合い」が義務づけられている。

彼らはセッションを繰りかえしながら、一人のカイザーを選出する。世界統一国家の初代帝王となる人物を。皇嗣たちが一つになることで、世界が一つとなるのだ。

だから皇嗣のなかには、カナリアを『カイザーランド』と呼ぶ者もいるらしい。

カイザーが選出されれば、皇嗣はその時点で「卒業」できる。

だが、カイザーが誕生しないかぎり、皇嗣たちは島から解放されない。

期限は十年。

残り時間五年、というところで雷電・E・シャフトはカナリアへ来た。

「五年前、学園が創設された当時、皇嗣様たちは真剣に『世界を混乱からどう救うか？』を議論していたそうです」

と鈴蘭は語った。彼女も三年前にここへ来た身だ。五年前のことは、情報として知っているだけだった。

一つの提案がなされると、セッションはたいてい賛成派と反対派に分かれたという。

「まぁ、ありえる話だ」

白熱した議論は口喧嘩になり、口喧嘩が乱闘になった。

そのうち、だれもが「世界のため」ではなく「自国の利益のため」に発言しはじめた。

これもありえる話だ。だが、ライデンは密かに失望した。

「それじゃ、首脳クラスのジイさんと変わらないじゃないか」

人々が若い皇嗣に未来を託したのは、私欲にまみれた大人たちでは、世界は救えないと思ったからだ。

「なのに、結局、二の舞か」

手に持っている象牙の箸で、皿の端をつつきながら、ライデンは考えた。

結論のでないセッション。

若い皇嗣たちは世界中から批判を受けた。

本国は「なにをしている！」と彼らをせっつく。

目に見えない重圧が、彼らを焦らせ、狂わせたのかもしれない。

ただでさえ、十代の皇嗣が多かった。
爽矢も十三歳で召喚されている。あのアルクス・ケインですら、十代後半だった。
「対話によって、世界統一国家ができあがるというのは理想でしかないと、皇嗣様たちは判断なされたのです」
と鈴蘭。それが三年前のことだ。
セッションは対話ではなく、勝敗が明確になるスポーツやゲームに移行していった。
勝者には自分の意見を主張する権利が与えられ、それによって、膠着した世界情勢は少しずつ動きだしたのだ。
「ライデン様、もっとお召しあがりになりますか？」
小さなせいろを手にした鈴蘭が、ちょっと首を傾げて問うた。
正午すぎだった。帰宅したライデンは今、軽い昼食をとっているところだ。
「いや、もういい。このフカヒレしゅうまいは、うまかった」
「それ、冷凍食品です」
「……無理して誉めるんじゃなかった」
「え？」
「なんでもない」
ライデンはちょっと不貞腐れた。冷凍、と言われては誉めた甲斐がない。
「アイスコーヒーを頼む」

「はい、ライデン様」
鈴蘭が一礼して下がると、ライデンは兄、爽矢が造った石庭を眺めた。
「セッションが勝負事に移行して三年か。爽矢も戦っていたのか……」
ここにいた「爽矢」がどんな青年だったのか、ライデンには想像できなかった。
理由あって別々に暮らしていたから、ライデンは爽矢を知らないのだ。
姿は似ているらしい。他の皇嗣が「そっくりだ」というから、そうなのだろう。
帯刀はしていなかったみたいだ。
頭はよかった、といった意味の言葉を聞いたような気がする。
ライデンは鈴蘭を呼んだ。
「ご用でしょうか？　ライデン様」
鈴蘭が濡れた手をエプロンでふきながら、キッチンから駆けてきた。
「爽矢の学園での戦績を調べたい」
「ご自宅用のパソコンから調べられます」
と言うと、鈴蘭は書斎からノートパソコンをとってきて、すぐさま操作しはじめた。
「UGT前の遺物だと思っていたが、ここはパソコンが使えるのか？」
「ネットワークはカナリアのなかだけです。情報もカナリアのことだけに限られています」
UGTのとき、地磁気が乱れて世界の情報を管理していたネットワークシステムは完全にダウンした。

今やインターネットは死語だ。先進国数ヵ国は、自国の情報を再度データ化し、管理しようとしているが、まだまだ実用化には至っていない。

当然、携帯電話も死語だった。皇嗣たちは衛星電話を持っているが、一般に携帯は普及していない。有線しか使えない。地域によっては、有線も使えない。

電子メールも使えなくなったから、デパートの文具売場では「便箋」が飛ぶように売れている。廃材利用の粗悪品でも、UGT前の十倍の値段がつくのだ。

「でましたライデン様」

ライデンは細かい統計表を見つめた。とたん、「えっ」と一声、眉間をひそめる。

「なんだこの数字は？　六十七戦六十五勝？　二引き分け」

それが爽矢のセッションの戦績だった。

「これで全部か？」

「残っているのはこれですべてです。セッションが対話から勝負ごとへ移行して一年は、ルールも今のように確立していませんでした。ですから、データも残っていません」

「ではここ二年の戦績が、これなのか？」

「そういうことです」

「六十七戦は多いのか？」

「多いです。六十五勝、ゼロ敗は……すばらしい数字です」

「どうしてこんなに素晴らしい勝ち星なのに、『東ア連』はいつまでも貧民国なんだ？」

これは鈴蘭に対する質問ではなく、亡き爽矢に対する質問だったのかもしれない。
東アジア連合共和国は、人口十億という世界最多国だ。領土も世界第一位だ。
だが、貧富の差は激しく、推定、二千万人の貧困層を抱えている。
冬場の餓死者も世界最多。これは自慢できることではない。
先進国ではなく、途上国。途上国のなかでも、貧民国と呼ばれている。
「これだけ勝っていて、どうして自国に利益らしい利益がないんだ？」
「あの……ライデン様」
首を傾げるライデンに、鈴蘭が恐る恐る声をかけた。
「あの……申しあげたいことが」
「なんだ？」
「先の皇嗣様のことですが……彼は最高位のSランクでした」
ふと、ライデンはパソコンから顔をあげ、鈴蘭を窺った。
「学園内の五段階のランクづけも、確立されたのは、一年ほど前なのですが」
「鈴蘭、簡潔に言え。俺はまだるっこしいのは嫌いだ」
言いづらそうにする鈴蘭に、ライデンは命じた。
「はい、ライデン様。そ、爽矢様は『七葉』のメンバーでした」
「……！」
ライデンは、言葉を失った。

鈴蘭が語ることを別の言葉に置き換えたなら、「爽矢はアルクス・ケインに利益供与していた」ということだったからだ。

＊

午後六時。全世界に向けて、今日の「決議」が通達される。
カナリアの高層タワー『ホーム』から、衛星を経由し、全世界に向けて発信されるのだ。
『本日の決議は一件です。皇嗣様がたの公正なセッションにより、一件の決議がくだされました』
「公正な決議ね……。俺はこの言葉にずっとだまされていた気分だ」
とライデンは、西日が差しこむリビングで呟いた。
内容は、皇嗣たちの屋敷に備えつけられた小型スピーカーからも流れている。
『これは全世界における最優先事項です。該当の国はすみやかにこの決議に従ってください』
聞き慣れた定形文だった。ライデンも本国で何度も聞いている。
逆らうことなかれ、ということだ。
『メアトリア合衆国は、カナダ州「ホワイトホース」における「北方支援軍事基地構想」を見直してください。繰りかえします。メアトリア合衆国は……』
カナリアの外にでる情報は、このメッセージだけだ。

まさかセッションが決闘形式になっているなど、一般人は知りもしない。
みんなで話し合った結果、軍事基地は必要ないと判断された、というふうに解釈されるのだ。
『世界平和のために、今後もセッションの決議を尊重してください。決議の内容を軽視あるいは無視した場合、あらゆる例外なくセッションに参加する権利を失います。また、過激な暴力や、他国への逆恨みはしないように心がけましょう。ご清聴、ありがとうございました』
聞き慣れた定形文で、放送は終わった。
同日、カナリア時間、午後十一時五十九分。
メアトリア合衆国は、軍事基地の建設中止を発表した。
北の軍事国家アンバーに睨みをきかせる目的で、すでに莫大な予算を投資していた合衆国にとっては、一片の利もないことだった。
この直後、メアトリア合衆国では、人々の不満が爆発する。
大統領官邸の門に、無数のビラがはり付けられた。「能無し」「役立たず」「皇嗣を替えろ！」などというものだ。
また、一部の地域で暴動が発生。ショッピングセンターが荒らされ、火がつけられた。
国の治安部隊は、すぐさま暴動の沈静化をはかった。
まごまごし、暴動がテロに発展すると、国連軍が介入してくる。国連軍ならまだいい。アンバーの治安部隊『イーリス』が介入してくることだけは、阻止したかったのだ。
追い討ちをかけるように、メアトリアの通貨相場が下落した。

また、メアトリアと友好関係にあったカスタミア三国が「中立」を宣言。これをうけて、軍事国家アンバーがカスタミア三国に会談を要請した。

一夜にして、メアトリア合衆国は窮地にたつことになったのだ。

「……これがカナリアの恐ろしさか」

ライデンは実感する。

カナリアで行なわれる「決議」が、世界を動かしている。

だが、セッションの実体を知ったら、人はなんと言うだろう？

『ネオ・エデン』計画は、すぐに廃止だと言うだろうか？

ライデンは頭をふった。

「それはできない。そんなことになったら、今まで従属してきた人々の不満が一気に爆発する。下手をしたら世界大戦が起こるぞ」

カナリアは無くせない。

カナリアの真の恐ろしさは、「歪んでいるとしても、秘して存続させなければならない」ということに他ならなかった。

*

カナリア時間、午前八時四十五分。

朝日とは思えない強い日ざしに目を細めながら、ライデンは北門を潜った。
左手に一振りの日本刀を携え、黒のジャケットを着用している。
無言で巨大なソテツの下を歩く。その後ろを、日傘をさした鈴蘭がついてくる。
登校二日目にして、ライデンは正門登校のルールをやぶっていた。車で登校したくないが鈴蘭の足も気になる。悩んだ結果、こうなったのだ。
メアトリア合衆国が大騒ぎになっている今日も、カナリアでは新たなセッションが行なわれる。皇嗣たちは今日も決闘を繰りかえすのだ。
「眼帯、とれてよかったな」
前ぶれもなく、ライデンは鈴蘭に声をかけた。
ちょっとびっくりした鈴蘭が、真っ赤になって「はい」と答える。
足のほうはまだテーピングされているが、包帯はない。若いからか、治りは早いようだ。
ライデンがくるっと振りかえると、鈴蘭は首をすくめるような仕草でうつむいた。
「どうしてすぐ、お前はうつむく？」
よほど不思議だったのか、ライデンは問うた。
「き、緊張して……」
「俺は威圧的か？」
「少し。あ、でも恐ろしいという意味ではないんです。ライデン様はいつもキラキラしていて、お顔を拝見するのはもったいないっていうか……」

鈴蘭の理屈は、ライデンに理解できなかった。第一、「キラキラ」とかいうところからして、理解の範疇外だ。

恐くないなら、うつむくなと命令しようとしたそのとき、第三者の声がソテツの向こうから響いてきた。その声こそ威圧的で、ライデンも鈴蘭も立ち止まることになる。

「いいか！　なんとしても『イーリス』のクソ野郎だけは入れるな！　デモ!?　そっちは俺のせいじゃない！　反体制派の便乗抗議まで手に負えるか！　ああ、わかっている！　わかっているよ！　人のことだと思って、簡単に言うな！」

顔を確認するまでもなく、相手は想像がついた。

メアトリア合衆国の皇嗣、スタンレー・ファーナムだ。

「見ろ！　お前のせいで、メアトリアは大混乱だ！　お前のお前の！」

ライデンは不遇な鉢合わせに、ため息をついた。

そのライデンの足元に、長髪の美女が突きとばされて登場する。

シルビエンタ・オルテンシアだった。

「お前のせいだ！　お前があのときタイムを申請していれば……」

オルテンシアの背後から、明るいブラウンの髪をした、肩幅の広い青年がでてきた。

彼はライデンには気づかず、オルテンシアの長い髪を鷲摑みにした。

キャッ！　と短い悲鳴をあげて、アルビノの美女がのけぞる。

「破棄してやる！　お前なんか殺処分されればいいんだ！」

スタンレーの声も表情も、すでに正気ではなかった。
先刻まで、彼は本国と電話で話していたのだろう。
プレッシャーをかけられていたらしい内容は、ライデンも聞いていた。
抱えきれないほどの重圧に、彼は極限まで追い詰められているのだ。
唾をとばして罵るスタンレーに、ライデンは静かに声をかけた。
「あのときタイムをとっていても、相手の優勢は変わらなかったと思うが？」
なに!?　と怒鳴って、スタンレーはライデンを睨みつけてきた。
「誰だ、貴様!?」
カナリアの空のような目をひん剝いて、スタンレーが問いただす。
「雷電・E・シャフト」
そっけないほど端的に、ライデンは自己紹介した。
自分の顔を見れば、プロフィール的なことは簡単に推測できるはずだったからだ。
「死んだ爽矢・E・シャフトの後継か？」
「そうだ」
「新参者が……邪魔をするな！」
「邪魔をしているのはそっちだ。どいてくれ」
スタンレーは鬼のような形相になった。たしかに、ライデンの進む道に乱入してきたのは、オルテンシアとスタンレーだ。だが、それを口にしたことで、スタンレーはさらに憤った。

「ライデン様……ライデン様」
ライデンの上着の袖をつまんで、鈴蘭は囁いた。
「こちらに迂回する道があります」
「どうして俺が道を譲らなきゃならない？」
「衝突を回避するためです。私闘は厳禁です。ひどい罰を受けることになります」
ライデンに私闘をする気はなかった。口喧嘩すらしたいと思ってはいない。
ただ、オルテンシアという美女のことは、気の毒だと思っていた。
ライデンは動かない。自分が迂回することに、納得できなかったのだ。
そのとき、オルテンシアは立ちあがった。
彼女は髪を摑まれたまま、スタンレーの身体を脇に押しだした。
優しげな銀色の瞳で、ライデンを見つめる。
「行ってください。早く！」
彼女が身をていして、道をあけたことをライデンは理解した。
「オルテンシア！　お前！」
スタンレーが激怒している。オルテンシアはこのあと、ただではすまないだろう。
「早く！」
オルテンシアの声に反応して、鈴蘭がライデンの前にでた。
失礼します、と断りを入れると、ライデンの手を摑んで引っぱりだす。

「ライデン様、お早く！」
鈴蘭の必死な様子に負けて、ライデンは足を動かした。
足早に、スタンレーの横を通りすぎる。
「貴様も……今にわかる！　ここに一年、いや、半年もいれば、発狂したほうがどれだけマシかわかってくる！　爽矢・E・シャフトのように、お前もさっさと、くたばりやがれ！」
下町の不良のようなスラングまじりの言葉で、スタンレーはライデンを罵った。

*

カナリアも皇嗣たちは、五年のあいだにすっかり変わってしまったのではないか？
スタンレーの罵倒を聞いた翌日、ライデンはそんなことを考えた。
五年前といえば、爽矢は十三歳。スタンレーも二十歳になったばかりだ。
カナリアの外は「限界状況」と呼ばれていた。
プリンスがブランドものの服を身につけ、芝生のうえで愛犬と戯れるなんていうのは、童話かファンタジー小説のなかだけの話だ。国を守るため捨て身の外交をする、それがこの時代のプリンスだった。
それでも貧しい人々は、路上で動物のように死んでいく。アルビノは迫害されつづける。
官僚は汚職と賄賂にまみれ、暴徒と化した市民が、あちこちで過激派グループをつくる。

内乱が起こり、さらに多くの死者がでる。
UGTの犠牲者は約二億五千万人。UGT後の動乱における犠牲者は、一年でその三倍だ。
そんななか、国内の統制がもっともとれていたのは『アンバー』だった。アンバーは北半球の極寒地にある王国だ。気温や地熱の上昇による被害は少なく、内陸部にあるため、水害も及ばなかった。
軍拡をおしすすめる国王が三代つづき、アルクス・ケインで四代目である。
「ここはピョートル大帝の夏の宮殿か?」
カナリアにあるアルクス・ケインの住居を見たとき、ライデンはそんな嫌味の一つも言いたくなった。
目の前には、大きな白亜の噴水が三つ、縦に並んでいる。サッカーができそうな前庭だ。
その向こうに見えているのが「玄関」らしい。
「こんなでかい屋敷、シルビエンタ一人では管理できないだろう?」
と呟くと、背後から鈴蘭が小鳥のような声で答えた。
「お屋敷の管理は『ホーム』に頼めば、スタッフを何人でも貸してくれます」
「俺は4LDKあれば充分だ」
負け惜しみのように呟くと、ライデンは速度をあげ、庭をスタスタと歩きだした。
スピードをあげたライデンのあとを、鈴蘭が小走りについてくる。
今日のライデンは、目が覚めるような青のパオを着ていた。

手には、漆塗りの鞘におさまった日本刀。この刀はいつでも彼の左手にある。
まるで鈴蘭が日傘を持って外出するのと同じように、彼は刀を持って外出するのだ。
三つ目の噴水をすぎたとき、重厚な玄関の扉が開いた。
「やぁ、いらっしゃい」
顔をだした北欧系美男子を見て、ライデンは歩みをとめた。
スカンジナビアの皇嗣。先日、剣術で勝利したエリクソンだ。
七葉のメンバーで、アルクス・ケインの取り巻きの一人だった。
以前見たときは、額に金髪がはりついていたが、今日は毛先がカールしている。おまけに、縁なしメガネをかけていた。
暑いのに、ネクタイをしめ、夜会用かと思われるスーツ姿だ。一見するとスポーツマンというより、芸術家に分類したくなる容姿だ。
「来てくれてよかった。迎えにいくのは、億劫だからね」
とエリクソン。やや早口だが、スラングのない流暢な英語だ。
「古式床しい招待状をもらったからな」
ライデンは一通の封書を取りだした。
蠟づけされた封書の中身は、アルクス・ケインからの「呼びだし」だ。
行きたいとは思わなかった。だが、無視するとあとあと面倒になる気がした。
「なぜ、ここにいる？　ここはアルクス・ケインの屋敷だろう？」

とライデンは尋ねた。
「君の接待を仰せつかった」
「皇嗣がシルビエンタの真似事か？」
痛烈な皮肉にも聞こえるライデンの言葉を、エリクソンは微笑で受け流した。
彼には強者特有の余裕があった。さすがSランクの皇嗣、というところだ。
「そのシルビエンタが使えないから、私がここにいる」
「使えない？　アルクス・ケインのシルビエンタは、使えないほどマヌケなのか？」
「想像にお任せするよ」
どうぞ、というようにエリクソンは優雅に手招いた。
仕草が一流の執事のように様になっている。
ライデンが一歩前にでると、エリクソンはライデンと鈴蘭のあいだに、すっと割って入った。
「アルビノはだめだ」
メガネ越しに、エリクソンは鈴蘭を見下ろした。
冷たく、侮蔑するような視線に、鈴蘭が怯えて一歩下がる。
「で、でも……シルビエンタは、ご主人様のお側を離れるわけには……」
「アルクス様はアルビノがお嫌いだ。入ったら、でてこられないぞ」
脅迫まがいのセリフに鈴蘭が震えあがった。
「先に帰っていろ、鈴蘭」

ライデンは怯える鈴蘭に告げた。
「でもライデン様……！」
「命令だ」
ライデンに押し切られ、鈴蘭が渋々、一礼する。
エリクソンがすっと、ライデンの左手にある刀を指した。
「武器の持ちこみは遠慮したまえ、雷電・E・シャフト。これは招待された客人の礼儀だよ」
エリクソンに言われて、ライデンは刀を鈴蘭の胸に押しつけた。
「持って帰れ」
「……わかりました」
鈴蘭はその刀を、両手でひどく重そうに持った。
何度も振りかえりながら、広い前庭を一人で戻っていく。
「こっちだ。雷電・E・シャフト」
エリクソンはフルネームで彼を呼び、美術館のように絵画が飾られる広い廊下を案内しはじめた。
旧エルミタージュ美術館から買った、本物の美術品らしい。天井を見れば、白壁に金の蔦がからんだような美しい装飾が施され、その装飾と一体化したようなシャンデリアがぶら下がっている。
アルクス・ケインの居城。そう。まさしく、ここは「城」なのだった。

「あのシルビエンタのこと、鈴蘭と呼んだね。名前をつけて遊ぶのが君の趣味なのか？」
絵画の紹介の合間に、エリクソンは尋ねた。
「別に……趣味じゃない」
「いいさ。シルビエンタをどうしようと皇嗣の自由だ。だが、忠告しておく。あまり情を移さないほうがいい」
「……」
ライデンはふと思い出した。エリクソンが試合で勝ったときのことを。
額の汗をふこうとしたシルビエンタを、彼は邪険に追い払った。
「あんたはシルビエンタが嫌いなのか？」
とライデンは問うた。
「私は生きた人間のほうが好きだ。あれはホームの人形だからね」
広い廊下を折れ、中庭を眺め、二階への階段をのぼった。
ふたたび、長い廊下をつきあたりまで歩く。そこに奥の間へとつづく扉があった。
金色の縁がある白い大扉だ。その大扉を守護するように、二体の彫像がある。神話に登場する軍神かなにかのようだ。
「ついたよ。もう一つ、忠告しておこう。アルクス様には逆らわないほうがいい。彼はこのカナリアでもっともカイザーにふさわしい方だ。私はそう確信している。君もやがては……それを認めることになる」

どうぞ、というようにエリクソンは扉を開けた。
自分は入らず、ライデンだけ入室するよう促すと、執事のごとく扉をピタリと閉める。
退路を閉ざされたような気分がしないでもなかった。
が、ライデンは後ろを振りかえらず、まっすぐ前を見た。
白壁を覆いつくすようなタペストリーが、四面すべてに飾られている。その緻密な織物のせいか、部屋の雰囲気はやや薄暗い。
天井には巨大な絵画と、金のシャンデリア。
どことなく圧迫されるような広間だった。
ここが城だとするなら「謁見の間」なのかもしれない。
部屋の向こう端、巨大なタペストリーの前に、軍服姿の男性がいる。浅葱色の軍服は、軍事国家アンバーのものだ。凝った装飾や胸の階級章、襟章の数々は最高指導者の証なのだろうか。
髪の黒さに反比例する白い肌。アルビノに劣らぬ雪のように白い肌だ。
艶やかな、黒い髪。黒く長いまつげ。
「華」のある男性だった。完成された美しさのなかに、大人の男性独特の色気がある。
整った顔立ちのなかで、一際目をひくのが、彼の瞳だ。
片方はエメラルド色。
片方は……サファイアだ。
あまりに鮮やかな色合いだったため、ライデンは「カラーコンタクトか？」と疑った。

にゃー……。

と彼の膝元で鳴き声がした。

玉座と呼ぶべき最高級の椅子に、足を組んで座っているアルクス・ケインの膝元には、一匹の白ネコがいた。

尻尾の先まで真っ白。おそらく、アルビノだ。

アルビノが嫌いなんじゃなかったのか？　とライデンが心のなかでつっこむ。

くすっと笑い声がして、ライデンはようやく部屋の奥に立っている女性に目を移した。

こちらは黒檀の肌を持つ、ミステリアスな美女だった。瞳が金色で、床にとどくほど長い金髪をしている。鮮烈なインパクトだ。まさに金色の豹といった感じだった。

大きく肌が露出したドレス姿で、金の装飾品を両手両足にたくさんつけていた。額や胸にもだ。彼女が少し動くたびシャラシャラと音がする。

まるで彼女自身が、この部屋の装飾品のようにさえ見える。

「ようこそ。雷電・E・シャフト君」

君づけで呼ばれ、ライデンはふたたびアルクスのほうを見つめた。

低く、ハスキーな声だった。もっと厳格な声だと思っていたが、口調には和らか味がある。

ライデンの頭のなかでは、さっきから警鐘が鳴っていた。

露骨に非現実的なのだった。

白ネコもおかしい。女もおかしい。アルクス・ケインの側にあるには、不自然すぎる。



取り揃えられた不自然さに、現実離れした宮殿の景色。
ところがすべて一緒にあると、おかしいはずが、奇妙にマッチして見えてくるのだ。
「爽矢にそっくりだな。そうやって立っていると、彼が生き返ったのかと思うほどだ」
「雑談する前に、二、三訊きたいことがある」
切りこむようにライデンは発言した。
にゃー、とまたネコが小さく鳴いた。
「なんだろう?」
「その目、カラーコンタクトなのか?」
「……」
最初の質問がこれで、アルクス・ケインはわずかに目を細めて沈黙した。
「君は来て早々、人の容姿を攻撃するつもりなのか?」
「……」
今度はライデンが押し黙った。そういうつもりで問うたのではないと言おうとして、途中で「うまく逃げられた」と気づいた。
こう返答すれば、コンタクトなのか生まれつきなのか、答えなくてすむのだ。
「そのネコはアルビノだろう? アルビノは嫌いだと聞いたが?」
これがライデンの二つ目の質問だ。
「そう、嫌いだ。イライラしたとき手元にあるものを壊すクセがあってね。人や美術品にあた

るより、ネコをくびり殺すほうがいい。だから、手元に置いている」
和らかい声質で、残酷な答えをアルクス・ケインは口にした。
クスクスクス……と美女が笑いだした。しなやかな足取りでアルクス・ケインの脇に立つ。
ライデンがその美女を見つめる。
「彼女はエイカ・スー。アフリカのラステア王国の姫君だ。皇嗣としてここに来たが、二年前国が無くなった。以来、私が保護している」
「ラステアを滅亡においやったのはアンバーだろう?」
ライデンはズケズケと指摘した。
「それは違う。ラステアはひどい内戦に陥っていた。イーリスが介入した時点で、もう国は滅んでいたも同然だった」
「で、アンバーは国の自治権をとりあげ、暫定政府をつくったというわけか」
現在、ラステアは国名を失い「アンバー自治区」と呼ばれている。
世間では「アンバーに強引な内政干渉を受け、滅んだ王国」と見ているのだ。
見解の相違はともかく、エイカ・スーが国をとりあげたアンバーのアルクス・ケインの側にいることに違いはない。それも、これはどう見ても、ただならぬ仲というやつだ。
「私のこと、調べたかね?」
とアルクス・ケインから質問が返ってきた。質問というより尋問に聞こえたのは、軍服のせいかもしれない。

「一通りは」
「具体的に言いたまえ」
「カナリアでの戦績は、十五勝ゼロ敗、ゼロ引き分け。数は少ないが、戦績はトップだ。あんたにセッションを挑み負けた国は、ことごとく滅び『アンバー自治区』になっている。ここ一年は、セッションを申しこまれることもない。負ければ十六ヵ国目になるからな」
「間違ってはいない。つづけて」
「自分からセッションを申しこむ必要もない。七葉が代行し、少しずつアンバーに反抗的な国の弱体化をはかっている。目下、『カイザーに一番近い男』と呼ばれている」
と淡々と語ったあと、ライデンはまた不躾な質問をした。
「ところで、あんたはアンバーの現国王だ。カナリアをでられないのに、どうやって国を治めている？」
「それは国の最高機密だ。教えるわけにはいかない」
「そうか。それもそうだな」
ライデンは回答を拒否されたにも拘わらず、納得の表情を浮かべた。ズケズケ訊くが、あっさりしているところが彼らしい。
「一つ、訂正しておこう」
なにを質問されても、表情一つ動かさないアルクス・ケインは呟いた。
長い睫が、色の違う瞳のうえに落ちる。ただ目を閉じただけの動作なのに、名状しがたい色

気があり、ライデンは目が離せなかった。
「皇嗣がカナリアをでられないというルールは『ネオ・エデン』計画のなかにはない。ただ、誰もでなくなったというだけだ。この五年のあいだに色々あってね」
「みんな鬱屈しているのに、どうしてでようとしなくなった？」
ライデンは問うた。
「皇嗣が各々勝手に島をでると、セッションができなくなるからだ。実際にセッションが不可能になったこともある。島をでたがる皇嗣とそれを阻止する皇嗣が対立し、暴動が起きた。皇嗣の一人が死に、数十名が負傷した。以来、みな、島を離れることをタブーとしたのだ」
暴動は初耳だった。カナリアの内情は極秘。だからなにがあっても、報道されないのだ。
「この五年、よくないことが色々とあったみたいだな」
とライデンが返すと、「そのとおりだ」と彼は迷うことなく答えた。
「で、俺を呼んだ用件はなんだ？」
「君は私を前に、話を先導するのが好きだな」
「好きなわけじゃない。さっさと帰りたいだけだ」
「私が恐くないか？」
「恐いさ。だからさっさと用件を終わらせて帰りたい」
嘘ではなかった。アルクス・ケインのやっていることを知れば知るほど、畏怖を感じる。だが、相対すると、すこし印象が違う。

高圧的ではあるが、彼はひどくもの静かだ。
彼はこんなふうに冷静に国を滅ぼし、敵を殲滅してきたのだろうか？
もしそうだとするなら、やはり恐ろしい。
凍った大地のように恐ろしいのだが……。
大自然の驚異を前にしたような、荘厳さを感じるのだ。
「君は爽矢・E・シャフトとは、気質が違うようだ。彼は内心を決して見せなかった。君は率直に内心を語る」
アルクスは物憂げに呟いた。指先だけでエイカに合図を送る。
黒い肌の美女は、アルクス・ケインの側を離れ、ある衣裳を持ってライデンのほうへやってきた。
歩き方がしなやかだ。素足、というのがまた艶めかしい。
やはり雌豹のような印象がした。
シャラシャラ……と装飾品が音をたてて揺れる。
「爽矢が『七葉』だったことは知っているな？」
とアルクスは言った。
「ああ」
「次の皇嗣はランクも継承する。雷電・E・シャフト、よって君は七葉だ。もっとも爽矢に匹敵する実力がないとわかったら、切り捨てる」

エイカが持ってきたのは、浅葱色のロングジャケットだった。装飾過多で、なんらかの式服のようだ。

「これは？」

「私が友好国の皇嗣に贈っている品の一つだ」

アルクスはそう回答した。友好国とはつまり七葉を指すに違いない。

浅葱色はアンバーのトレードカラーだ。そのロングジャケットから、「色に染まれ」という無言の意思が聞こえてきそうだった。

エイカの細い指が、ライデンの顎に触れた。ぞくりとする冷たい感触だ。

唇が、耳に触れそうなほど接近し、生暖かい息が耳をくすぐる。

「怖がらないで。そのままじっとしていて……」

妖艶な容姿に似つかわしい、色っぽい口調で彼女は囁いた。

彼女の指は、ライデンの上着のボタンにかかった。驚くほど上手に、ボタンを外していく。丈の長いブルーの上着が床に落ちた。

上半身が剝きだしになったライデンは、さながらカンフーの達人のようだ。

うふふ、とエイカが笑う。ライデンの着せ替えを楽しんでいるのだ。

エイカは七葉のジャケットを広げた。ライデンの背後に回ると、包みこむようにしてジャケットを羽織らせる。

「そこまでだ、亡国の姫」

ライデンは美女の手を摑んだ。
エイカの手はするりと逃げた。
男性を半裸にするときは楽しそうだったのに、手を摑まれただけで顔がひきつる。
「俺は爽矢とは違う。そう言ったのはそっちだ」
ライデンはアルクス・ケインを一直線に見て言った。
「俺はあんたとは組まない。せっかくだが、このジャケットは返すよ」
ほら、というようにライデンはジャケットをエイカに向かって差しだした。
すると、エイカの顔はみるみる強ばった。まさに「豹変」だ。
金色の目が、ホンモノの豹のように輝く。
「お前は……間違っている！」
エイカが叫んだ。部屋中に響くような大声で。
予想外のリアクションで、ライデンはさすがにぎょっとした。
アルクス・ケインの膝のうえにいたネコが、にゃぁぁ！　と甲高く鳴くと、逃げだす。
「間違っている！　間違っている！　お前は……オマエはオマエは……！」
エイカは天井を凝視した。
一体、そこになにが見えているのか？
ライデンには、華美なシャンデリアと、絵画しか見えない。
「オマエのせいで、たくさん……死ぬ。シヌぞ！」

「な、なんだ？　なんの話だ？」
泡をくったライデンの口からでてきたのが、このセリフだ。
「これは憑依だ。トランス状態と言ったほうが納得できるか？　彼女はゾール教の巫女なのだ」
アルクス・ケインの言葉に、ライデンはぽかんと口を開けて驚いた。
「あんたが、憑依なんて言葉を知っていることが驚きだ」
「私も五年前は信じていなかった」
エイカはまだ叫んでいる。母国語で叫んでいるから、ライデンには、なにを言っているのかさっぱりだ。
アルクスは言った。
「エイカの予言は当たる。今まで外れたことがない。みな、二度目までは疑うが、三度目には半信半疑になる。十度つづけばどうだ？　私とて、信じざるを得なくなる。……黙れエイカ」
アルクス・ケインは静かに叱咤した。と同時に彼の手元から、ピシッ！　と鞭がはねた。
「くっ……！」
エイカの首に、細い鞭が絡まる。
エイカは叫ぶのをやめた。強制的にやめさせられた、と言うべきかもしれない。
アルクスがぐいっ、と鞭を引いた。
エイカが苦しげに鞭を摑む。
「あんたら……やっていることがおかしいぞ」

ライデンはありえないものを見ているような顔で呟いた。
「アフリカの宗教とか、予言とか……おまけに、SMプレーか……？」
「皇嗣が生まれた国はそれぞれだ。ある人間は君がいつも刀を持って外出するのは『おかしい』と感じる。アフリカの奥地に伝わる、呪術を『おかしい』と思うのと一緒だ」
アルクス・ケインはさらに鞭を引いた。
エイカはネコのように甲高い声をあげて、アルクスの足元に倒れ伏した。
「行くがいい、雷電・E・シャフト。エイカの『呪い』を受ける前に」
「……」
「話はすんだ。君は私に逆らったことを、いずれ後悔するだろう」
アルクス・ケインの声は、最後まで同じトーンだった。悶えるエイカ・スーを見つめる目が、冷ややかというより穏やかで、ライデンは理解に苦しんだ。
こいつらは……一体、なんだ？
壊れているのか？
得体のしれぬ戦慄を覚えながら、ライデンは足早にアルクス・ケインの屋敷をでたのだった。

四章　ライデンの苦悩

アルクス・ケインの屋敷を訪れたあとから、ライデンの機嫌はすこぶる悪くなった。
「あの……ライデン様……お飲み物でもお持ちしましょうか？」
「いらない。側に寄るな鈴蘭」
鈴蘭が気遣っても、この有様だ。
ようやく足のテーピングがとれた鈴蘭のことを、心のどこかでは「よかった」と感じていた。
だが、そういった類いの言葉が、雷電の口からでなくなっていたのだ。
鈴蘭は小さく一礼して、リビングからでていった。
退出ぎわの彼女の表情は、見ている者が切なくなるほど寂しげだった。
「……」
ライデンはイライラしていた。
カナリアでは常識が通じない。「郷に入っては郷に従え」という諺はあるが、ここは百歩譲っても従うことができない所だった。

「まるで、ホラー映画を、宙に浮いて見ているような感覚だ」
とライデンは苦しげに呟いた。
『おはようございます。十月二十三日木曜日です。本日のセッションは午前九時より行なわれます……』
毎朝流れるこの「学校放送」も、イライラの原因だ。
カナリアに来て、まだ四日。
――半年もいれば、発狂したほうがどれだけマシかわかってくる！
と怒鳴った、メアトリア合衆国の皇嗣、スタンレー・ファーナムの顔がちらついた。
「半年？　一週間で参りそうだ……」
自分らしからぬ弱音を吐いた、とライデンは自己嫌悪した。
たいがいのことには、耐える自信があった。だが、この異質な居心地の悪さは別だ。
「ここは……なにかが狂っているとしか…思えない」
昨夜、ライデンは爽矢の遺品の整理をした。
本や装飾品、高価そうな置物。掛け軸、屏風などを本国に送りかえす。
書斎のデスクも中身ごと送りかえした。
一応、デスクの中身をチェックしたが、たいしたものは入っていなかった。
整理をしていて、ライデンは違和感を抱く。
爽矢の「直筆」が遺っていないのである。

スケジュール帳も、日記もない。手紙類もだ。
鈴蘭は「パソコンで管理されていたのではないでしょうか?」と言う。
たしかに、セッションの日程表などは、パソコンのなかにデータとして遺っていた。
それだけだ。日記は書かなかったらしい。
ライデンは焦った。
本のページをめくって、「らくがき」がないかどうかも確かめた。
「爽矢」を直に感じさせるものがほしかったのだ。
「普通、メモの一片ぐらいあるだろう?」
だが、それが見つからない。本当に、一文字もなかった。
まるで……自分がいた痕跡を、わざと遺さなかったかのようだ。
その日、雷電・E・シャフトは、九時ギリギリに登校した。気はのらなかったが、行くことが皇嗣の務めだと思ったのだ。
鈴蘭は、一言も話さないまま、ライデンの後方に、一定の距離をおいてついてきた。
その日のセッションは最悪なうえ、長丁場になることが朝から予想できた。
ホラー映画も佳境なのか、ライデンは席についた時点で悪寒がした。
主人公は、メアトリア合衆国の皇嗣、スタンレーだ。
彼に対する「セッション」が殺到していた。弱体化したメアトリアを、各国がハイエナのように狙っている、という構図だった。

「スタンレー・ファーナムは、手負いのケモノ同然だ。今ならメアトリアを落とせる！」
コロセウムの後ろから、こんな会話が聞こえてきて、ライデンはムッと口を尖らせて振りかえった。
ライデンに睨まれて、雑談をしていた皇嗣たちが口をつぐむ。
だが、その目は「なんだ、こいつ？」と、敵意剝きだしだ。
「セッションを棄権することはできないのか？」
ライデンはかしこまって控えている鈴蘭に声をかけた。
朝、突き放してから、初めての問いだった。
鈴蘭は小鳥が鳴くような声で答えた。
「そういったルールはありません。でもみなさん、お受けになります」
皇嗣は逃げない。一国の代表ゆえ、逃げられない立場なのだと言い換えることもできるのかもしれない。
受けなければ、明日、この数が倍に膨れあがる可能性もある。負けっぱなしで終わるわけにはいかない、それが今日のスタンレー・ファーナムの立場だった。
「セッションの種目はどうやって選ぶ？」
「セッションの申し込みは、前日の午後十時までです。そのとき、挑戦者が競技を選択します。でも、その競技に異論がある場合は、相談になります。もしも、競技種目がまとまらなかったら、種目は『Dチェス』になります」

申し込みが多数になった場合、対戦順は受ける皇嗣がスケジュールを組む。
申し込み順である必要はないらしい。
「セッションは、翌日に持ちこすことができません。その日のうちに消化できなかった対戦は、ご破算です」
「イヤな相手を最後に持っていき、対戦せずに終わらせるという方法もとれるのか」
ライデンは顎に手をあてて、思案した。
そう。受ける側にも作戦が必要だということだ。
スタンレーは、まずチェスの試合からはじめた。
相手国は南半球にある小国で、勝ったところでメアトリアに利益が生ずる「決議」はだせない。それに競技種目のなかで、チェスはもっとも時間がかかる。
「対戦を減らすため、チェスで時間をつぶす気だな。ま、妥当なテか」
とライデンは試合を眺めつつ呟いた。
フロアは特大のチェス盤になっていた。市松模様の床に、高さ二メートル弱の張りぼての駒が並んでいる。それをスタッフが二人がかりで動かすらしい。
生きている駒もある。
ティアラをつけたシルビエンタと、マントと王冠をつけた皇嗣が盤上に立っていた。
シルビエンタはクイーン、皇嗣はキングということだ。
「このゲームでは、クイーンは三度だけ自分の意志でキングを助けるために動くことができま

す。でもキングを庇ってとられたクイーンは、破棄されます」
と鈴蘭が説明する。
とられたクイーンは破棄。よって『Dチェス』と呼ぶそうだ。
「ふざけたゲームだ」
ぶっきらぼうにライデンが吐き捨て、鈴蘭は自分が非難されたかのように小さくなってうつむいた。
スタンレー・ファーナムは、眠気を誘うようなゲームを展開中だ。
自分が優勢であるにも拘わらず、一気に攻めない。じりじり、タラタラだ。
「頭の悪い男ではないようだな。いささか、小賢しい性格だが……」
スタンレーは午前中いっぱい使って試合をし、正午前にあっさり相手のキングをとった。
「あいつ、昼食は時間どおりにとりたいっていう魂胆がまる見えだ」
というわけで、ありがたいことに皇嗣たちはいつもどおり、正午から一時間の昼休みに入った。
ライデンは学園の喫茶室に向かわず、北門に向かった。
どうもこの学園で食事をとる気分になれなかった。
コロセウムの屋根が見下ろせる喫茶室では、食欲なんかわいてこない。
鈴蘭は、ライデンの五メートル後方を、小走りでついてきた。
大きなソテツが群生している、見通しの悪い小道に入ったとき、ライデンは声を発した。

「鈴蘭」
「は、はい」
「怒っているのか？」
問われて鈴蘭は急に立ち止まった。
ライデンが振りかえる。彼女はずっとうつむいたままだ。
それも、どういうわけか五メートル以内に近寄ってこない。
「朝のことを根に持っているだろう？」
「いえ！　そんな、全然！」
鈴蘭は目線をさげたまま、小さな白い顔を左右に大きく振った。
振っているうちに、耳が真っ赤になっていく。
「なら、どうして俺と距離をとる？」
「そ、それは……今朝、お側によるなと……申されたからです」
鈴蘭はしどろもどろになり、そろそろと視線をあげた。
ライデンの顔をちらっと見ては、すぐに視線をさげる。
また恐る恐る顔をあげて……すぐさげる。
「なぜそんなにオドオドしている？」
「そ、それは……」
「はっきり言え、鈴蘭」

やや強い口調で命じられて、鈴蘭は激しくさえずる雛鳥のように早口で答えた。
「そろそろ、シルビエンタがですぎた行動をとるのが、お気に障る頃かと。途中で転入してこられる皇嗣様は、一週間ほどでシルビエンタのことが疎ましくなってきます。シルビエンタがお側に寄ったり、親しげな口調で話しかけたりするのは、皇嗣様の不機嫌の原因になるのです」
「それはなにかの統計か？」
「シルビエンタのマニュアルに書かれている注意事項です。シルビエンタは皇嗣様がカナリアで快適にお過ごしになるための道具ですから……不快にさせてはならないのです。絶対」
ライデンはため息をついた。
くるりと反転し、自分から鈴蘭に近寄る。手が触れられる距離まで近づくと、鈴蘭の顔を覗きこみ、こう尋ねた。
「そのマニュアルには、転入してきた皇嗣がシルビエンタに暴力をふるうのは、いつ頃だと書かれている？」
問われて、鈴蘭はビクッと肩を震わせた。
「言え、鈴蘭」
「い、一ヵ月から半年、です」
「誰でもそうなるのか？」
「だいたいは」
でも、と鈴蘭はつづけた。

「それは、いいことなのです。外にはけ口がないと、カナリアでは精神のバランスがとれません。内にこもられる皇嗣様のほうが問題なのです」
引きこもったり、自虐に走る皇嗣、という意味だろう。
「いいことなものか…！」
とライデンは鋭い口調で反論した。
「おかしいだろう？　間違っているだろう!?　異常だろう！　それを『いいこと』でくくるな！」
ライデンが怒鳴ったからか、鈴蘭は小さく「きゃっ」と叫んでしゃがみこんでしまった。
頭を小さな手のひらで覆っている。まるで虐待されるこどものような仕草だった。
転入初日、鈴蘭の身体に無数の痣があったことを、ライデンは思い出した。
気を落ち着かせ、しゃがみこんだ鈴蘭の手前に、片膝をつく。
「鈴蘭、よく聞け」
とライデンは前置きした。固く目を閉じて緊張する鈴蘭の頬に、そっと触れる。
「俺はなにがあろうとも、お前に手はあげない。約束する。自虐に走る気もない。俺はそんなに弱くない」
「……」
「だから、安心しろ」
「ライデン……様」

「ほら、仲直りだ」
とライデンが右手をだすと、ポロッと鈴蘭が大粒の涙をこぼした。
前触れもなく降りだした雨のように、彼女は泣きだしたのだ。
さすがにライデンは困惑した。泣くほどのことを言った覚えがなかった。あくまで当然のことを言っただけだった。
泣くな、と命じると、鈴蘭は雫を手のひらで払って、こう言った。
「私は……ライデン様になら、殴られても……平気です」
「だから、俺はお前を殴ったりしない」
「八つ当り……してください。イライラしたら、当たり散らしてください。我慢しないで」
これが鈴蘭なりの気遣いだということは理解できた。
心の優しい少女なのだということも、わかる。
「お前も……カナリアに蝕まれているクチか」
と呟いて、ライデンは鈴蘭の白い頭にそっと手を置いた。
幼児をあやすように、髪をなでる。
「わかってないだろう？　自分がおかしな気遣いをしているって……」
「？」
案の定、鈴蘭は首を傾げた。
だが、顔が赤い。いつまでも自分の頭に乗っている、ライデンの手のせいだ。

「行こう、昼休みが終わってしまう」
ライデンは鈴蘭の腕をとった。軽く引いて立たせてやる。
「昼はフカヒレしゅうまいが食べたい。冷凍の」
とライデンは注文した。

＊

昼食後、午後のセッションが開始された。
メアトリア合衆国皇嗣、スタンレー・ファーナムはまた小国の皇嗣相手に、欠伸のでるような試合を展開した。今度は「剣術」だ。
さすがに、午後まで「のらりくらり作戦」で、他の皇嗣たちも焦れてきていた。
「さっさと終わらせろ！」
「そうだそうだ！　そんなDランク国、どうでもいい！　リディア首長国連邦とやれ！」
とヤジがとぶ。
『静粛に！』
とスタッフが懸命に制したが、皇嗣たちは聞かなかった。
「それでも、北アメリカを代表する皇嗣か！」
「お前にはプライドがないのか！」

どうにも混乱が納まらなくなってきた。
試合中の二人も、棒立ちだ。
「周囲を気にしたら、負けだ。持久戦も立派な作戦だ。ここで動いたら、作戦が崩壊する」
とライデンが呟いた次の瞬間、スタンレーは相手の胴を渾身の一撃で薙ぎ倒し、勝利した。
彼は即座に防具のマスクをとると「うるさい！」と会場に向かって怒鳴った。
「騒ぐな！　そんなに見たいなら、見せてやる！　セッションの順番を変更する。リディアと対戦だ」
うわっ！　と場内は歓声に包まれた。
「ヤジに熱くなるヤツがあるか……。バカめ」
結果、自らの手で「のらりくらり作戦」を崩壊させたスタンレー・ファーナムは、リディアとの対戦で苦杯を喫した。
それはそれで、観戦している皇嗣たちを楽しませはしたが、ライデンの目にはやはり「バカ」に映った。
その日の夕刻、北門の近くで、ライデンはまたしてもスタンレー・ファーナムに出くわした。
彼は皇嗣とは思えない汚い言葉を吐きつつ、シルビエンタ・オルテンシアを足蹴にしていた。
「くそっくそっくそっ！　みんなよってたかって俺を食い物にしやがって！」
ライデンは肩を落とし「どうしていつも、ここにいるんだ」と呟いた。
明日からは、近道を使わず、校則どおり正門から通うべきかもしれない、などと思う。

たびたびこんな現場を見せられたのでは、たまったものではない。
オルテンシアは美しい長髪を土に擦りつけ、抵抗もせずその暴行を受けている。
蒼白な唇から、つっ…と一筋の朱線が流れた。
それを見た瞬間、ライデンのなかでなにかが切れた。
「ライデン様……！」
いけません、と鈴蘭が後ろから手を引く。
ライデンはその手を振りはらった。「持っていろ」と刀を鈴蘭に投げて渡し、スタンレーに向かって歩きだしたのだ。
「いい加減にしろ、スタンレー・ファーナム」
相手の名前をフルネームで呼び捨てると、ライデンはオルテンシアを庇うように立ちふさがった。
「お前が負けたのは、周囲のヤジを気にしすぎたせいだ。シルビエンタのせいじゃない」
「またお前か!?」
邪魔をされたスタンレーが、目を血走らせて叫んだ。
「それはこっちのセリフだ」
とライデンが返す。
目が正気ではない、とライデンは感じた。
事実、リディア首長国連邦に負けたのは、痛い。かの国には、豊富な天然資源がある。つま

り金持ち大国だ。メアトリアとの交易も盛んだった。リディアの決議はまだでていないが、メアトリアが不利になる条件を突きつけることは、目に見えている。

「お前に……なにがわかる……なにが、なにが、なにが……！」

スタンレーがライデンに摑みかかった。

ライデンはその腕を簡単にねじりあげた。

「おやめください！」

ライデンの足元で、オルテンシアが叫んだ。ライデンの足にすがりつく。

「ご主人様をお放しください！　お願いです！　お願いいたします！」

足を強くゆさぶられて、ライデンは「なぜだ？」という視線をオルテンシアに向けた。

「今、これ以上、彼を追いつめたら、精神が崩壊してしまいます！　私のご主人様を壊さないで！」

オルテンシアがライデンに懇願した。

ライデンはスタンレーを突き放した。

よろけたスタンレーはソテツの根元に引っくりかえった。そのまま起きあがろうとしない。

ライデンはどうしていいのかわからなかった。

「俺が悪者か？　この島では……」

納得できないと言わんばかりの荒々しい態度で、ライデンはオルテンシアの横を足早に通りすぎた。

オルテンシアを助けたかった。暴行を見過ごせなかった。
いいことをしたはずなのに、逃げるように退場しなければならない。
それがどうしようもなく悔しかった。

＊

おかしいのは俺か……それともこの島か？
ライデンは屋敷に戻ってきて、何度も考えた。
「俺はおかしくない。おかしくないはずだ！　そうだろう？　鈴蘭」
「えっと……」
鈴蘭が返答に困ると、ライデンはイライラした。
お前は正しい、そう言ってほしかったのではない。
お前はまだ正気だ、と言ってほしかったのだ。
「鈴蘭は俺がおかしいと思うのか？」
「いいえ、いいえ、決してご主人様！」
「俺をご主人様と呼ぶな！」
ライデンはリビングの机を拳で叩いた。
ダン！　と大きな音がして、真横にいた鈴蘭が飛びあがる。

顔を引きつらせて硬直した鈴蘭を見て、ライデンは後悔した。
「すまない。驚かせたな」
「いえ……。ご主……ライデン様」
鈴蘭は、いつも怯えている。ライデンにはそう見えた。
――俺はなにがあろうとも、お前に手はあげない。
そう断言しても、鈴蘭は安心できずにいる。
ひょっとすると、以前の皇嗣も「手をあげない」と言いつつ、暴力に走ったのかもしれない。
その日、ライデンのパソコンに一通の電子メールが届いた。
カナリアの『ホーム』からだった。件名は「重要＝ランクの変更について」と書かれている。
開くと次のような文章だった。

ライデン・E・シャフト殿。
貴殿のカナリアでのランクに、変更が生じましたのでお知らせいたします。

という一文のあと「Cランク」とある。
「アルクス・ケインの申し出を蹴ったからだな。Sランクから降格したってわけだ」
ライデンにとってはどうでもいいことだった。SからABCと三つ降格したところで、心の片隅も痛まない。

「お許しください。ライデン様。私の力不足なのです」
と鈴蘭は、消え入りそうな声で謝罪した。
カナリアでのランクは、ホームにいる全スタッフと全シルビエンタの合同会議によって、決定される。国の情勢や皇嗣の実績で、SからDまでふり分けられているのだ。
「アルクス・ケインが、ランクを決めているんじゃないのか？」
ライデンは意外だという声で尋ねた。
「いえ。皇嗣様は誰一人として、ランクに関与できません。そうでなければ、学園の規律が損なわれてしまいます。ただ『七葉』に関しましては、アルクス・ケイン様が一存で選出されているのです」
学園の運営は、アルビノに委ねられている。
決闘のルールを決めたのもアルビノたちだ。ジャッジもだ。
ランクもアルビノが決めている。
皇嗣たちは、定められた規律のなかで、セッションを行なう。
シルビエンタは皇嗣に従順な召使いだ。奴隷というニュアンスも強い。
だが、シルビエンタたちが皇嗣を支配している部分が、少なからず学園には存在する。
ここが、世界のどこの国にもない、カナリア特有の上下関係なのだった。
強者と弱者の共生。これが成り立っているのだ。
「私はBランクに留めたくて、みなさんを説得しようとしたのですが……き、緊張して、うま

くしゃべれなくて……」

鈴蘭はモジモジと言い訳した。

「プレゼンテーションの類いは苦手そうだな」

「そうなんです！　はっ、す、すみません。役に立たないシルビエンタで……」

鈴蘭は顔を両手で覆ってしまった。面目ない、というわかりやすいポーズだ。

ライデンが鈴蘭を見つめる。

鈴蘭は指と指のあいだから、ライデンの顔色を窺っている。

ずっとライデンが無言で見つめていると、鈴蘭は耳たぶから赤くなっていった。

「鈴蘭」

「は、はい」

「お前はよく赤くなるな、アルビノなのに」

「も、申し訳ありません！　ライデン様に見つめられると、む、胸がドキドキしてきて……」

言い訳が鈴蘭らしい。

ランクのことは気にするな、とライデンは鈴蘭を慰めた。

「東アジア連合共和国は、国土面積と人口においては世界一だが、貧困層と餓死者も世界一だ。多数決でCランクに決まっても、仕方がない」

「そうおっしゃっていただけると……救われます」

「爽矢のすごいところは、豊かでもない国の皇嗣でありながら、Sランクに入っていたこと

だ」

爽矢は自分の実力一つで、トップランクにのしあがったのだ。

すごいことをしていたのだ、と思う。

敗れれば国の命運に関わるという異常なプレッシャーのなかで、彼はつねにセッションで勝ちつづけていた。

強靭な精神力がなければ、ここでそれだけの戦績は遺せない。

では、なぜ死んだんだ、爽矢？

ライデンは心のなかで問うた。

なぜ、アルクス・ケインの言いなりになった？

「CでもDでもいいんだ。そんなことより、爽矢が七葉としてアルクス・ケインに利益供与していたことのほうが……残念だ」

ライデンは、悔しそうにした。

もしも爽矢がアルクス・ケインにではなく、母国に有利な『決議』を下していたら？

国はもっと豊かになったのではないかと思うのだ。

冬の凍死者も、貧民街の餓死者も救うことができたのではないか？

そう思っていたとき、電話が鳴った。

母国との通信用に携帯している、衛星電話だ。これがカナリアと「外」を結ぶ、唯一の手段だった。ナンバーを知る者は、家族と国家指導者に限定されている。

カナリアでの生活は、一切が極秘事項に該当するため、電話の内容はホームも傍受していた。機密漏洩と判断されたら回線遮断。常習犯は、電話を没収されるらしい。

初めて鳴った電話にライデンがいささか驚いた顔ででると、受話器から東ア連の首相の声がした。

『なにをやっておるのだ！　雷電・E・シャフト！』

耳がキーンとする大声で、一メートルほど電話を遠ざける。

東ア連の現首相、ラギ・常磐・ファンとは、面識こそあれ、血のつながりはない。

彼は三年前、選挙で選ばれた首相だ。

六十代半ばの、血色のいい禿げオヤジの顔が思い浮かんできた。

格別に親しいというわけでもない。むしろ舅のように小煩いから苦手な相手だった。

『なぜ、七葉入りを拒んだ!?』

ファン首相が怒鳴った。耳を離していても聞こえてくる声に、ライデンは「ちょっとまて」と遠くから返した。

「どうしてそのことを知っている？　カナリアの内部情報だぞ？」

『蛇の道は蛇だ』

と彼は簡潔に答えた。つまり、どこからかカナリアの情報が漏れている、ということだ。

「じゃ、Cランクに落ちたことも知っているのか？」

『なに!?　本当かそれは!?』

ライデンが舌打ちした。これは蛇は蛇でも「ヤブヘビ」というのだ。
『いかんいかん！　いかんぞ、雷電・E・シャフト。アルクス・ケインに土下座し、許しを乞え！　七葉に戻るんだ！』
「土下座が通じる相手には見えなかったが？　それに俺は土下座する気はない」
『図に乗るな！　雷電・E・シャフト。いいか、爽矢のようにうまく立ち回れ。軍事大国アンバーを敵に回しては、東ア連は生きてはいけん！』
うまく立ち回れと言われ、ライデンは声を荒げた。
「爽矢がやっていたことは、アルクス・ケインのご機嫌とりだ！　国の困窮を放置してたんだぞ！　俺にもそれをしろというのか？」
『うるさい！　これは首相命令だ！　お前はあくまで爽矢のスペアだ。スペアならスペアらしくふるまえ！　スペアのお前に、偉そうなことをいう権利は……』
ブツッと変な音がして、電話が切れた。
あの……と恐る恐る、鈴蘭が進言する。
「おそらくホームが回線を遮断したのだと思います。内容がカナリアの内部情報に該当していたので……」
ライデンは切れた電話を握ったまま、強く歯を噛みしめた。
「いいさ。あれ以上禿げオヤジの声を聞きたくもない。くそっ、スペアスペアと人のことを……！」
思わず電話を振りあげる。

「ライデン様！　ダメ！」
鈴蘭があわてて電話に手を伸ばした。
「外との連絡手段は、この電話だけです！　これを壊したら、ライデン様は外の誰ともお話できなくなります！」
「いっそ、そのほうがいいさ！」
「ダメです。電話があるほうが、心にずっとゆとりが生まれます！」
「それは外に、自分のつらさや痛みをわかってくれる誰かがいる場合だ。俺には…そんなヤツはいない！」
いない、と断言したライデンの顔を、鈴蘭がはっとした表情で見つめた。
「東ア連にとってもだ。必要だったのは、爽矢・E・シャフトのほうで、俺じゃない！」
ライデンはそれだけ言うと、鈴蘭に背中を見せ、日の落ちた庭におりた。
追いすがろうとする鈴蘭に「ついてくるな」と命じる。
「では……なにか冷たいお飲み物でも」
「いらない」
「む、虫除けの香を焚きますね」
「いらない！　なにもいらない！　放っておいてくれ！」
庭中に響き渡る大声をだしたあと、ライデンは心の底から自己嫌悪した。
鈴蘭が、脱兎のごとく、キッチンへ逃げていったからだ。

「どうしてここは…こんなに俺をイライラさせるんだ？」
爽矢の造った石庭のなかで、ライデンは苦しげにうめいた。
「……息苦しいのは、湿度のせいか？」
夜になってもなくならない蒸し暑さ。
追いつめられるような圧迫感。
カナリアの空気は熱いのに、冷たく人を傷つける。
「……すまない、鈴蘭」
届かない謝罪と知りながら、ライデンは吐息のような声で呟いた。

五章　オルテンシアの涙

「おはようございます、ご主人様。ただ今、午前八時です。お急ぎくださいませ」
そよ風が囁くような優しい声が、ライデンの耳をくすぐった。
なかなか寝つけず、うとうとしはじめたばかりだったライデンは、ぼんやりと目を開いたものの、すぐに現実が把握できなかった。
寝苦しくて、無意識に脱いだらしい紺のシルクのガウンが、ベッドの横に落ちている。
自分が半裸なことより、ガウンの横にいる人物のほうが重要だった。
白ユリのような美女が、慈愛を感じさせる瞳で自分を見つめている。
流れるような白銀の髪に似合う、裾の長い古風なメイド服。
ええっと……？　というようなライデンの疑問符に彼女は自ら答えた。
「シルビエンタ・オルテンシアです。ご主人様」
そう。そんな名前だった。ライデンは思い出した。メアトリア合衆国のスタンレー・ファーナムに、ひどい仕打ちを受けていたシルビエンタだ。

「今、ご主人様と呼んだか？」
ようやく、言葉が思い浮かぶぐらいに覚醒したライデンは、眉をひそめて問うた。
「はい。本日より、雷電・E・シャフト様のお世話を務めさせていただくことになりました、シルビエンタ・オルテンシアです。どうぞよろしくお願いいたします」
頭が身体にひっつくほど深々と一礼され、ライデンは機敏に上半身を起こした。
「……鈴蘭は!?」
「鈴蘭？　ああ……シルビエンタ・ミュゲのことでございますね。彼女は本日より、スタンレー・ファーナム様のシルビエンタとなりました」
なんだって!?　あまりの衝撃に、ライデンは声をつまらせた。
「昨夜、スタンレー・ファーナム様から雷電・E・シャフト様へ、『シルビエンタ交換の申し出』というメールがあったと思うのですが？」
ライデンの様子を敏感に察知して、オルテンシアはそれを確認した。
「俺は…知らない」
「しかし、『了解した』という返信があり、交渉は成立したと……」
「了解した覚えはない！」
ライデンが、間髪入れず怒鳴った。
「では、送信履歴をご確認くださいませ」
オルテンシアは冷静に答え、一礼した。一見、儚げに見える美女だが、その応対はベテラン

秘書並みだ。

ライデンは、ベッドから飛びおり、すぐさま書斎へ向かった。

パソコンを立ちあげる。そのとき、ふと違和感を抱いた。

「昨日、パソコンの電源を、落とした覚えが……ない」

記憶違いか？　とした疑問を捨て置き、とり急ぎメールをチェックする。

送信履歴を見て、ライデンは「そんな……」と愕然とした。

たしかに「了解した」という短い返信文が残っていたのだ。

「どういうことだ？　一体誰が……鈴蘭の仕業か……？」

昨日、パソコンを開けたまま長いあいだ放置していた。ホームからのメールをチェックしている最中に、電話が鳴ったせいだ。屋敷にいたのはライデンと鈴蘭のみ。だとすると、パソコンをいじれるのは、鈴蘭以外いない。

パソコンの電源を切って、書斎の所定の位置に戻したのも……鈴蘭以外にはありえない。

「俺は送っていない…。シルビエンタが皇嗣の代理でメールをうつなんてことがあるのか？」

ライデンはオルテンシアを窺った。

「いえ。それは禁則事項です。もしも、シルビエンタ・ミュゲがそれをしたのなら、彼女は重大なルール違反をしたことになります」

とオルテンシアは、やや厳しい口調で答えた。

俺のせいだろうか？　ライデンの顔が曇る。

昨日は何度も怒鳴った。怒鳴ったせいで、鈴蘭はひどく怯えていた。
愛想をつかされた？　そういうことなのか？
「だが、あのスタンレー・ファーナムのところへ行くってのは合点がいかないぞ」
ライデンはクローゼットのなかから、紫色のパオを適当に選ぶと、手早く身につけ、床の間に置いてあった日本刀をひったくるようにして摑んだ。そのまま玄関へ足早に向かう。
「ご主人様、どちらへ？」
オルテンシアの声にはっとして、ライデンは振りかえった。
スタンレー・ファーナムのところへ行くのだ。彼が鈴蘭に手をあげる前に、つれ戻すつもりだった。
だが、そうなればオルテンシアはどうなるのだ？　そんな疑問が脳裏を通りすぎ、ライデンの足が動かなくなった。
「シルビエンタ・ミュゲ……いえ、鈴蘭がご心配なのですね」
オルテンシアはライデンの心をズバリと言いあてた。
しかし、とオルテンシアはつづけた。
「彼女もベテランのシルビエンタです。ご心配なさらずとも、うまくやるでしょう」
「ベテランとは？　黙って殴られるのも慣れているということか？」
とライデンは鋭くきりかえした。
「ベテランなら俺は心配しなくていいのか？　……あいつは、俺がちょっと怒鳴るだけで、真

っ青になって怯えた。机を叩いただけで、飛びあがった。あいつは、いつもいつも、殴られる恐怖と戦っていた！」

その鈴蘭がスタンレー・ファーナムの側で、どんな顔をしているのか？

それを想像するだけで、いてもたってもいられないのだ。

オルテンシアは、背筋をのばし、直立不動でライデンの話を聞いている。

白亜の銅像に、メイド服を着せたかのように彼女は微動だにしない。

しばらくして、その顔に一瞬、淋しいような笑みが浮かぶ。

それでは……とオルテンシアは口を開いた。

「雷電・E・シャフト様からスタンレー・ファーナム様へ、メールをおだしください。シルビエンタの再交換を申しでるのがよろしいでしょう。スタンレー・ファーナム様が了解なされば、明日の朝には、鈴蘭はお手元に戻って参ります」

「……あいつが、素直に了解するとは思えないが？」

「今回の行き違いを私がご説明し、雷電・E・シャフト様の本意でなかったことを、お伝えいたします。こじれるようであれば、『ホーム』に仲裁を頼みましょう」

私にお任せください、とオルテンシアはつけ足し、一礼した。

安堵していいのか悪いのか、ライデンは迷った。

「お前は……それでいいのか？」

訊いたあとで、口が滑った、と後悔した。

「私の意志は関係ありません。皇嗣様のご希望を叶えることが、シルビエンタの務めです。それに、私がその問いに答えれば、ご主人様がお困りになるだけのこと」

オルテンシアの言うとおりだった。オルテンシアの気持ちを聞けば、ライデンはあいだに挟まれ、苦しむことになるのだ。

「それではご主人様はメールを。私は、朝食の用意をしてまいります。少々お急ぎくださいませ。本日も九時よりセッションが行なわれる予定でございます」

オルテンシアは深く一礼すると、くるりと踵を返した。

*

結局、ライデンはメールをだしそびれたまま、コロセウムに向かうことになった。

どうすれば鈴蘭を取りもどし、オルテンシアを虐待から救えるのか？

それを考えたが、思い浮かばなかったのだ。

ともかく、帰宅したらすぐにメールを……と思っていたが、その日のセッションは、超過密なスケジュールで組まれていた。

『それでは、これより本日のセッションを行ないます』

コロセウムのスタッフが、聞き慣れた開会宣言を口にする。

「早く帰りたいのに……帰れそうにないな」

いつまでたっても好きになれない黒い制服の袖をめくると、ライデンは「こりゃ、だめだ」と言わんばかりの表情で呟いた。

コロセウムは騒然としていた。

たてつづいたメアトリア合衆国の敗北のせいで、国際情勢は複雑に変化している。どの国も、変化した情勢のなかで生き残るため、有利な条件がほしかった。そのためには、セッションで勝つしかないのだ。

コロセウムは四面に仕切られ、そこに各々二人の皇嗣たちが立っていた。

四つの試合が同時に進行していく、というわけだ。

十五分すると、四面のうち、二面のコートで勝敗が決定した。すると、コロセウムはさらに大混乱に陥った。

「第一コートで、セルザビ公国が勝った！　よかった。これで、わが国の西海岸は安全だが、セルザビの南に隣接しているカルカタニアがでしゃばってくる可能性がある。シルビエンタ、お前は第三コートを観察しろ。私は第二コートをチェックする」

「はい、ご主人様」

ライデンの目の前で、一人の皇嗣が興奮していた。黒い制服のうえに、民族衣装のような巻き布を纏った黒人青年だ。

ライデンには、その皇嗣がスクープを追いかける記者のように見えた。シルビエンタもだ。彼らだけではない。みながみな、似たような状態だ。コロセウム中、記者だらけという感じ

だった。皇嗣はもっとプリンス然としていて、優雅に立ちふるまい、どんなときも余裕を醸しだし、それが無理でも虚勢だけは忘れない……と思っていたが、これは完全なる誤解と先入観というものらしい。

「カルカタニアが負けたか！　ラッキーだ！　これでわが国は急場がしのげる。午後のセッションで、私はなんとしてもカルカタニアの友好国であるススリカを落とさなければならない。こい、シルビエンタ、作戦会議だ！」

「はい、ご主人様」

会話を盗み聞きし、ライデンは呆気にとられた顔つきで、眉のあたりを掻いた。

「いかがなされました、ご主人様？」

涼やかなオルテンシアの声が、背後から響く。

「いや、なんでもない。ちょっと驚いているだけだ」

見ているだけで目が回ってきた、というのが本音だ。

ある国が負ければ、複数の国が大騒ぎになる。

ある国が勝っても、やっぱり大騒ぎになる。

自分が勝っても、友好国が負ければピンチになるし、その逆もある。

四面同時にそれが起こっているのだ。傍観しているだけで、目が回るのも当然だった。

「午後の試合で南アジア連盟が負ければ、東ア連も少なからず打撃を受けます。もしも、そうなったときの対策をお立てになったほうがよろしいかと存じます」

うんざり顔のライデンに、オルテンシアが助言する。
「そうだな。負けるより勝ってくれるほうがありがたい」
「南半球のニュー・オーストラリアにも、多数のセッションが舞いこんでいます。負ければ立場が微妙なものに。東ア連は、ニュー・オーストラリアを支援するか、見捨てるか、どちらか決断しなければならなくなるでしょう」
ライデンはオルテンシアを顧みて、こう言った。
「俺にどうしろというんだ？　オルテンシア」
「ご主人様も、行動を起こされたほうがよろしいかと」
「どう動けという？　俺にはこの情況が、蜂の巣をつついた状態にしか見えない」
当惑した声でライデンは返した。
「どこが勝ったか、いち早く知る必要があります。勝った国がどういった『決議』をだすか、推測する必要もあるでしょう。今日、勝ちすぎた国、負けすぎた国がでた場合、国際情勢は大きく変化します」
「メアトリア合衆国が叩かれたときのようにか？」
「さようです。大きすぎる変化は、世界を混乱させ、下手をすると崩壊させてしまうのです。それをうまく平定し、調和するのも、皇帝様の大事な役割です」
オルテンシアの助言が正しいことは、ライデンにも理解できた。
だからと言って、ライデンが動けたかというとそうでもない。

「どこの国が勝つか負けるか、わかるはずがないだろう？　全ての国の皇嗣の実力を知っていなければ……予測しようもない」
「私が把握しております。ご質問いただければ、なんなりとお答えいたします」
すっと胸をはってオルテンシアは告げた。
スタンレーに殴られていたときの、か弱いイメージはなかった。
そうか、シルビエンタとは、情報戦略の副官も務めるのか、とライデンは悟った。
シルビエンタはただの奴隷ではない。唯一にして絶対の「右腕」なのだ。
「お前が有能なのは……空気でわかるよ、オルテンシア」
「私は私にできる精一杯のことを、ご主人様にしてさしあげるのが仕事なのです。もしも私の助言がお気に召さないというのであれば、『黙れ』とご命令ください。私は、貝のように口を閉ざします」
ライデンは目前に霧がかかっているかのように戸惑った。
なんなのだろう？　なにかが「しっくり」こないのだ。
オルテンシアの言うことは、なにもかも正しい。
なのに、なにかが欠けていると感じてならない。
オルテンシアの言葉は、自分が心からほしいと思っている助言とは違うのだ。
鈴蘭が側にいたときには、こんなふうに感じなかった。
彼女はごく自然に、ライデンの側にいた。

有能な副官ではなかったかもしれない。だが、ライデンは不満を感じたことはなかった。
「俺はお前を、明日にはスタンレー・ファーナムに返還するかもしれない。そんな一日だけの皇嗣に、誠心誠意応えられるものなのか？」
とライデンが尋ねると、オルテンシアは迷うことなくこう言った。
「たとえ一日だけでも、三年でも違いはありません。逆に言いますと、この一日、無駄になさらないほうがよろしいかと存じます」
「それは『自分ほど優秀なシルビエンタはいないから、せいぜい利用せよ』という意味か？」
ライデンの鋭い切りかえしに、オルテンシアは息を飲んで口を閉ざした。
澄みきった銀色の瞳が不自然に揺らぎ、ライデンから視線を外してしまう。
ライデンはそんなオルテンシアを置き去りにするように、無言で中座した。
追いかけてくるかと思ったが、オルテンシアはライデンのあとをついてはこなかった。
パタパタと軽い足音をたてて、いつでも背中を追いかけてきた鈴蘭のことを思い出す。
比較してはいけないのかもしれない。
そうは思うものの、心は理屈でどうにかなるものではない。
鈴蘭はどうしているだろう？
ライデンはコロセウムのなかを歩きながら、鈴蘭を探した。
だが、彼女はどこにもいなかった。スタンレー・ファーナムもいない。
「さては、さぼりか？　というか、セッションはさぼっていいものなのか？」

ライデンは「特別席」を窺った。
七葉はいる。だが、中央に君臨するアルクス・ケインの姿はなかった。
「小国同士の小競り合いだ。御大自ら見物せずとも、支障はないというところかな」
なんとなく、生真面目に出席していた自分がバカらしくなってくる。
ライデンはコロセウムを抜けだし「北門」に向かった。あそこに行けば、否が応でも出会えるような気がしていたが、二人の姿は発見できなかった。
仕方なくもう一度コロセウムに戻った。
オルテンシアの姿は消えていた。気にはなったが、人探しはもううんざりだった。
コロセウムはその後も、万馬券がでた競馬場のような大混乱がつづいた。
ライデンはオルテンシアに指摘された、南アジア連盟の試合を見届けた。
南アジア連盟が無難に勝利した瞬間、「もう限界だ」と吐き捨て、コロセウムから飛びだす。
逃げるように北門を潜り、屋敷に帰った。ようするに「早退」だ。
「とりあえずこれで……東ア連が大きな被害を受けることはないはずだ」
皇嗣として、最低限の任務を果たした気持ちだった。
どう、とリビングのソファに倒れこむと、ライデンは唸った。
ひどく疲れている。
心も身体も、ずっしりと重い枷がついているようだった。

*

囁くようなオルテンシアの声で、ライデンは黒い双眸を開いた。
白ユリのような美女が、朝と同じようにライデンの顔を覗きこんでいる。
庭を窺えば、すっかり陽が落ちていた。
「今、何時だ？」
とライデンは問うた。
「午後八時三分でございます」
八時と聞いて、ライデンは飛び起きた。
「スタンレー・ファーナムにすぐメールを書くつもりだったのに……！」
鈴蘭のことが心配だと言いながら、熟睡してしまった自分を恥じる。
疲労に負けてしまうなど、薄情者のすることだと思ったのだ。
「ご主人様、コロセウムではですぎた口をきき、申し訳ございませんでした」
ライデンが横になっているソファの側で、オルテンシアは深々と頭をさげた。
「今後は態度を改めますゆえ、どうかご容赦くださいませ」
「……べつに怒ってはいないさ」
と言うと、ライデンはしなやかに立ちあがった。
「ご主人様……ご主人様」

眠ったせいで、いくらか気分が落ち着いていた。
「お前は正しいことを言った。だが、俺が素直に聞き入れなかっただけだ」
ライデンは石庭に面した窓を開けた。
湿度の高い空気が肺に流れこんでくる。だが、気温はそれほど高くない。
「夕方、スコールでも降ったのか？　地面が濡れている」
ライデンは庭に下りた。
ところどころライトで照らしだされた、東アジア風の石庭には幻想的な美しさがあった。
耳を澄ませば聞こえてくる虫の音さえ、情緒を醸しだす。
ライデンは池の手前で立ちどまり、水の音と虫の音、そして風の音に耳を傾けた。
自然の音ほど心がやすらぐものはない、と実感する。
ここへきて以来、神経を張りつめどおしで、そんなことすら忘れていたのだ。
「そうやって立っておられると……爽矢様にそっくりでいらっしゃいますね」
自然の音にオルテンシアの声が混じり、ライデンは振りかえった。
「今、なんと言った？」
彼女は優しげにほほ笑んでいた。初めてみる人間らしい表情で、ライデンにはひどく新鮮に映った。
「私は、一年前まで爽矢様のシルビエンタでした」
ライデンは目を見開いた。

「その頃、ここは花壇でした。お屋敷も今とは比べものにならないほど小さなもので……。爽矢様は、庭に花を植えるのがお好きでした」

色とりどりの花を一緒に植えたのだと語りながら、オルテンシアは空を見あげた。

星を見ている？　そう思い、ライデンも見あげる。だが、そうではなかった。

白滋のような肌に、つつ……と一条の雫が流れる。

唐突なことで、ライデンは言葉もなく固まった。

「申し訳ございません。私、泣かないようにと上を向きましたのに……失敗してしまいました」

瞬きを忘れた瞳から、次から次へと清水が溢れだした。

「どうしましょう。涙が……とまらなくなりました」

「オルテンシア……」

あからさまに戸惑うオルテンシアの側に、ライデンはすみやかに戻った。

「困りました。私はただ、返還される前に、爽矢様の情報をお教えしなければと思ったのです」

オルテンシアは不器用な女性なのだ、とライデンはこのとき初めて知った。

泣き方がひどく不自然だった。鈴蘭のほうがまだ自然に泣く。

爽矢の情報を教えるのだという言い方も、ロボットかアンドロイドのようだ。

素直に「爽矢の話をしたいのだ」と、言えばいいのだ。

「オルテンシア、困ることはない。涸れるまで泣けば、涙は自然にとまる」

と言うと、ライデンはオルテンシアの肩を抱いて、縁側に座らせた。

自分もその隣に座る。
彼はあえて、なにがそんなに悲しいのか問わなかった。
「申し訳ございません。このようなことは初めてで、コントロールがききません。痛みで泣くとき、痛みがすぎれば涙もとまります。涸れるというのは、どうなったときのことなのでしょう？　体内の水分がすべて流れ落ちたときでしょうか？」
「そうだな。そんなふうに錯覚するほど泣いた後のことだ。でも実際には、干涸びたりしないから安心して泣くがいい」
困惑する銀色の瞳が、ライデンを見つめる。
「……爽矢様？」
「それも錯覚だ。俺は爽矢じゃない」
「そうでした。失礼を……」
オルテンシアは涙が流れるに任せ、すっと庭先の花をさした。
「一番端のブーゲンビリアの花は、私が植えました。その右隣は爽矢様がご自身でお植えになりました」
オルテンシアは些細な記憶を全部掘り起こすかのように、ライデンに語りだした。
「あの池のあたりには以前、紫陽花が咲いていたのです。爽矢様は紫陽花が大好きで……私にオルテンシアという名前をつけてくださいました。紫陽花のフランス名だとか。それまで、私の代名詞は……代名詞は……」

ここでオルテンシアは壊れたディスクのように、同じ言葉を繰りかえした。
見兼ねたライデンは「思い出せないなら思い出さなくていい」と言った。
「お前の名前はオルテンシアなのだから、それさえ覚えていればいいんだ」
と言うと、オルテンシアはどこかホッとし、話をつづけた。
「爽矢様はファンタジー小説がお好きでした。休日は読書三昧で……読みおわったご本を私に差しだされ『お前も読め』とおっしゃるのですが、私は中国語と日本語が苦手で……」
最初は挿し絵だけ見ていたのだという。
オルテンシアは、爽矢たち皇嗣が召喚された年、このカナリアに保護されたアルビノだった。その頃はまだ「シルビエンタ」という役目はなく、爽矢とオルテンシアは別々に生活していたらしい。
やがて、アルビノが学園の運営や皇嗣の生活をサポートするようになり、オルテンシアは「シルビエンタ」として爽矢と知りあった。
「お手紙や『書』を書かれるのもお好きでした」
「手紙？　両親への手紙か？」
「いえ……幼なじみの女性に。たしか、ツェ・ツェンとかいう」
「ツェ・ツェン？」
「ご存じではありませんか？　ツェン一族のご令嬢で、国の決めた許婚だとおっしゃっていましたが」

ライデンは沈黙した。ツェン一族は、東ア連で大きな力を持つ豪族だ。自分が知らないにせよ、ありえない話ではない。
「そのツェ・ツェンからの手紙はあったのか？」
「ええ、たくさん。でもその手紙の内容だけは……私には教えていただけなかったのです」
手紙を書いていた。
手紙が届いていた。
ライデンは訝しんだ。爽矢の遺品のなかには、書どころか、手紙の切れ端もなかった。便箋もない。全て処分したということなのだろうか？
「一年前、なにがあった？　どうしてオルテンシアは爽矢の側を離れた？」
「一年前、爽矢様は七葉に。と同時に私は『破棄』されました。理由は……存じません」
「この屋敷を建てたのも、七葉になったときなのか？」
「さようでございます」
「どうして建て替えた？」
ライデンは尋ねたが、「わかりません」とオルテンシアは呟いた。
「そのころ、爽矢様は寡黙なお人柄になっておられましたから、私ともあまりお話しにならなくなったのです」
オルテンシアは夜空を見あげ、そう告白した。
なにかを思い出そうとしているポーズだったのかもしれないが、ライデンにはこれ以上泣く

まいとしているように見えてならなかった。
破棄されてつらかったんだな、とライデンは思った。だが「つらかったのか？」と質問しなかった。訊くには忍びない気がしたからだ。
「爽矢様は、どちらかというとスポーツは苦手でした。セッションが決闘に移行してずいぶんご苦労を……。ですから、セッションは『チェス』で戦果をお上げになっていました。皇嗣様のなかで一番、知能の高い方でした。私的感情を除外して、それは事実であったと思われます」
花を愛し、ファンタジー小説に耽っていた。
幼なじみの女の子が、文通相手。
皇嗣のなかで一番頭がよかったが、スポーツは不得手だった。
それが、カナリアのなかの爽矢・E・シャフトだ。
オルテンシアのこともわかってきた。
爽矢とともに花を植えた。爽矢の愛読書が彼女の愛読書だった。
でも、手紙の内容は教えてもらえなかった。
きっと彼女は切なかっただろう。
皇嗣のなかでもっとも頭のいい主人を、必死でサポートしていた。
彼女が有能な策士か秘書のようになったのは、そんな過去があったからだ。
「お前は……爽矢のことが本当に好きだったんだな」
言ったあとで、ライデンは後悔した。

オルテンシアが肩を震わせて泣きだしたからだ。
「すまない。野暮なことを……」
「いつか、涙が涸れたら……泣き……や…み。ご心配……なく」
途切れ途切れにそう言うオルテンシアが哀れでならない。
爽矢が言葉をかけなくなっていった過程を、どんな想いで見守りつづけたのだろうか？
爽矢に「破棄」されたとき、オルテンシアはなにを感じたのだろうか？
オルテンシアは堰が切れたように泣きつづけている。
ライデンには慰める言葉もなかった。ただ、好きなだけ泣かせてやろうと思った。
懐かしい、ブーゲンビリアの花の側で。
「こいオルテンシア」
ライデンは立ちあがり、オルテンシアに向かって手を差しだした。
「お前の植えた花を近くで見よう」
ライデンはなかば強引に彼女の手を引いた。
「爽矢様……」
「ライデンだ」
「そうでした。失礼を」
オルテンシアはまた錯覚した。「過去」が「現在」に重なっているようだった。
一歩、踏みだそうとして、ライデンは愕然として足を止めた。

信じられないものを見た。
照明も届きにくい庭の端。
ブーゲンビリアの花の前に、少年と少女の姿が透けて見えていた。
幻覚か？　とライデンが瞬きを繰りかえす。
爽矢とオルテンシアだ。二人とも若い。十四歳か十五歳の姿だ。
少年と少女は、花の苗木を植えていた。
手は泥だらけだ。服や顔にも泥がついている。
なのに二人はとても楽しそうで……ライデンは胸を締めつけられた。
「なぜこんなものが……見える？」
驚いても、何度、瞬きしても、幻影は消えない。まるで映写機で映しだされたかのようだ。
「どうかなさいましたか？　ご主人様？」
オルテンシアの声に、ライデンは「いいや」と嘘を返した。
「昔のお前が見える」と言ったら、オルテンシアは医者を呼ぶに違いない。
ふと急に、ビジョンが変わった。今度は、爽矢一人が花の横に佇んでいた。
手になにか持っている。
「……手紙だ」
あれは誰からの手紙だ？
爽矢は独りで手紙を開ける。その表情は、世界一のファンタジー小説を読むときより、生き



生きとしていた。
オルテンシア、とライデンは呼んだ。
「シャベルと手袋を持ってこい」
ライデンは暗闇のなかの幻影を見つめたまま、オルテンシアに命じた。
「早く！」
と急かされ、オルテンシアが踵を返すと走りだす。
シャベルが届けられると、ライデンはブーゲンビリアに近づき、いきなり根元を掘り起こしはじめた。
「なにを……！　やめてくださいご主人様！　花が……花がかわいそうです！」
「どいていろオルテンシア」
シャベルを取りあげようとするオルテンシアを強引におしやる。ライデンは木の根に遠慮なくシャベルを突きたてた。
雨後だったせいもあり土は柔らかい。根をある程度分断すると、ライデンは素手で土を掻きだした。
「俺は……爽矢の遺品を整理した」
悲痛な顔をして見守っているオルテンシアに、ライデンは告げた。
「だが、この屋敷には一通の手紙もない。すべて自分で処分し自殺したのかと思った。だが、そうじゃなかったんだ」

ライデンの手がとまった。
彼は土のなかから慎重に、あるものを取りだした。
それは、木の小箱に入った「手紙」だった。
ライデンは見たのだ。爽矢がこっそり、木の側に手紙を埋めている幻影を。
「俺たちの国には古い風習がある。どこの地方から伝わったのか知らないが……花の側に願い事を書いた紙を埋める。すると『花が咲くと埋めた想いも花開く』と言われている。果樹の側に埋めると、『願いが実る』とも言われている」
ライデンは木箱のなかの古い便箋を慎重に開けた。木箱に雨水が入りこんで、ずいぶん傷んでいる。
「ツェ・ツェンからの……手紙だ」
ライデンは庭の照明の近くで、その手紙を声にだして読んだ。
『拝啓、爽矢・E・シャフト様。カナリアでの生活には、慣れましたか？　私は、近々北京からモンゴル区のウランバートルへ引っ越すことになりました。私の病気を治してくれるお医者様がいらっしゃるのです』
ツェ・ツェンは病気だったということが、手紙から判明した。それもいわゆる難病らしい。
彼女は新しい治療法を求め、各地の病院を転々としていた。

手紙は『爽矢様にお会いする頃には、私の病気が治っていますように……』という文でしめくくられている。日付は四年前のものだった。

「爽矢は、この願いが叶うことを切に願って、花の木の側に手紙を埋めたんだ」

ライデンは、隣の木の根元も掘った。

そこからもやはり古い手紙がでてきた。

『最近、世間では「カナリア」の皇嗣様に対する非難が相次いでいます。ちっとも成果がでていないとか……。みんな、自分じゃなにもできないから、好きなことを言っているだけ。私は爽矢様のことが心配です。学園では楽しく過ごしていらっしゃいますか？』

三年前の手紙だった。

ちょうどセッションが停滞し、世界が『ネオ・エデン』計画に失望しはじめていた頃だ。

発足当時、過大な期待をしていた人々は、皇嗣たちのふがいなさに不満を爆発させていた。

最悪だったのは、計画の見直しを実行する力が国連に残っていなかったことだろう。

世界中で抗争が頻発し、何億人もの難民がでている状況では、国連そのものが機能しなくなっていたのである。

人々は追いつめられ、「誰か」に責任を押しつけずにいられなかった。まさにメアトリア合衆国のスタンレー・ファーナムがオルテンシアを苛めるように、世界中の人々がカナリアの皇

嗣たちに、八つ当たりしたのである。
『それではまた。世界がもうちょっと、カナリアの皇嗣様たちに優しくなりますように……』
手紙はそんなふうにしめくくられていた。
――世界がもう少し、僕たちに優しくしてくれますように。
そんな思いを抱いて爽矢は手紙を埋めたのではないか？
そう思うと、ライデンは胸がつまった。
皇嗣への八つ当りがピークにさしかかる頃、カナリアのセッションは「決闘」へと移行した。
「考えてみれば……セッションを歪めたのは、世界中の人間かもしれないな」
ライデンは呟き、さらに木の根の側を掘り起こした。
また手紙がでてくる。
三通目の手紙の最後はこうだった。
『一日も早くカナリアでカイザーが誕生しますように。そして、爽矢様と早くお会いできますように』
皇嗣は、カイザーを選出して初めて「卒業」できる。
それまで、爽矢は決してツェ・ツェンと会うことはできない。
「爽矢は、このクソ暑い島から、一秒でも早く脱出したかったはずだ」
ツェ・ツェンに会うために。
自分なら、きっとそう願っただろうとライデンは思う。

ブーゲンビリアの花が咲くのを心待ちにし、花が咲けば想いも花開くと信じて過ごした。

「花は咲いた。でもカイザーは誕生しなかった。……爽矢は焦った」

見えてきた、とライデンは思った。

爽矢がなぜアルクス・ケインに、多大な利益供与をしたのか？　その真相が見えてきたのだ。

「爽矢は決闘が苦手で、自分がカイザーの器でないことを痛感していた。一方、アルクス・ケインは見た目も性格も独裁者そのものだったが、実力はあった」

一年前、爽矢は七葉に抜擢された。

「そのとき爽矢は決心した。いつも一緒だったオルテンシアを遠ざけ、屋敷を改築し、思い出になるようなもの一切を処分して、アルクス・ケインの『駒』になった。……それが、ツェ・ツェンに会う近道だと、思ったからだ」

この推理によほど自信があるのか、ライデンの口調に迷いはない。

「七葉になった爽矢は、みなに煙たがられていただろう？」

ライデンの問いに、オルテンシアは寡黙に首肯する。

「爽矢様はまるで人が変わられたように……冷酷に」

「わかる気がする。感情を切り捨てなければ、やってられなかったんだ」

「想いの花」を強引に咲かせようとしたのだ、とライデンは思った。

「それはあまりにひどいお変わりようで……みなは『爽矢・E・シャフトは壊れた』と噂したものです」

いつしか泣きやんだオルテンシアは、そう語った。
「爽矢は壊れてなんかいない。第一、アルクス・ケインが壊れた皇嗣を側に置くと思うか？」
オルテンシアは「わからない」と言いたげに、静かに首を振った。
もはや彼女にとって、その真偽はどうでもよかったのかもしれない。
今はただ宝物のように、爽矢の埋めた手紙を両手のひらで包みこんでいる。
「……」
そのオルテンシアを見つめつつ、ライデンは考えた。
では、爽矢はなぜ自殺したのだろう？
なぜ？　新たな疑念が、ライデンを支配しはじめたときだった。
RRRR――
ホームからライデンに、電話がかかってきた。
『ライデン・E・シャフト様。夜分恐れ入ります。至急、メールをご確認ください。そして、各皇嗣様がたに、今日中にご返信いただきますよう、お願いいたします』
ライデンより先に、オルテンシアが表情を強ばらせ、書斎に走った。
ライデンがリビングにあがりこむと同時に、オルテンシアがパソコンを机のうえに広げる。
「通常、ホームから皇嗣様に電話がかかってくるということは、ございません。よほど火急の用件ということでございます」
とオルテンシアが焦りを匂わせる。

「未読メールが十二件？　今朝見たときは、なかったぞ」
「午後九時をすぎますと、皇嗣様がたが一斉に動きだすのです。そろそろ東ア連がターゲットになることは予測しておりました。警戒しておりましたのに……ご忠告が遅くなってしまい申し訳ありません」
オルテンシアは早口で謝罪した。
「そう先走るな。なんのことだかわからない」
ライデンはひたすら謝意にくれるオルテンシアをたしなめると、一通のメールを開けた。
それは、隣国オルセの皇嗣、グスタフ・ランチェからのセッションの申し込みだった。
ライデンは次々にメールを開いた。すべて明日のセッションの申し込みだ。
「なるほどな。俺がCランクに落ち、攻撃しやすくなったというわけだ。こっちは貧民国だ。セッションしても相手にメリットはないと楽観していたが……甘かったようだな」
今日のドタバタのせいもあるのだ、とオルテンシアは説明した。
「皇嗣様としては、負けたままでは国民に示しがつかないのです。C、Dランクの小国は、特にターゲットにされやすいのです」
負けっぱなしでは体裁が悪いから、格下相手にリベンジしようというのだ。
オルテンシアがコロセウムで「動け」と言った意味がよくわかった。
彼女は、こうなることを予測していて、ライデンに警告したかったのだ。
「セッションを受ける順番は、こちらで決められるんだったな？」

とライデンは尋ねた。
「そうです。種目も相談できます。双方の希望が食い違うときは『Dチェス』になります」
クイーンをとられると、シルビエンタが破棄されるというチェスだ。
「知能ゲームに人的被害がでるなんて、ふざけたゲームだ」
と言うとオルテンシアはこう返した。
「シルビエンタは『人的被害』には該当しません。それに殺されるわけではなく、シルビエンタが更迭されるだけです」
「仕事をクビにされたら『被害』だし、シルビエンタは人間だ」
ライデンは即座に言いかえした。
「それに、シルビエンタは皇嗣にとって唯一の相談相手でもある。そいつを賭けるゲームなんか、俺は絶対にやりたくない」
ライデンは渋面を作った。
「なんて、格好のいいことを言っているが、本音は簡単だ。爽矢のように勝つ自信がない」
「ではどうなさいますか？　ご主人様。今日中に結論をださなければなりません。少々お急ぎを。ただ今、十一時四十分です」
庭を掘りかえしているうちに、思わぬほど時間がたっていた。
時間はあと二十分。
「それぞれの皇嗣と、競技種目を相談する時間はないな。第一、俺はまだ全ての種目と、その

ルールを把握していない。……この『棒術』ってのはなんだ？」

メールの文章を指でさして、ライデンは尋ねた。

「長柄武器によるセッションです。『槍』『棍棒』『なぎなた』などを総じて創られた競技です。長さ二メートルほどの棒を武器にして戦います」

「こっちの『投擲術』は？」

「投げナイフ、ダーツ、ブーメラン、手裏剣などをとりまとめた競技です。ただし的に当て、点数を競うのではなく、競技用の『ダガー』で相手の身体を攻撃します。受ける側は、それを避けるか、盾で弾くのがルールです」

オルテンシアは簡単に競技の説明をした。

「どうしてわざわざ身体をはる？　点数制でも勝負はつくのに」

「点数の上下だけで『決議』が下されるのは、決議を軽んじているという意見があり、このようなルールに……」

以前は弓、アーチェリーなどをまとめた「弓術」があったらしいが、どうルール変更しても点数制になった。だから廃止されたらしい。

「身体をはったからといって、今のセッションが世界のためになるとは思えないが？　ま、皇嗣側の自己満足だろうな」

簡単に言えば、「負けても、精一杯やった」と思いたいということだ。

選択できる競技は五種目。申し込んできた皇嗣は十二人。

負けるわけにはいかない。東ア連はただでさえ困窮している。国を守るためには、勝つしかないのだ。

ライデンはオルテンシアの顔を見つめた。

オルテンシアは焦る気持ちをぐっと抑えて、ライデンの命令を待っている。

「力を貸してくれ、オルテンシア。今の俺には、お前の協力が必要だ」

ライデンがそう言うと、オルテンシアは何度も小さく頷いた。

「もちろんです、ご主人様。私は現在、雷電・E・シャフト様づきのシルビエンタです」

「頼む。それからもう一つ、お前に言っておく」

ライデンはある決意を忍ばせた瞳で、オルテンシアの顔を見つめた。

「俺は鈴蘭を取り戻す。だが、お前を見捨てるつもりはない」

「……」

「お前は爽矢を愛し、支えてくれた。礼を言う。俺たちの国には『恩を仇で返すな』という言葉があるんだよ」

ライデンがそう言うと、オルテンシアは困ったように天井を見あげた。

「どうした？」

「……申し訳ございません。不意を、つかれました」

と言ったとたん、彼女は真珠のような涙を床に落としたのだった。

*

次の日、雷電・E・シャフトはコロセウムの主人公だった。

彼は申し込まれたセッションのうち、もっとも大国であるセルザビ公国を初戦の相手に選んだ。南アメリカにある中堅国家で、カナリアでの地位はBランクだ。体裁のためだけにリベンジしたがっている相手とは、格が違った。昨日のセッションでも勝ち星をあげている。

ここで東ア連を負かし、Aランク入りを果たそうという魂胆で、セッションを申し込んできたのだろう。

ライデンは長さ二メートルほどの木製の棒を脇に挟み、黒の制服姿で、コロセウムの中央に立っていた。

いつも左手に刀を持っているライデンのイメージもあり、その姿が妙に堂々として見える。これが初戦とは思えない。

背丈より長い棒を慣れた手つきで翻(ひるがえ)すと、右から背後に持っていき、左手で受けとる。軽々と回転させる様子は、曲芸師顔負けだ。

棒術を選んできたのは、相手の皇嗣だ。ライデンはそのままの種目で応じることにした。

実のところ、彼だけではない。全ての皇嗣の競技希望を、そのまま了承した。

「時間もないし……これといって、得意も不得意もない。もめてチェスになったら最悪だ」

と悩みもせず、あっさり決めてしまうところがライデンらしい。

今、ライデンの目の前には、長身で肩幅の広い皇嗣が、木綿のチュニックに防具をつけた姿で立っている。

褐色の肌にブラウンの短髪。瞳もブラウンだ。右頬に古い刀傷があった。歳は二十代後半というところだ。服装といい、どことなく、インディアン部族を彷彿とさせる男性だった。

彼がセルザビ公国の皇嗣、ムサラディン・アリムだ。

「そういえば、セルザビ公国には、甲冑をつけて棍棒を振りまわす国技があったな」

と、遅れ馳せながら気づく。

「雷電・E・シャフト様もお着替えを。それから防具をおつけください」

審判をつとめるコロセウムのスタッフが、声をかけた。

「俺はこのままでいい。防具も要らない。動きが鈍くなる」

トンと棒を脇に立てると、ライデンは断った。

「では誓約書を」

別のスタッフが書類を持ってきた。『重傷を負ったとしても、相手に責任はない』といった内容のものだ。ライデンがサインすると、ムサラディンも「要らぬ」と言って、防具を外した。

「決闘とは、相手と同じ条件でなければならない」

とたどたどしい英語で告げる。

古風なヤツだな、とライデンは内心、苦笑した。セルザビは武術が盛んな国だ。正々堂々と戦って勝利をあげる。昔ながらの戦士の「道」というものが根強く残っているのだろう。

ライデンもそういう考えは嫌いではなかった。彼の国にも「武士道」が存在する。

フロアの中央に向かうとき、ライデンの視界に、おかっぱ頭のシルビエンタが映った。

「……鈴蘭」

スタンレー・ファーナムが、椅子にふんぞり返ってライデンのほうを見ている。その背後に小さな少女を見つけたとき、ライデンは心からホッとした。

「よかった。元気そうだ」

頭や顔に目立った怪我はない。華奢な手足も無事だ。

次に「特別席」の七葉が目に入った。

中央に座すのは、現在、カイザーの位に「王手」をかけている、アルクス・ケインだ。

その周囲に、近衛騎士のごとく五人の皇嗣がいる。二人は手にメイスを持っていた。その一人はフェンシングの達人、スカンジナビアの皇嗣、エリクソンだ。

制服にメイスという取りあわせは、最初かなり違和感があった。なのに今ではなぜか、帝王を守護する、七葉の象徴のようにさえ見えるのだ。つまり、構図的に「可」だ。

「俺もついにカナリアに毒されたか？」

とライデンが独りごちる。

相変わらず、シルビエンタの姿はない。これはアルクス・ケインのアルビノ嫌いと関係があるに違いない。

「七葉なのにアルクス・ケインを入れても六人。数が足りない。いまだ爽矢の席は空席という

ことか」

ライデンは、彼の鮮やかな青と緑の瞳を思い出した。ライデンが「カラーコンタントか？」と訊いて、本人の不興をかった瞳だ。あの一対の目が今、自分を見下ろしている気配を、ライデンは感じていた。

雷電・E・シャフトの初試合。

この日は、全ての皇嗣が出席していた。CやDランクのセッションなど、いつもは関心をよせないアルクス・ケインさえも、そこにいる。

ライデンは対戦者に視線を戻し、気持ちを切り替えた。

「まずは初戦を圧倒的な強さで勝つこと……か」

オルテンシアの助言を反復する。

『それでは、本日のセッションをはじめます』

スタッフの開会宣言が響く。

「ええっと、相手が十秒ダウンするか、場外に押しだすか、『参りました』と言わせれば勝ちだったな」

今日のライデンに余裕はない。ルールを把握するのと、初めて持った競技用の棒に慣れるので精一杯だ。

『はじめ！』

「うぉぉぉ！」

合図とともに、ムサラディンが一気に間合いをつめてきた。
仁王のような形相で、獅子のような咆哮をあげる。こういった「威嚇」も攻撃の一部だ。
開始直後、強烈な一手で相手を沈める――ムサラディンがそれを狙っていることは、ライデンも重々承知だ。うまくいったとき、観戦者に与えるインパクトも大きいし、なにより自分が強いことをパフォーマンスできる。
「俺と同じ作戦というわけか……」
と呟くと、ライデンは両足を前後に開脚し、深く沈んだ。頭上で相手の一打を防ぐ。
力任せの一撃だったが、ライデンは眉をしかめて受け切った。
直後、棒をぶんと勢いよく回転させる。
ライデンの柔軟性に客席がどよめくころ、彼はすでに相手の左ひざ横を痛打していた。
相手がわずかにバランスを崩す。
「頑丈なヤツだな」
ライデンは足を閉じると同時に身体を回転させ、相手の横に回りこんだ。
その勢いと身体のバネを利用して、ムサラディンのひざ裏を強打する。
巨体が傾いだ。ひざ裏を叩かれると、人は折畳み式の机のように立っていられなくなるのだ。
「仕上げだ」
と呟いた一秒後、目にも止まらぬ速さで翻った棒が、ムサラディンの脛に決まった。
足をすくわれた大きな身体が、へし折られる大木のように前につんのめる。



ライデンがしなやかに立ちあがったと同時に、相手は顔から床にダウンした。
「……」
シンと水を打ったように静まったコロセウム。
対戦相手は脛を押さえて、悶絶している。
「手加減はしたぞ。脛あてもつけず、こんな棒で殴られたら……骨折ものだ」
クルクルと軽やかに棒を回転させると、ライデンは自分の横に棒を立て、一礼した。
この一礼は、ライデンの身体にしみついているものだ。そういう「訓え」を受けてきた表れだった。
圧倒的な存在感が、さざ波のように広がっていく。
慄然とせずにはいられないのに、この上なく爽やかな気が満ち満ちてくる。
これは欲にまみれた決闘とは一線を画すものだと、多くの皇嗣が肌で感じたことだろう。
「東ア連め。……とんでもないヤツを送りこんできたぞ」
コロセウムのあちこちで、何人もの皇嗣が同じような言葉を呟いた。
彼らは思い出した。旧日本、中国、モンゴル、韓国が合併してできた『東アジア連合共和国』は、世界一の武術大国だということを。
開始十秒でもたらされた雷電・E・シャフトの初勝利は、他の皇嗣たちを震撼せしめたのだ。

六章　ブーゲンビリアは語る

ライデンの二つ目のセッションは「投擲術」で行なわれた。
相手のダガーによる攻撃を、盾で防ぐか躱せばいい競技だ。ダガーの刃は鋭利に研がれているが、防具をつけるので命に関わる危険はない。
対戦者二名は「テリトリー」と呼ばれる円のなかで勝負を行なう。この円からでたり、「参りました」と言えば負けだ。
ライデンは相手の投げた複数のダガーを、平たい金属バットのような盾で弾いた。
カンカンカン！　と音をたて弾かれたダガーは、対戦者の心臓と頭と背後の防御マットに突きささった。
瞬時に複数のダガーを投擲するほうも、決して悪い腕ではない。だが、連続業を見切ったうえ、ダガーを弾く角度を、一々計算できるライデンは別格だった。もし対戦者がヘルメットと防刀チョッキなしで戦っていたら、即座に医療室行きだったろう。
「ま……参りました」

「なんだ、もうやめるのか？　俺はまだ一投もしていないぞ」
「負けたと宣言したんだ。何度も言わせるな！」
相手が逆ギレして、ライデンは呆れた。「経験のため一投ぐらいさせてくれ」とリクエストすると、相手はさらにキレた。
「力量の違いを即断できないほど、こっちも素人じゃないんだよ……！」
と負け惜しみともとれるような言葉を吐きつつ、憮然とした表情で退場する。
この瞬間、コロセウムが揺れた。またしても、秒単位の勝利だった。
「なんてことだ！　東ア連がSランクから降格してラッキーだと思ったら、とんでもないことに！」
「今日の雷電・E・シャフトの対戦国をもう一度チェックしろ。十中八九、負ける。どこが負けるかで、こっちの立場も変わるぞ」
「これは、大どんでん返しだ。東ア連に付け入るのはやめだ。付け入るなら、雷電・E・シャフトに負けるほうの国にしよう」
それぞれの思惑が、コロセウム中に飛びかった。
そのときだ。一人の皇嗣がシルビエンタを伴い、スタッフに近づいた。
スタッフがマイクを持ってくる。
『オルセ共和国、東ア連とのセッションを一時凍結する。理由は…体調不良だ』
と言い捨てると、さっさとでていく。

すると、セッションが予定されていた国の皇嗣が、次々に動きをみせた。
『私も取り下げる！　やむを得ない事情ができた』
『こちらもだ。理由は…ええっと、ともかく延期だ』
申し込んだセッションをキャンセルするには、相応の理由がいる。とはいえ、このまま勝負し、ライデンにこてんぱんにのされた挙句、他国にクイモノにされるのはたまらない、というところだろう。
かくして、あっという間に、すべての皇嗣がキャンセルしてしまった。
ライデンが動いた。彼がスタッフに用意させたのは、演説台だ。
コロセウムが凍りついた。
『これまで行なわれた二つのセッションの「決議」がでる模様です。皇嗣の皆様は着席してください』
スタッフの声にコロセウムは一変、「会議場」に様変わりした。
一旦、退場した皇嗣が、血相を変えて戻ってくる。
『「決議」を言う』
雷電・E・シャフトが、人生初の決議を下した。

*

「こんなことを言うと、セッションの目的を履き違えていると言われるだろうが、他人のセッションを見物しているより、ずっと気分爽快だ」

学園の中庭を歩みながら、ライデンは一歩あとからついてくるオルテンシアに語った。

まだ午前中だ。これから屋敷に帰って、昼食をとるところだった。午後から予定されているセッションは全てなくなったので、そのまま学園には戻らないつもりだ。

東ア連以外のセッションも、全面中止となっていた。東ア連のこれからの出方で、明日の情勢が大きく変わってくる。ここは一旦、様子を見ようということだろう。

「おみごとでした。ご主人様」

「お前のお陰だ、オルテンシア」

「そんな……過分なお褒めです」

実際、オルテンシアがいないのといるのとでは、まったく違っていた。

勝ったのは、ライデンの実力だ。

だが作戦を立てたのはオルテンシアなのだ。

どの国からセッションを行なうべきか？　初戦で重要なことはなにか？

十二件ものセッションを、一番賢い方法で処理するにはどうしたらいいか？

競技のルールと反則。相手の皇嗣の性格。得意業。弱点。

全部、オルテンシアがライデンにアドバイスした。

というわけで「午前中圧勝し、残りのセッションをキャンセルさせる作戦」は大成功した。

ライデンはことのほか上機嫌だ。カナリアに来て、初めてスッキリした気分を味わっていた。しかしオルテンシアは、ライデンほど喜んではいなかった。どちらかというと、憂鬱な顔をしている。

「どうした？　オルテンシア」

「その……『決議』のことでございます。あれはいかがなものかと……」

そうか？　とライデン。彼は「我ながら、いい決議だった」といった顔つきだ。

「セルザビ公国はBランクの中堅国家ではありますが、東ア連に資金援助できるほどの財源はありません」

「俺はいくらだせとは言っていない。『俺の国は冬場、餓死者がでて困っているから、援助してくれ』と言っただけだ。赤十字に募金するようなものさ」

「しかし……」

「それから、南欧のなんとかという国のほうは……『東ア連への農作物の輸出を積極的に行なってくれ』と言っただけだ」

「『困っている』『積極的』というようなあいまいな言い方は、さまざまに解釈され、誤解をうむ恐れがあります。もっと具体的になさったほうがいいかと存じます」

とオルテンシアは忠告した。

「俺は、今年の冬、東ア連から一人の餓死者もでなければいいのにと思ったんだ」

「ご主人様のお気持ちは理解しているつもりです。でも……」

オルテンシア、とライデンはなにか訴えたげな彼女の言葉を打ち切った。
「俺は爽矢とは違う。バトル中に相手の攻撃を読むのは得意だが、外交やまわりくどい交渉に頭を使うのは苦手だ。俺に爽矢と同じ頭脳を求めるな。遺伝子や知能指数が同じだとしても、性格が違う」
そう言われて、オルテンシアは小さく頷いた。
「爽矢ならもっと的確な『決議』をだしたかもしれない。俺は感情や気持ちからしか言葉が生まれてこないし……相手国のこまやかな国内情勢を調べる時間はなかった」
「そのあたりは、私の落ち度です。『勝てる』とわかっていれば、そこまでアドバイスいたしましたものを」
申し訳ございません、とオルテンシアは謝罪した。
「そうか、オルテンシアは勝てると思っていなかったのか……」
驚いた素振りで、ライデンは返した。
「い、いえ……それは……」
露骨に狼狽えたオルテンシアの反応に、ライデンが小さく笑う。
「勝てると思っていなかったのに、『初戦、圧勝しろ』と俺に言ったのか？」
「で、ですから、『もしも可能ならば』と付け足したと思います」
「それで？　負けたらどうするつもりだった？」
「どうお慰めしようかと……考えておりました」

「そうか。お前は、俺をどう慰めようか？　そればかり考えていたわけだ」
「そそ……それは……」
オルテンシアは否定しなかった。本当にそうだったらしく、彼女は珍しく言い訳しだした。
「爽矢様はお負けにならなかったので……私は、慰めるのが苦手なのです。スタンレー・ファーナム様もうまくお慰めできず……ですから『負けたら、どうしよう』と悩んでしまって」
聡明なオルテンシアが、決議のことまで頭が回らなかったのは、そういう理由らしい。
「それもこれも……ご主人様が『とりわけ得意な種目はない』とおっしゃって、私を不安にさせたからです」
「不得意もない、とちゃんと言ったぞ」
「ああいう場合は、『すべて得意だ』とおっしゃってください……！」
オルテンシアは意固地になったように、言い返した。
頬を上気させ、潤んだ瞳で訴えてくるオルテンシアを見て、ライデンは鈴蘭を思い出した。
「お前のそういう顔は初めて見るな」
ライデンに言われ、はっとしたように、オルテンシアは自分の頬を両手で挟んだ。
目を閉じて、うつむく。
「も、申し訳ございません。私、ご主人様になんて失礼なことを」
「失礼なことをされた覚えはない。お前の素顔が見れてよかったと言っただけだ。さぁ、もうこの話は終わりだ。帰って昼食にしよう」

「はい、ご主人様」
オルテンシアは頬を両手で隠したまま、ライデンに従った。
顔の火照りがとれるまで、そうしているつもりらしい。
ライデンは無意識に、北門をめざしていた。そこがある男とのランデブーポイントだと思い出したのは、聞きたくもない声が響いてからだ。
「おやおや、今日のヒーローのお通りだ」
大きなソテツの葉の影に、スタンレー・ファーナムがいた。
「鈴蘭……」
彼の側に鈴蘭もいた。彼女はライデンと視線が合ったとき、素早くスタンレー・ファーナムの影に隠れた。
なぜ隠れる？　咄嗟にそう問いただしたくなる。
「オルテンシアと仲良くやっているようだな」
スタンレーが近づいてくる。まるで下町のチンピラのようなセリフに、ライデンは気分を害した。皇嗣は国の「顔」だ。言動には十分注意しろと、ライデンは厳しい教育を受けてきた。
「いい女だろう？　オルテンシアは。そいつは爽矢・E・シャフトのシルビエンタだったんだ」
「それは聞いている。だからなんだ？」
「もう寝たか？　お前の兄はずいぶんオルテンシアを可愛がっていた」
オルテンシアの顔は真っ青だ。

「お前は……」
ライデンは近づいてくるスタンレーに、自分からにじり寄った。
「俺に喧嘩を売っているのか？　それともオルテンシアに恥をかかせたいのか？　どっちだ!?」
「さぁね」
「どっちにしろ、謝れ！」
いけません！　とオルテンシアがライデンの腰に後ろから抱きついた。
「私闘はいけません！　ご主人様。罰っせられます！」
「ほらほら、いいムードだ！　二つ返事でシルビエンタの交換を了解したのは、お前に下心があったからさ！」
「それは違います！」
オルテンシアがライデンを押しとどめつつ、スタンレー・ファーナムに言い返した。
するとスタンレーは気色ばんだ。
「シルビエンタごときが、皇嗣に口答えするな！　お前たちアルビノはな！　慈悲で生きているんだよ！　世界中で迫害されていたから、お情けで『保護区』を作ってやったんだ！」
言っていることが無茶苦茶だった。頬を痙攣させて怒鳴る様は、正視できるものではない。
七葉のエリクソンにセッションで負けて以来、彼は日に日に、精神的に不安定になっていくようだった。
行こう、とライデンはオルテンシアを庇うようにして、スタンレーの横を擦りぬけた。

このまま口喧嘩をつづければ、必ず手がでる。
負けるとは思わないが、負けたスタンレーが鈴蘭に当たり散らすのは避けたかった。
すでに鈴蘭は、スタンレーの後ろで、しゃがみこんで頭を抱えている。
「なんだ!?　逃げるのか？　それとも、今日のヒーローは、俺みたいなのと、話す気もないのか!?　お前なんか、お前なんか……アルクス・ケインにボロボロにされろ！」
最後は他人頼みか？
そう言いかえしたい腹立ちをぐっと抑えて、ライデンは足早に北門をくぐって校外へでた。

*

昼食は日本蕎麦を使った、創作料理だった。
スタンレー・ファーナムとのやりとりのせいで憂鬱な気分だったが、その料理を一口食べると、不思議なぐらい気が晴れた。オルテンシアは料理の腕も抜群だった。
「美味い。……お世辞じゃなく」
恐れ入ります、とオルテンシアはほほ笑んだ。
「爽矢様のお口に合わせて、作っておりましたからでしょう……スタンレー・ファーナム様には、味が薄すぎるようで、よくお叱りを……」
「皿をひっくり返すヤツの姿が目に浮かぶよ」

とライデンが言ってもオルテンシアは否定しなかった。どうやら本当にひっくり返していたらしい、と逆に驚く。

「本当に美味い。この『鯛と蕎麦のてんぷら』は冷凍か？」

「いえ、私のオリジナルです」

白身の魚と蕎麦が海苔で巻かれた、芸術的なてんぷらを見て、ライデンは感心した。

爽矢のために、日本料理と中華料理の研究をしたのだ、とオルテンシアは語った。

思い出話をするオルテンシアの表情は生き生きとしている。

「夕食は中華風、鮑の姿煮にいたしますね。他にご要望はございますか？」

「豪勢だな」

「本日は初陣で、初白星の日でしたもの。お祝いをしなければ。爽矢様のときは『赤飯』というものを初めて作りました」

オルテンシアの心には、いつも爽矢がいるようだった。

そのことが、意地らしくもあり、少しばかり歯痒かった。彼女はライデンに、爽矢の面影をおっている。混同するなとライデンが命じても、それはきっと叶わないのだ。

食後、香りのいいジャスミン茶を注ぎながら、「ご主人様」とオルテンシアは話しかけた。

「なんだ？」

「差しでがましいことですが、あまりスタンレー・ファーナム様のことを、悪くとらないでくださいませ」

「どうして!?　……あいつはどこからどうみても、最低最悪の人間だ」
「あの方も、カナリアに来られた当初は、こうではなかったのです。とてもユーモラスで、ジョークもうまく……年下の皇嗣様の面倒をよくみておられました。喧嘩をするほうではなく、喧嘩を仲裁する側だったのです」
「……」
「学園でもっとも人気の高い皇嗣様でした。やがてアルクス・ケイン様が別の派閥を作り、二つの大きなグループに分かれました。セッションが勝負事に移行し、強者が優勢になると、アルクス・ケイン様の力が増して……スタンレー・ファーナム様は、孤立していったのです」
とオルテンシアは経緯を語った。
「お前はスタンレー・ファーナムは被害者だと言っているのか？」
ライデンは訊いた。
「このカナリアに加害者はいません。ご主人様はまだお分りにならないかもしれませんが」
オルテンシアはそう答えた。
「この島にいるのは『人柱』だけだ、と爽矢様はいつもおっしゃっていました」
人柱。その単語が、ライデンの心に杭のように突きささった。
たった一人のカイザーを生むために、カナリアに閉じこめられた皇嗣たち。
そして、その皇嗣を支えるため、全身全霊で奉仕するシルビエンタたち。

――皇嗣もシルビエンタも、等しく人柱なのだ。

はっ、としてライデンは庭を振りかえった。

「どうかなさいましたか？」

昼下がりの眩しい庭には、言葉を発する者の姿はない。

だが、ライデンはたしかに聞いた。「誰か」の声を。

「いや……気のせいだ……」

ライデンは、オルテンシアと自分自身に、そう言い聞かせた。

＊

午後九時前。ライデンの持つ衛星電話が鳴った。

そのとき、オルテンシアは買物に行っていた。ライデンが「アイスクリームが食べたい」と言ったからだ。カナリアの皇嗣居住区には、ショッピングセンターも併設されている。

『よくやった！　雷電・E・シャフト！　がははは……笑いがとまらん！』

相手は東ア連のラギ・常磐・ファン首相だった。雷電がこの世でもっとも苦手な相手だ。

先日、電話ごしに口喧嘩したとは思えないほど、彼は上機嫌だった。

『セルザビ公国が、二億オンの援助を申しでてきた！』

「なに!?」

聞いたライデンはびっくりした。二億は、UGT後の他国支援としては、ありえない額だ。

それに、ライデンの下した決議が全世界に報じられて、まだ三時間しかたっていない。

「潔いというかなんというか…。お国柄が想像できるよ」

ふと、セルザビの皇嗣の顔が浮かんだ。

昔ながらの戦士を彷彿とさせる男だった。

ああいう男は、勝者を敬う。

ライデンが「困ってるから助けてくれ」と言えば、捨て身で助ける。

「くそっ、言い方を間違えた……」

ライデンは舌打ちした。昼間のオルテンシアの忠告が耳に痛い。『困っている』『積極的』というようなあいまいな言い方は、さまざまに解釈され、誤解をうむ恐れがある。彼女はそう言っていたではないか。

皇嗣には色々いるのだ。世界には色々な国がある。

あいまいな決議を、百ドル紙幣一枚で終わらせる国もあるだろう。

一方、セルザビのような国もあるのだ。

「にしても、やりすぎだろう？　これじゃ、セルザビが困窮する」

ライデンは困惑と呆れを足して二で割ったような顔をしている。

『他国のことなど気にせんでいい！　こっそり貯めこんでいたのかもしれん。がはは！　こ

れでこの冬は乗りきれるぞ！』

自分勝手な……とライデンは首相を非難できなかった。

自分が一番、勝手なことをしたのだ。

決議を下すのは、セッションで勝つより難しい。ライデンはそれを思い知った。

自国のためにという強い想いが、『ネオ・エデン』計画を歪める原因になることを、ライデンはうっかり失念していたのだ。

決議は常に、世界のすべての人々のためにあるべきものでなければならないというのに。

『中央大陸から小麦と豆を買おう。まて、せっかくの金だ。もっと有意義に使う手もあるな』

「バカなことを考えるな！　貧しい者を救うための『決議』だったのに！」

ライデンは電話口に噛みついた。

『お前に口を挟む権限はない。雷電・E・シャフト。使い道は「評議会」で決める』

「その金でアンバーから武器を買ったら許さないぞ！」

『ふむ。わかっているじゃないか。お前が七葉を蹴って、アルクス・ケインはご機嫌ななめだ。アンバーに睨まれたままでは、落ち着かん』

「やめろ！　この悪徳政治家！」

ライデンが怒鳴ると、黙れ！　と首相は一喝した。

『お前は勝てばいいんだ！　勝てばな！　国政に口をだすな。爽矢ならいざしらず、スペアのお前ごときに侮辱されるいわれはない！』

「！」

スペア――またその一言で、俺を足蹴にするのか？

ライデンは煮えたぎる思いで、首相の言葉を聞いた。

悔しくても否定しきれない「ある事情」が、ライデンにはあった。

東ア連が皇嗣に選んだのは、あくまで爽矢なのだ。

彼が亡くなったから仕方なく、ライデンが送りこまれた。

首相はライデンには敬意を払わない。正しいことを訴えても、逆ギレするだけだ。

爽矢なら、素直に意見を聞き入れたに違いないのに……。

「俺を……スペアスペアと呼ぶな！」

火山が噴火するように、ライデンはかつてなかったほど感情的になった。

「俺は……雷電・E・シャフトだ！　今度俺をスペアと呼んだら、わざとセッションで負けてやるからな！」

『国を裏切るつもりか、雷電・E・シャフト！　お前の「育成」にどれだけ金をかけたと思っている!?　こういうイレギュラーに対処するため、三年かけて、お前を世界一の皇嗣に仕立てあげたんだぞ！　教養、帝王学、一流の武術家の指導……』

ダン！　と電話を壁に叩きつけた。もう一言も聞いていられなかった。

「あいつ、爽矢が死ぬことを予測して、俺を育てていたみたいに……！」

たしかに、あらゆる武術を会得した。皇嗣としての立ちふるまいや、自国に古くから伝わる

兵法、西洋の帝王学もだ。

これまでにも、いくつかの国で皇嗣の交替を余儀なくされた事例がある。皇嗣が病気になるか死亡した場合、後継の皇嗣がすぐに必要だった。

セッションが決闘に移行していることを、首相は知っているようなニュアンスだった。ということは、他国の指導者も知っていておかしくない。どういう経緯、あるいは経路で漏洩したのかわからないが、知ったからにはどの国も、強い後継をひそかに育てているはずだ。

「カナリアの歪みを正そうとせず、他国を出しぬくことに奔走するのが、現在の国家指導者の実情か…」

ライデンは荒々しくソファに座ると、頭を抱えた。

「おかしいだろう？　こういうの。世界は……強い皇嗣がほしいのか？」

ネオ・エデン計画は、とっくに崩壊している。ライデンにはそう思えた。

「そのうち、現皇嗣を暗殺して、強い皇嗣とチェンジする国がでてくるぞ」

自分でそう口にして、はたと、ライデンは顔をあげた。

「爽矢は……本当に自殺だったんだろうな？」

まさか、とライデンは疑心暗鬼になった。

爽矢は本当に自殺だったのか？

それとも、自殺に見せかけられたのか？

「……いや、まさか。あの首相にそんな度胸は…」

まさか、と思いつつも、ライデンは落ち着かない気分だった。
膨れる疑惑を打ち消すことができないのだ。
「そもそも爽矢に、自殺する理由があったのか？」
もしも、その理由を説き明かす「鍵」があるとしたら？
「……それは、ブーゲンビリアの根元に埋まっている」
にわかに、ライデンは立ちあがった。

*

「ご主人様、なにをなさっておいでなのです!?」
「いいところに帰ってきた！　オルテンシア、懐中電灯を持ってこい」
オルテンシアがアイスクリームを買って戻ってきたとき、ライデンは庭中のブーゲンビリアの根元を片っ端から掘りかえしていた。
それも、すさまじい勢いでだ。首相に対する怒りもエネルギーに換えていたから、オルテンシアには「暴走」に見えたかもしれない。
「爽矢の死の……理由が……知りたい！」
はねあげた土で、ライデンの衣服はすでに泥だらけだった。
「他殺のセンは本当になかったのか？」

「まさか……ご遺言が……直筆の」
「なんて書いてあった？」
「私は存じません。ご遺言はご遺体とともに本国に……ご主人様はご存じないのですか？」
「知らない！」
「でも、ご兄弟では……」
「兄弟でもだ！」
シャベルを堀った穴のなかに叩きこむと、ライデンは肩で息をしながら、花の根元に座りこんだ。
「俺には……国政に口をだす権利もないし、首相に逆らう権利もない。ここへ来ることを拒否する権利もなかった！　拒否したら……生きる権利もなかっただろう」
なぜなら……とライデンはつづけた。
「俺は、ただのスペアだからだ。皇嗣だったのは、爽矢だ。国は俺を双子の弟として送りこんだが、同じ腹からは生まれていない」
オルテンシアが目を見開く。ライデンはなかばヤケクソといった表情で、恐るべき出生の秘密を語りだしたからだ。
「俺は臓器移植用（インプラント）に培養された『クローノイド』だ。だから、爽矢にツェ・ツェンという婚約者がいたことも……知らない」
爽矢自身のことも「情報」として知っているだけだった。本人と話したこともない。

「クローンは、国際法で禁止されて……」
擦れた声で、オルテンシアは呟いた。
「『クローン（クローン）とは似て非なる者（イド）』だ。不妊治療と人工受精のすえできた双子だと、書類上は処理されている。本当は人為的に双子を作って、一方だけを母親の胎内に戻す。だから爽矢は母親の胎内で育ち、俺は……培養液で育った」
「……」
「培養液からでたのは、爽矢が生まれた日だそうだ。これでも誕生日は一緒か？」
オルテンシアの手元から、カタンと保冷バッグが落ちた。
「俺は自分が『クローノイド』だと知らないまま、大きくなった。爽矢が皇嗣に選ばれたとき、すべてを教えられ、三年ぐらい前から……急に英才教育がはじまった」
ふん、とライデンは自嘲し、つづけた。
「今考えれば、あれはカナリアのセッションが、決闘に変わったときだったんだ。それまで俺は単なる臓器提供用だったが……別の意味でのスペアが必要になったというわけさ」
オルテンシアは、怖いほど真剣な面持ちでライデンの話を聞いていた。
「突拍子もない話で、信じられないか？」
とライデンが問うと、彼女は蚊の鳴くような声で「いいえ……」と答えた。
「信じられないなら、信じなくていいさ。けれど大金持ちのなかには、自分や家族の『クローノイド』を培養しているヤツがたくさんいるんだ。そういう『自分のことしか考えられない』

時代なんだよ。爽矢を恨む気はないが……親は恨む」
「爽矢様は、そのことを知っておられたのですか？」
「知っていただろう。あいつは東ア連の皇嗣だ。自分のことを全て知る義務があった。どんなに汚い国の実態も、知ることが務めだった」
「……」
「自分が死んだら、俺がここへ来ることも……わかっていただろう」
どちらがつらいのだろう？　とライデンは思った。
知る権利を持たない自分か？
知りたくないことも知らなければならなかった爽矢か？
「さあ、オルテンシア。俺の身の上話は終わりだ。懐中電灯を」
「で、でも、本件は物議を醸しだす重要事項です。悪くすれば……」
「悪くすれば、俺は強制送還され、秘密裏に粛正されるだろう。俺はあくまで日陰の存在だ。一国を代表する皇嗣になど、なれるはずがない。このことが公表されたら、東ア連は窮地に陥る。いいさ、貧しい民を救わず、アンバーから武器を買うようなヤツがトップじゃ、行く末は知れている。どこかの国が併合したほうが……マシだ！」
ライデンはふたたびシャベルを振りあげた。
「くそっ、木の根が邪魔だ！　オルテンシア、斧を持ってこい！」
「ご主人様……ヤケになっておいでなのですか？」

「そうさ！　ならずにいられるか！　お前はなったことがないのか、オルテンシア？　尽くしても尽くしても『アルビノのくせに』と言われ、蔑まれる。腹は立たないのか!?」
「その感情こそ、害悪だと……」
「そう洗脳されているんだ。俺もそうだ。『スペアであることを忘れるな』と言われつづけ、つらくても我慢することに慣れてしまった。俺はお前と同じなんだ。同じ……なんだよ」
ライデンはブーゲビリアの根を素手で引き千切りはじめた。
「畜生！」
引き千切ったものを、掘りかえした地面に投げつける。爪のなかに土が入り、指先が赤く染まっても、彼はやめようとしなかった。
「おやめください。ご主人様！」
見兼ねたオルテンシアが駆けよってきた。
「止めるなオルテンシア！」
「手が傷だらけに！」
「こんな手、誰も欲しがらない。俺の心臓も腎臓も……骨髄ももう、誰も欲しがらない！」
こんなに悲観的になったのは初めてだ、とライデンは思った。
死んだ爽矢のことを、兄弟として悲しんだことはない。
そのかわり、爽矢が死んだとき、自分まで「不必要」になったような絶望は感じた。
爽矢がいてはじめて、自分の存在理由があったからだ。



「俺はカナリアに来るしかなかった。セッションで勝つ以外、利用価値もないスペアだからだ。俺は……破棄寸前なんだよ……オルテンシア」
ライデンは根を捨て、オルテンシアにしがみついた。
「お前は……爽矢に破棄されたとき、怖くなかったか？」
「……ご主人様」
「俺は怖い。なぁ、どうして普通の人間は、ちょっと違うだけの俺を差別するんだろう？」
ライデンはオルテンシアに問う。
「俺はそれが納得できない」
「……」
「どうして普通の人間は『自分のこと』しか考えないんだ？　俺にはわからない。俺は他人のために生まれ、他人のために生きてきたから……本当にわからないんだ」
オルテンシアの胸に頭をくっつけて、ライデンは顔をあげようとしなかった。
オルテンシアがライデンの背中に、そっと手を添える。
「……すまないオルテンシア。つまらない話を聞かせてしまったな。忘れてくれ」
「ご主人様、手紙を探しましょう。爽矢様が大事になさっていた手紙を探すのでしょう？」
オルテンシアは涼やかな声で囁いた。
「……ああ……」
「懐中電灯を持ってきますね」

「……ああ」
ライデンは力が抜けたように、オルテンシアから手を放した。
オルテンシアが静かに踵を返す。
後ろを向いた直後、彼女はほんの数秒立ちどまり、袖で頬を拭った。

*

ライデンはその夜、一晩かけて庭中のブーゲンビリアの根元を掘り起こした。
オルテンシアは埋められていた手紙を取りだすと、掘りかえされた穴を丁寧に埋めていった。
花が哀れでならなかったようだ。
庭からは四十通以上の手紙がでてきた。
リビングの机にそれらを日付け順に並べたとき、外は白み、早起き鳥の声が響いていた。
ライデンはオルテンシアとともに、全ての手紙に目を通した。
手紙は、五年前から昨年まで、約四年間分あった。
ツェ・ツェンはほぼ毎月、爽矢に手紙を送っていたのだ。
「ツェ・ツェンはずっと入院していたんだな」
ライデンは呟いた。
小さな字で便箋いっぱいに綴られた文章を読んで、ライデンはツェ・ツェンとはどんな少女

なのかと想像した。
甘く匂う金木犀（きんもくせい）のようなイメージがした。
夕食のメニューや、テレビドラマの話。最近読んだ本の話。ファッションの話。
『最近、格好いい研修医がきたの。イケメンよ』
こんなことまで書いてあった。
かと思えば、各国の新聞を取りよせ、それぞれの国の見解の相違をわかりやすい文章で書く。
金木犀のイメージがする少女は、頭がよかったのだろう。何ヵ国語もできたようだ。
『お父様がね、爽矢様との婚約を解消しろっていうの。ツェン一族と「評議会」が大喧嘩したらしいわ』
二人の関係は、数年のあいだに大きく変化した。
婚約者だったのに、婚約解消となり、ツェ・ツェンには別の婚約者ができた。
ところが、ツェ・ツェンはその彼との婚約を一方的に破棄。
手紙には『これで私、バツ二だわ』とおどけた言いまわしで、書かれてあった。
それから半年後、再びツェ・ツェンは爽矢と婚約する。
国の決めた婚約ではなく、二人が自分の意志で決めた婚約だった。ひょっとすると、二人が『再婚約』したことを、だれも知らないかもしれない。
このとき、爽矢は十七になったばかり。ツェ・ツェンは十六だった。
そして手紙の内容は徐々に深刻なものになっていく。

――ツェ・ツェン……！

はっ、としてライデンは庭を振りかえった。
「どうかなさいました？　ご主人様？」
オルテンシアが不思議な顔をして、庭を窺う。
「庭に爽矢が……」
ライデンは目を見開いて、庭の一角をさした。
「お前には見えないか？　オルテンシア」
「いえ……」
「幻覚か？　前にも何度かあった。俺にだけ見えているのか？」
目をこすっても、白々とした庭に透けて見える人影は消えなかった。
どうしてこんなものが見えるのか？
自分が壊れかけているのか？　それとも爽矢の怨念か、幽霊か？
「なにが見えるのですか？」
とオルテンシアは尋ねた。
「爽矢が見える。透けているが、爽矢だ」
とライデンは説明した。

「手紙を握りしめて……歯を食いしばっている。泣けばいいのに……我慢している」
「なにかおっしゃっていますか？」
「声は聞こえない。ブーゲンビリアの木に八つ当りしている」
花の木の根元を蹴っている爽矢のビジョンは、一条の朝日が庭に差しこんできたとき、すっと消失した。
「爽矢様は花を愛していらっしゃいました。その花に八つ当りするなんて想像できません」
とオルテンシアは言った。
「俺は、これがどういう現象なのか知りたい」
「共鳴現象でしょうか？　双子には離れたところにいる兄弟の気持ちがわかると言います」
「見えたのは幻影だ。それに爽矢は死んでいるんだぞ」
「想いや残留思念は、時間をこえるというお話を読んだことが……」
「それはただのフィクションだ。そういえば、お前も爽矢もファンタジー小説愛読家だったな」
普段聡明なオルテンシアが真顔で言ったので、ライデンは苦笑した。
ライデンはファンタジーは読まない。不幸な出生を持った主人公が、魔法やらなにやらでウソのように幸せになる話が多くてイヤだった。
だが、爽矢はそんな話が好きだったようだ。
彼は、本のなかの絵空事を、絵空事と知っていて、ファンタジーを愛したのだ。
たぶん、そこには現実にない「夢」があったから……なのだろう。

ライデンは机のうえに並んだ手紙のなかの、一通を見つめていた。
「これなのでしょうか？　爽矢様が死んだ理由は」
オルテンシアも、同じ手紙を見つめつつライデンに訊いた。
「わからない。なんとなく、そんな気もするし……そうじゃない気もする」
ライデンの口から、遣る瀬ない吐息がもれた。
『私はこの冬を越せそうにありません。爽矢様ごめんなさい。私は神様に直談判に行こうと思います。一日も早く、世界がひとつになるために、力をお貸しくださいって、訴えてきますね』
この手紙を書いた年に、一人の少女がウランバートルの病院で亡くなったことは容易に想像できた。だが、爽矢がそのせいで自殺したのかどうか、ライデンにもオルテンシアにもわからなかった。
「ツェ・ツェンが亡くなったのは、去年の話だ。爽矢が自殺したのは……ついこの間だ」
時間が空きすぎている。
だからライデンもオルテンシアも、確証を持てなかったのだ。

七章　七葉の制裁

日が昇る。今日も、セッションが行われる。
少しでもいいから仮眠をとってくれとオルテンシアに乞われて、ライデンは寝室へ向かった。
が結局、ツェ・ツェンと爽矢のことをあれこれ考えてしまい、眠れなかった。
「今日も暑い一日になりそうだな……」
眠気ざましにシャワーでも浴びようと、ライデンは浴室に赴いた。
「？」
浴室には電気がついていて、なかからシャワーの音がしている。
「オルテンシアが使っているのか……」
さして、気にもせずライデンはもう一度、寝室に戻った。
ザザザ……と激しい勢いで流れていたシャワーの音を思い出す。
そのとき、ライデンはオルテンシアの裸身ではなく、彼女が泣いている姿を想像した。
泣き声を消すため、シャワーを使ったのではないか？　そう思ったから、ライデンは彼女を

急かすことなく、浴室が空くのを待った。
横になって待つあいだに、ライデンはうつらうつらした。
はっとして目を開いたのは、午前九時十五分。
「まずい！　完全に遅刻だ！」
ガバッと起きだして、リビングへ直行する。
だがそこに、オルテンシアの姿はなかった。朝食の用意もされてない。
「朝、アナウンスが入る、小型スピーカーの配線が、切断されている…」
それに気づいたとき、ライデンは「非常事態」を察知した。
「オルテンシア！」
彼は浴室へ駆けだした。
浴室は電気がついていて、シャワーの音がしたままだ。
「どうかしたのか!?　鍵を開けろ！」
押しても引いても開かないドアに、ライデンは工具を持ってきた。
すりガラスの扉を工具で叩き割る。
割れた穴に手をつっこみ、鍵を外すと、ライデンは服のまま浴室に飛びこんだ。
白ユリのような美女は、メイド服のまま湯につかっていた。
真っ赤に染まったバスタブを見たとき、ライデンはなにが起こったのか悟った。
「オルテンシア!!」

赤い湯から彼女を担ぎだす。シャワーを止め、オルテンシアの右手にある刃物を奪った。深く傷ついた左手首を強く摑んで止血すると、心臓より高い位置まで持ってくる。彼女の肩を後ろから抱きしめ、ライデンは苦渋の声をだした。

「なぜだ!?　どうしてだ？　オルテンシア！」

どうして、もっと早く声をかけなかったのだ、とライデンは後悔した。

浴室にいることを知っていて、長時間放置したことが最悪の結果を招いたのだ。

「私は……だめなシルビエンタです。爽矢様」

オルテンシアの白い唇から、声にならない声が流れた。その顔は白滋の白さを通りすぎ、蒼(あお)く透けていた。

「二人目の爽矢様を……上手にお慰めすることもできず……申し訳ございません」

「そんなことで！　そんなことで手首を切ったのか!?」

「私は爽矢様の……秘密を知るに値しない……のです」

オルテンシアは弱々しい眼差しを、ライデンに向けた。

「シルビエンタを信用しては……いけません。シルビエンタは、ホームの『スパ…イ』なのです。皇嗣様の私生活を、毎日報告する義務が……」

ライデンの顔つきが変わった。

「心身ともに…異常がないかを調査(チェック)……セッションを行うに値しない、事由…発覚…した場合、皇嗣様の交代を…決定する…権利を、ホームが握って……」

でも……とオルテンシアは声を震わせる。
「私が……報告すれば、二人目の爽矢様が……破棄されて…」
「俺が告白したせいか？　それでお前は、ホームに報告せずにすむ方法を考えたのか？」
「私は……耐えられません。爽矢様を一人、亡くしただけで、どれほど…つらかったか。二人も亡くしたら……私は、どうせ……壊れて」
オルテンシアはそっと右手をあげた。
なにかを探るように、手を動かす。
「爽矢様……爽矢様」
「なんだ？　オルテンシア」
「目が霞んで……どこにいらっしゃるのですか？」
「ここにいる。お前を……抱いている」
「……それは、恐れ多いことで…ございます」
オルテンシアは、ずっとライデンのことを「爽矢様」と呼びつづけた。
ライデンはもう否定しなかった。
「爽矢様……ツェ・ツェン様とは……お会いに、なれました？」
虚空を見つめて、オルテンシアはライデンに尋ねた。
「ああ……いや、これから会いにいく。……お前も一緒だ」
ライデンの言葉を聞いて、オルテンシアは一粒、涙を流した。

それきり、動かなくなったオルテンシアの肩を抱いて、ライデンは「すまない」と謝った。
「ふがいない皇嗣で、申し訳なかった。お前ぐらい……守ってやりたいと、思っていた。お前と鈴蘭ぐらいは、守ってやれると……過信していた」
申し訳なかったと、ライデンは何度も何度も、彼女に詫びた。
「……ご苦労だった。オルテンシア」
ゆっくり休んでくれ。
それがライデンがオルテンシアにかけた、最期のねぎらいの言葉だった。

*

オルテンシアの密葬をすませた後、ライデンは三日間、セッションを無断欠席した。
「新任のシルビエンタでーす」と訪問した、ツインテールの少女も、追いかえす。
校内アナウンスが流れるスピーカーの修理も拒否した。
四日目。
雷電・E・シャフトは久々にコロセウムに姿を見せた。
喪に服しているという意味だったのか、制服ではなく黒一色のパオ姿だった。
『それでは本日のセッションを開始します。スカンジナビア共和国皇嗣、ラーシュ・エリクソン様は前へ』

スタッフの声で、七葉の一人が颯爽と登場した。すでに剣術の防具で身を包んでいる。かつて、スタンレー・ファーナムを負かしたフェンシングの達人だ。

『もうお一方、東アジア連合共和国皇嗣、雷電・E・シャフト様。前へ』

ライデンは防具もつけず、エリクソンの前に突っ立った。

「雷電・E・シャフト様も防具を。『剣術』の試合で防具をつけないと、命に関わる怪我をする可能性があります」

スタッフがライデンに警告した。

「要らない。俺が死んだら別の皇嗣がやってくる。それだけだ」

感情を失ったかのような声で、ライデンは答えた。

昨夜、ライデンにセッションの申し込みをしてきたのは、エリクソンだった。申し込みは一件のみ。後に回すことも、時間切れを狙うこともできないセッションだ。

「この一週間で、ずいぶん人が変わったようだね？」

エリクソンがマスクをとって、ライデンに一歩近づいた。

金色の短髪をかきあげ、目を細めて様子を窺う。

「スタンレー・ファーナムとシルビエンタをトレードした早々、そのシルビエンタが自殺したと聞いたよ」

「……よく知っているな」

「狭い島だからね。出入りするシルビエンタが代われば、すぐに噂になる。けれど……そうク

ヨクヨするな。たかがシルビエンタだ」

たかが。そう言ったエリクソンの顔を、ライデンは睨みつけた。

「シルビエンタごときで自分を見失うなと善意で忠告しているんだ。君が三日もセッションを無断欠席したことのほうが、よほど問題だ」

ライデンは無言でグッと拳を握った。

「俺は今……お前に手加減できない」

そう忠告を返す。

ははは……とエリクソンは陽気に笑った。見た目も相当イケているが、自信と自尊心をオーラのように纏っている。憎らしいほど、チャーミングな男だった。

「必要ないよ、そんなもの。ところで、私はどうしたらいい？」

「俺が防具をつけていようがいまいが、手加減しない。あんたはそういう男だ」

「ご名答だ」

「だが、あんたが勝っても、東ア連から分捕れるものはそんなにない」

「いいんだ。これは『制裁』だから」

え？　とライデンは訊きかえした。

「君の『決議』が、他国を危機においやった。覚えはあるだろう？」

セルザビのことだ、とライデンはピンときた。二億の経済援助を誘発した責任を、追及されているのだ。

「一つの国が危機に陥ると、周辺の国々も混乱する。すなわち、世界が混乱する。七葉にはね、『バカにお仕置きをする』という役目があるんだよ」

とエリクソンは言った。

「誰が決めた？」

「アルクス・ケイン様だ。しかしまぁ、発起人は誰でもよかった。問題は『決議』の下手な皇嗣ほど厄介なものはないという現実だ。そういう皇嗣に罰がくだらないと、どんどんバカが多くなる。そして世界が崩壊する」

「……」

「カナリアが世界を崩壊させてどうする？　そうだろう？　だから、制裁を受けてもらうよ」

言うべきことを全て言い終えたのか、エリクソンはマスクをかぶり、剣をかまえた。

これも自分の撒いた種か……とライデンは自嘲した。

「バカにお仕置きをする」と言われても言いかえせなかった。

その通りだ。「決議」はド下手で、女一人守れない。

もっともっと罵って、俺の過信を諫めてくれ。

ライデンは今、そんな気分のただ中にあった。

＊

制裁は、甘んじて受け入れるつもりだった。
打たれ、打たれ、全身痣だらけになったら、かえって自分自身も納得できそうだった。
なのに、ライデンはエリクソンの剣先を紙一重で躱しつづけた。
「どうした？　ずっと躱すつもりなのか!?」
エリクソンは十五分ほど前から焦れている。
すでに六ラウンド目だ。ライデンは右手の剣を下げたまま、防戦一方だった。
彼は迷っていた。いや、負けようとしていた。
なのに、身体が勝手に……剣を避ける。厄介な防衛本能だ。
どうすればいい？　いっそ、目でも閉じるか？
と思ったとき、コロセウムからヤジが飛んだ。
「真面目にやれー！」
この声を皮切りに、コロセウムが罵声の嵐となった。
「ふざけるな！　この弱虫！」
「エリクソン、斬れ斬れ！　手加減するな！」
「そいつに制裁を！」
「そうだ。制裁を！」
制裁！　制裁！　制裁！
コロセウム中が叫びだした。

第六ラウンドが終わり、二分間の休憩に入っても、ヤジは止まなかった。
ライデンは今までに味わったことのない侘しさを感じていた。
「俺は……世界中から……必要とされていないのか」
剝きだしの敵意のなかで、ライデンは独りぼっちだった。
孤独には慣れているつもりだったのにな、と心のなかで呟く。
母も父も、側にはいなかった。クローノイドの周囲にいるのは、白衣の研究者だけだ。
ここには、その研究者ほどの愛情を持つ者もいない。
七ラウンド目の後半。
エリクソンが、いきなり跳躍した。切っ先は寸分違わず、ライデンの心臓を狙っていた。
余計な感傷に支配されていたライデンは、わずかに躊躇した。
突かれて死ぬのも悪くない。そう思った瞬間だった。
「ライデン様！」
少女の悲鳴を、ライデンはたしかに聞いた。
鈴蘭の声だ。
声に弾かれたように、ライデンは右手にある剣を天井に向かって放ち、両手のひらでエリクソンの剣を挟んでいた。
心臓を貫かれる寸前で制止した剣先。それを素早く脇に流すと、エリクソンの頭上に落下してきた自分の剣を、ジャンプして摑む。

「頑張って！　ライデン様！　ライデン様！」
鈴蘭……。
お前はなんていうタイミングで、声をかけるんだ。
ライデンの胸はうずいた。
胸のうずきは、どんどん鮮明な「痛み」に変わっていった。
あとになって、それは痛いのではなく「熱い」のだと気づいた。
エリクソンは反転し、ライデンの首に向かって、剣を横に薙ぎ払った。
ライデンの身体が後方に跳ねた。剣を持ったままバック転し、そのとき爪先で相手の顎を狙う。
ヒット寸前、ライデンは足を退いた。トンと後方に着地する。
「悪い。つい、足がでた。剣術では、ルール違反だったな」
銀光を放つ競技用の剣を今更のように眺め、ライデンは剣の柄を握りなおした。
「さっき、自分の剣を手放したように見えたが？」
エリクソンは声を発した。
「ああ。けど、床には落ちていない」
エリクソンのシルビエンタが動いた。スタッフに駆けより、猛然と抗議している。
剣術では、剣を弾かれたら負け、というルールがあるからだ。
『一時、セッションを中断いたします。スタッフは全員こちらへ』

アナウンスが流れ、二十人ほどのスタッフが一ヵ所に集まった。
白い羊の群れを連想するスタッフは、コートの中央で輪を作り、三分ほどして散った。
主審と覚しき女性が、「試合を続行してください」と告げる。
エリクソンのシルビエンタはまた、猛然とまくしたてたが、スタッフは却下した。
「もういい！　下がれ！」
エリクソンがそのシルビエンタを一喝した。剣先のように鋭い声だ。
北欧の貴公子が剣をかまえ、ライデンとの間合いをとる。
エリクソンはすぐに動かなかった。先程までのライデンとは違い、まったく隙がないことを、肌で感じていたのだ。
いざ、踏みこもうとした瞬間、第七ラウンドが終了した。
ちっ、と舌打ちしてエリクソンが剣をさげる。
ライデンはほっと一息ついてから、コート際に設けられた椅子に向かった。
エリクソンが、シルビエンタの差しだしたタオルを、邪険に突っかえすのを傍観する。
態度が荒々しい。スカンジナビアの皇嗣は、稲光が走る空のように荒れ模様だ。
「あいつ…そこまで冷たくしなくてもいいだろうに」
と独りごちたとき、ライデンは後ろからポンと肩を叩かれた。
びっくりして振りかえる。
「あんた……」

「セルザビ公国のムサラディン・アリムだ。覚えているか？」
「ああ、もちろん」
そこには、褐色の肌の大男がいた。ライデンに棒術の試合で負けた皇嗣だ。ライデンとしては、「一億オンという桁違いの資金援助をした国の皇嗣」という印象のほうが強い。
「貴公にセコンドがいない。これは対等なセッションとはいえない」
とムサラディンは、たどたどしい英語で言った。
「セコンド？　ああ、シルビエンタのことか」
オルテンシアを失って以来、ライデンは新しいシルビエンタを拒否していた。
ライデンはムサラディンにこう返した。
「俺は自分のせいでシルビエンタを失った。だから、セコンドはいないんだ」
「ならば、私がやる」
「はぁ？」
ライデンが頓狂な声をだしたのは、当然だ。そもそも、ライデンのセルザビ公国に対する決議がもとで、制裁が行なわれている最中だ。ムサラディンは被害者ではないか。
「そりゃ、おかしいだろう？」
「セッションが対等でないほうがおかしい」
どこまで律儀な性格なんだ、とライデンは呆気にとられた。
ライデンと対戦したときにも、彼は「対等」に固執していた。防具をつけないという条件を

同じにして戦ったのだ。

「気持ちは嬉しいが、セコンドは要らない。ありがとう」

と言うと、彼は「そういうわけにはいかない」と頑固に言いかえし、スタスタとスタッフのところへ申し立てに行った。

第八ラウンドが始まる直前、ライデンのもとに帰ってくると、彼は言った。

「私がセコンドにつくことは、却下された。代わりに、私のシルビエンタがつく」

「はい？」

大きく「？」をリアクションで示したが、ムサラディンには通じなかった。

小柄なシルビエンタがライデンに近づいてきた。黒のアオザイに白いエプロンをつけ、三つ編みのお下げ髪をしている。その髪にはストライプのリボンがたくさんついていた。

「お願いいたします。シルビエンタ・アマリリスです。リリで結構です」

彼女は、可愛らしい声ではきはきと自己紹介した。ペコリとお辞儀すると、お下げが大きく揺れる。鈴蘭より幼いシルビエンタだ。十二、三歳だろうか。

以前、ムサラディンと戦ったとき、この少女を見た覚えがない。

ムサラディンがでかいから、小さなシルビエンタが視野に入らなかったのだろうか？

「雷電・E・シャフト様。どうか、真剣に戦ってください。私のご主人様は、貴方様が真剣に勝負することを、心から望んでおられるのです」

とリリは告げた。

「お前は……俺に負けてほしくないのか？」
ライデンはリリに尋ねた。
すると小さなシルビエンタは爪先立ちになり、ライデンの耳にコソコソと囁いた。
「私とご主人様は、雷電・E・シャフト様に勝ってほしいのです」
「……」
「貴方様がたくさん負けると、ご主人様はすごく弱い人に負けたことになります」
ライデンはこの理屈に苦笑した。
なんてわかりやすい連中だ、とも思った。
席に戻ったムサラディンを、コートから見あげる。
彼はライデンの視線に気づくと、親指をつきだして「GO！」とゼスチャーした。
鈴蘭が叫んだとき同様、ライデンの胸はうずいた。
「鈴蘭といい、お前たちといい……俺を焚きつけるのが、うまいよ」
剣を手にコートの中央へ向かう。
第八ラウンドが開始された。
試合の流れは、エリクソンにあった。彼は容赦なく、ライデンを攻撃した。
一分経過した時点で、ライデンのセコンドについたシルビエンタ・リリが「タイムを要求します！」と声を張りあげた。
「くそっ！」

と大きな声をあげて、エリクソンが剣を引く。
「助かった。相手が妙な『気』を発しているから……どう攻撃していいのかわからなかった」
コート際に戻ってきたライデンは、リリに礼を言った。
ライデンに、味方が現われたとき、エリクソンは変わった。
美しい剣技に、濁流のような荒々しさが交じり合っている。
「ラーシュ・エリクソン様には、大変大きな重圧が。彼は負けられないのです」
「七葉だから？　あと二ラウンドで、俺に制裁をくだす必要があるということか？」
「そうです。こちらとしては、そこをゆさぶるのが、唯一の活路になります」
戦いをよく知っているな、とライデンはびっくりした。
小学生かと思える容姿なのに、言っていることは一人前の策士だ。
「私は一分後、二度目のタイムを要請しようと思います。それであちらの流れは完全に切れます。でも、タイムをとれるのは二回まで。このラウンドで落とさないと、勝機を失います」
「一分、エリクソンの剣を躱し、タイムに入る。で、残り何分でヤツを倒すんだ？」
「えっ、計算していないんですか？」
反問されて、「していない」とライデンはあっけらかんと答えた。
「一分です。雷電・E・シャフト様。……大丈夫です？」
心配そうに、小さなシルビエンタはライデンの顔を覗きこんだ。
すっかり、「ダメ皇嗣」の烙印をおされてしまったようだ。

「さぁな。一分、ヤツに隙がなかったら、どうしようもないじゃないか」
「それ以外、どんな作戦も立てようがありません。雷電・E・シャフト様」
ときっぱり言われて、ライデンは「わかったよ」と立ちあがった。

*

エリクソンの剣の猛攻は、学園の歴史に残るのではないかとすら思われた。
ライデン自身、剣技のうえで彼より強い男を知っていても、「必死」な男は知らなかった。
一分、よく躱せたものだとライデン自身が驚く。
まるで、三人のエリクソンと同時に戦っているような気がするほどだった。
「タイムを要請します！」
額に汗を光らせ、椅子に倒れこんだライデンは「三十秒でタイムをとってくれればよかったのに」とリリにぼやいた。
「残り一分です。雷電・E・シャフト様。お忘れなく」
ライデンのぼやきをあっさり受け流し、リリは念おしした。
第八ラウンド、残り一分がはじまる。
タイムの前とはうってかわって、エリクソンは防御に撤した。
間合いを広くとって、ライデンの攻撃をすべて受け流す。

「こちらの作戦はお見通しというわけだ」
このまま一分、相手が逃げつづけたら一巻の終わりだ。
次のラウンドでエリクソンはまた猛攻に転じ、ライデンを落とすだろう。
残り三十秒。
「一か八か……か…」
ライデンが床を蹴った。
軽やかにステップを踏むと、剣を持ったまま前方宙返りをコロセウムで披露する。
一気に間合いをつめ、相手の眉間に向かって右足を振りあげた。
ピタリと、足はエリクソンの顔面スレスレで静止する。
「蹴り技は……！」
「これはフェイントだ！」
抗議するエリクソンに怒鳴りかえし、ライデンはエリクソンの持つ剣の中央めがけ、自分の剣を振りおろした。
火花が散る。と同時に、ライデンの剣だけが真っ二つに折れた。
渾身の力で振りおろし、彼の手から剣を叩き落とすつもりだったのだ。
だが、エリクソンは決して剣を放さなかった。
「私の勝ちだ」
エリクソンがライデンの目と鼻の先で呟く。

「まだだ。あと、十五秒！」
ライデンは一瞬、油断したエリクソンの背後をとらえた。
首筋にめがけ、腕を横殴りにふる。
ガクン！　とエリクソンが膝を折った。そのままうつぶせで床に倒れる。
「反則です！　彼は今、拳で殴りました！」
エリクソンのシルビエンタが怒鳴った。
コロセウムは騒然となった。
「そうだ！　今、殴ったぞ！」
皇嗣たちが一斉に抗議しはじめた。
「拳じゃない。『柄』だ！」
ライデンは怒鳴りかえした。
ライデンは手を広げ、手のなかに、折れた剣の柄があることを、全員に見せた。
「柄は剣の一部だ。使っても反則じゃないと思うが？」
そのとき、第八ラウンド終了の合図が鳴った。

八章　誰が世界を支配する？

「七葉が負けた!?」
「あのラーシュ・エリクソンが床に伸びているところなんか、初めて見たぞ」
「制裁にケチがついたな。これじゃ、七葉のメンツが丸潰れだ」
「いや、メンツを潰されたのは……アルクス・ケインだろう」
コロセウムにいる皇嗣たちは、ヒソヒソと囁きあっていた。
大声をださないのは、そのアルクス・ケインに聞かれては身の破滅だからだ。
「だがこれで、アルクス・ケインの独裁体制が変わってくるかもしれない」
「それはどうかな……俺はたんに『嵐』がやってきただけって気がするが」
「嵐ね、いい喩えかもしれないな」
雷電・E・シャフトはカナリアに上陸した「嵐」のような存在だ。
アルクス・ケインがカイザーに王手をかけたそのとき、彼は外の世界から飛びこんできた。
類い稀な身体能力を持ち、見るものを興奮させずにいられない様々な技で、セッションに勝

利していく。
「見ろ、雷電・E・シャフトがスタッフにマイクを用意させている」
「『決議』がでるのか？」
「制裁目的とはいえ、正式なセッションだったのだ。スカンジナビアは、東ア連の決議に従わなければならない」
今度は一体、どんな決議をだすのだろうか？
みなが興味津々という顔つきで、自分の推測を語っている。
「スカンジナビアは最近、アンバーによりすぎだ。ここで途方もない決議がでるのも面白い」
「しっ、静かに」
『ええっと……』
前触れもなくライデンの声が響いた。皇嗣たちは雑談をやめ、ライデンの言葉を聞き入った。
彼らは心のどこかで、ライデンの無謀な決議を期待していたのかもしれない。
『決議は……あとで言うよ。今すぐ考えつかない』
「なんだよ……」
「もったいつけんなよ！」
コロセウムからブーイングが起こった。
ライデンはなんだその反応は？　と呆れた。さっきまで「制裁だ！」と叫んでいた皇嗣たちが、今度は「決議だ！」と言うのだ。

皇嗣も人の子。まだまだ未熟で我がままで、ある意味、大人より厄介だ。
でも、それだけじゃない。
ライデンは今それを強く実感している。
『まず礼を言う。ムサラディンとリリ、俺に公正なセッションを与えてくれてありがとう』
人々の視線が、コロセウムの大小コンビに集中した。当人たちは、照れもしなければ、注目されても一向に気にする素振りがない。妙に肝がすわっている二人だ。
『お前たちは、すごいよ。俺のせいで国にひどい損害がでたろうに、私怨を抱かず力を貸してくれた。今更だが、深く謝罪する。申し訳なかった』
ライデンは潔く、頭をさげた。
そのときムサラディンは表情を変えないまま、親指をつきだした。さきほどの「GO！」とまったく同じだったが、ライデンには「気にするな」のサインに映った。
『俺は俺なりに、今回の制裁は納得している。たまたま勝ったが……いい気になるつもりはない。だから、「決議」はよく考えてからにさせてくれ』
それから……とライデンは視線をあげた。
『俺が挫けそうになったとき、声援をくれたシルビエンタがいる。彼女に礼を言いたい』
ザワッとコロセウムが揺れた。
あちこちで、「あいつだ」と指をさしている者がいる。
当人は今、人々の視線に怯えて、椅子の下に隠れてしまったところだ。

「あれはスタンレー・ファーナムのシルビエンタだろ？」
「ああ。……こりゃまた、一波乱くるぞ」
皇嗣たちの予測はすぐに的中した。
ガタン！　と大きな音がしたと思ったら、鈴蘭の前に座っていたスタンレー・ファーナムが荒々しく立ちあがった。鈴蘭に向かって椅子を蹴り倒すと、コロセウムをでていく。
ひと呼吸おいて、ライデンの情感豊かな声が、マイクを通して流れた。
『ありがとう、鈴蘭。お前の声援が、世界中から孤立していた俺を救ってくれた』
椅子の陰にいた鈴蘭が泣きだした。
両手で口を塞いで、必死で泣くまいとしたが、止められなかったようだった。
シルビエンタの震える嗚咽は、コロセウム中に広がった。
そしてその泣き声は、聞いている者の心のなかにも広がっていったのだった。

*

『本日のセッションは全て終了いたしました。皇嗣の皆様。大変お疲れさま……』
閉会宣言を最後まで聞かず、ライデンはコロセウムを飛びだした。
その顔色は、セッションで窮地に立っていたときより悪い。
「まずい。コロセウムで鈴蘭を捕まえられると思ったのに……」

ライデンは急いで「北門」に向かった。
椅子を蹴り倒してでていったスタンレー・ファーナムの姿が、脳裏に焼きついている。
このあと、どんなことが起こるか、容易に想像がつく。だから、ライデンは焦っていたのだ。
「ったくお前は！　もうちょっとマシなシルビエンタかと思って交換したのに、たいした料理も作れない！　そんなヤツがセッションに口を挟むとは、何ごとだ!?　このっ！　このっ！」
大きなソテツの陰からスタンレー・ファーナムの声が響いてきた。
ライデンは全速力で走りだした。ソテツの葉を押しのけた瞬間、頭を抱えて蹲っている鈴蘭と、足を蹴りだそうとしているスタンレーを目撃した。
「……鈴蘭！」
ライデンは鈴蘭に駆けよった。
「ふん、正義の味方の登場か？　偽善もほどほどにしろ雷電・E・シャフト！」
スタンレーは憤怒の形相だった。自分つきのシルビエンタが、ライデンの応援をしたのだ。腹に据えかねる、という顔だ。
「大丈夫か!?　鈴蘭」
ライデンが鈴蘭の側に片膝をつく。すると鈴蘭は、助けようとするライデンの手を撥ねのけた。
「来ないでください、ライデン様！　助けようとしないで。私が悪いんです。シルビエンタの分際で他の皇嗣様のセッションに口をだすことは、できないんです。私はルールを破りました。

だから……当然なんです」

そうだ！　とスタンレーは言った。

「このシルビエンタは、俺の奴隷だ。奴隷の分際で、他の皇嗣のセッションに口をだした！　俺は主人として、正当なお仕置きをしているんだ。邪魔をするな！」

ライデンはすっ、とスタンレーの前に立った。胸と胸がつくほど接近する。

「言いたいことはそれだけか？」

とライデンは相手の目を見据えた。「なに!?」とスタンレーが、挑発されて真っ赤になる。

「正当なお仕置きってのは、なんだ？　俺には、弱い者苛めにしか見えない」

「だったらなんだ!?　これは俺の奴隷だ！」

「鈴蘭は奴隷じゃない！　UGTの被災者だ。後天性アルビノ症にかからなかったら、今頃どこかで幸せな学生生活を送っていたはずだ！」

「お前の言っていることは、みんなみんな綺麗事だ！　そういうセリフはな、誰にでも言えるんだよ！　俺も昔は言ったさ！」

スタンレーは怒鳴りかえしてきた。

「今にお前も俺のようになる！　賭けてもいい！」

ライデンは、はかなく散ったオルテンシアの言葉を思い出した。

スタンレー・ファーナムはかつて、カナリアでもっとも人気の高い皇嗣だった。

喧嘩をするのではなく、喧嘩を仲裁する役だった。

年下の皇嗣の面倒をよく見ていた。
今、ライデンの目の前に、目を血走らせて立っている男からは想像できないことだった。
彼はなぜここまで極端に、変貌してしまったのだろう？
「行こう、鈴蘭」
ライデンは蹲る鈴蘭の細い腕を掴んだ。
すると、スタンレー・ファーナムは「触るな！」と絶叫し、ライデンを突きとばした。
「お前のシルビエンタは死んだ！　これは俺のだ！　俺の俺の俺の！」
ライデンがわめいているスタンレーに掴みかかった。
「ライデン様！　おやめください！」
スタンレーの胸ぐらを掴むライデンの手に、鈴蘭がしがみつく。
「スタンレー・ファーナム様は間違ったことはおっしゃっていません！　私は彼のシルビエンタです！　ご主人様をお放しください！」
鈴蘭はスタンレーを庇った。どうにかして、二人を引き離そうと割って入る。
「放せ、鈴蘭！」
ライデンが怒鳴った。その怒号に鈴蘭が肩を震わせる。
そのとき、スタンレーの右ストレートがライデンの頬に決まった。
ライデンが後方へふっとぶ。
スタンレーはライデンに伸しかかってきた。

「この！　この！　このこのこの！」
馬乗りになって、ライデンの顔面を殴りだす。
その目は誰に対するとも知れない憎しみに溢れていた。
ライデンは歯を食いしばり、相手の顔を見てはっとした。
スタンレーは泣いていた。涙をためて、ライデンを殴っていたのだ。
「ラ、ライデン様！」
鈴蘭が悲鳴をあげ、スタンレーの背中にしがみついた。今度はライデンを救おうと必死になる。
「やめてください！　やめてください！　やめてご主人様！　ライデン様を殴らないで！」
「どけ！　この役立たず！」
スタンレーに何度振り払われても、鈴蘭は夢中で彼の腕を押さえこもうとした。
「ライデン様……！　ひっ……ライデン様……！」
鈴蘭も泣きだした。
「いいから殴らせろ、鈴蘭……っく！」
口を開いたときスタンレーの拳がやってきて、ライデンは口のなかを切った。
顔をしかめながら、ライデンは言った。
「これは、五年分の欲求不満の現われなんだよ。こいつは……鬱憤が積もり積もって、壊れそうなんだ！」

「で、でも！　皇嗣様同士の私闘は禁じられて……！」
「これは私闘なんかじゃない……ただの喧嘩だ！」
ライデンがスタンレーの拳を摑んだ。乗っかっている彼の鳩尾に一打を浴びせ、その隙に立ちあがる。
口の端を流れる血を拭うと、ライデンは「さぁ来いよ！」と叫んだ。
「相手になってやるよ、スタンレー・ファーナム。好きなだけ殴らせてやる！　だが、殴られた分だけは殴りかえす！」
「上等だ！」
スタンレーがライデンにタックルをかけた。

*

「はぁはぁはぁ……」
「はぁ……もう、はぁ……終わり……か」
スタンレーが大地に伸びていた。
被害を被ったソテツの葉が、あたり一面に散乱している。まるで台風一過の大地のようだ。
ライデンは落ちた葉のうえに突っ立って、スタンレーを見おろしていた。
「俺は……あと……三発、残っている、ぞ」

息も絶え絶えのライデンの声に、スタンレーは一言も返さなかった。一時間近く殴りあって、もはや、口を開く力も残っていなかったのだ。

鈴蘭のしゃくりあげる声が、等間隔に響いている。彼女もただ嗚咽をあげるだけで、言葉を発する様子はない。

「三発……まけてやる……代わりに、鈴蘭を返せ」

とライデンはスタンレーに要求した。

「イヤだ……と言ったら……？」

「三発殴って……鈴蘭を取りかえす」

「あはは……はははは……」

急にスタンレーが笑いだした。大地に寝転がったまま、高らかに笑う。

「ちくしょー！　チクショウ！」

スタンレーは大声で罵った。そしてまた、笑う。

「はははは……こんなに……笑ったのは……久しぶりだ」

スタンレーはそう言った。まるで憑き物が落ちたような顔で、蒼天を見つめている。

「ちょっとは……スッキリしたか？」

「するか！　同情しているなら、俺に勝たせろ！」

と彼は青い空に向かって文句を言った。

「俺はそこまで…お人好しじゃない」

「中途半端なんだよ、雷電・E・シャフト！」
「悪かったな。どっちにしろ……鈴蘭はもらっていく」
スタンレーは爆笑したが、ライデンは無視し、鈴蘭のところへ向かった。
「鈴蘭、帰るぞ」
喧嘩のあいだ泣きどおしだったせいで、鈴蘭の目のまわりは真っ赤だ。
「みっともない顔だ」
と鈴蘭の顔を、自分の胸におしつける。
「ライ……む…っ」
くぐもった声を発して、鈴蘭はライデンの胸のなかでか弱く抵抗した。
ライデンは放さなかった。
やがて鈴蘭は、自分からぎゅっと顔をおしつけ、嗚咽に肩を震わせはじめた。
「ああ……持っていけ持っていけ！　そんなヤツ！　厄介払いできてせいせいする！　そいつの料理は食えたもんじゃない！　俺はホームからもっといいシルビエンタをもらう！」
寝転がったまま、スタンレーが叫んだ。

*

学園の医療室で簡単な検査をすませると、検査結果を待たず、ライデンは鈴蘭をともなって

屋敷へ帰ってきた。
「こ……こんなにお顔が腫れて……わざと、避けようとなさらなかったでしょう?」
鈴蘭はすぐさま救急箱を持ってきた。医療室のスタッフにやってもらえばよかったのだが、ライデンが「帰る」と言ってきかなかったのだ。
「避けたら、あいつの憂さ晴らしにならないだろう?」
ライデンの顔や身体には、数ヵ所大きな痣ができていた。
鈴蘭は半泣きになりながら、ライデンの傷の手当てをした。破れた上着を脱がせ、冷たいタオルで身体をふく。
ライデンの額に、ギュッと消毒用のコットンを押しあてる。
「いたた……いいよ、顔の手当ては自分でする」
と言うと、ライデンはやたらにしみるコットンを遠ざけた。
応急手当てをすませ、服を着替え終わった頃、医療室から検査結果が届けられた。
「右の第十一肋骨にひびが入っているそうです。二週間は安静にしていてください」
「わかった。ったく手加減を知らないヤツはこれだから……」
とブツブツ不平を言う。呼吸をすると右の脇腹のあたりがチクチクと痛んだ。
ライデンに比べて、スタンレー・ファーナムは軽傷だ。
回数はほぼ同じだけ殴ったが、ライデンは手加減した。
自分が本気で殴ったら、相手の命に関わることを彼は心得ている。

「そうだ。口のなかを切ったから、当分、しみるものは食べられない」
「……」
「返事は？　鈴蘭」
「……わかりました。ご主人様」
「俺を代名詞で呼ぶなと言ったはずだ。忘れたのか？」
「す、すみません。……ライデン様」
鈴蘭がうつむく様子を、ライデンは見守った。
鈴蘭がいなかったのは、ほんの数日なのに、やたらに新鮮で、懐かしいと感じた。
と同時に、どうしても訊きたい疑問がライデンの口からついてでてきた。
「鈴蘭、どうして、自分からスタンレー・ファーナムの元へ行った？」
鈴蘭はビクッとして、しまおうとしていたピンセットを落とした。
「怒らないから話せ」
と命じると、彼女はモジモジしながらこう言った。
「私……オルテンシアのことが心配で……彼女は、殴られ慣れていないから……だから」
「自分は殴られ慣れているから？　だから交替するいい機会だと思ったのか？」
「……そう、です」
「本当のことを言え、鈴蘭。たった今考えた嘘だと、顔に書いてあるぞ」
「……」

「主人に嘘をつくな」
鈴蘭は追いつめられたかのように、顔をくしゃくしゃにした。
「私……恐くて……」
「俺が？」
違う、というように鈴蘭は首をふった。
「ライデン様が、少しずつイライラなさるようになって……私、うまくお慰めできなくて。どうしていいのかわからなくて……このままライデン様が壊れていったら、私のせいだと思って」
鈴蘭はそのとき自分がなにを恐れていたかを語った。
彼女は、ライデンが壊れていく様を見せつけられることに恐怖したのだ。
「ライデン様は私に名前をくださいました。決して、暴力はふるわないという誓いも立ててくださいました。私は『とてもいい皇嗣様に当たった、ラッキーだ』と思いました」
でも、と鈴蘭はつづけた。
「そのライデン様が、少しずつ変わっていく。いい人が少しずつ、壊れていく。私じゃ、止められない。どうしていいのかわからなくて、悩んでいるときに、スタンレー・ファーナム様からメールが」
それがシルビエンタを交換しようというメールだったのだ。
とっさに、鈴蘭はこう思った。
「私じゃなく、オルテンシアだったら、ライデン様を支えられるんじゃないかって……彼女は

聡明で、なんでもよくできるし……それに彼女は爽矢・E・シャフト様のことが大好きでした」
オルテンシアもきっと、文句は言わないはずだ。そう思った鈴蘭は、とっさにメールを返していた。
「なるほど。お前はそれで満足だったのかもしれないが、俺は心配していた。スタンレーがいつお前を殴るかとヒヤヒヤしていた」
と言うと、涙脆い鈴蘭はまたポロリと泣いた。
「私は……平気……です。殴られる、のに……慣れて……」
「殴られて平気な人間などいない」
鈴蘭の言葉を遮るとライデンは言った。
「殴られて痛くない人間はいないんだ。差別されて悲しくない人間も、いない」
差別されて悲しいのは、ライデン自身だった。
彼はずっとスペアと呼ばれ、生きてきた。
爽矢が死んで存在価値を失い、破棄寸前でカナリアに来た身だ。
俺はお前と同じなんだよ、鈴蘭。
そう告げたい。しかしライデンは、言えなかった。
オルテンシアの二の舞になりそうで、怖かったのだ。
「そういう歪みを『ルール』で正当化するカナリアは、間違っている」
「……ライデン様」

「『ネオ・エデン』計画はもう破綻している。保護されるべきアルビノが、奴隷のように虐げられたときに……セッションが決闘形式に変わったときに……」

人気者の皇嗣、スタンレー・ファーナムが壊れはじめたときに。

軍事国家の王、アルクス・ケインが「七葉」とともに学園を支配しはじめたときに。

「どうしようもないほど、歪んでしまっている。俺はそう感じる。だからもう、この学園は潰すべきだ」

潰す。その言葉に、鈴蘭は表情を強ばらせた。

「で、でもライデン様。それでは、世界の人々は希望を失います。私だって困ります。皇嗣様たちがきっといい世界統一国家を作ってくださる。そうなったら、アルビノも幸せになれるって、それが私の夢……なんです。シルビエンタたちはみんな、そのためにつらいことにも耐えているんです」

「それは幻想だ！　この島で、いい世界統一国家なんか生まれない。そんなこと、お前だって本当はわかっているはずだ。せいぜい、弱肉強食の軍事政権が、派閥社会を作るだけさ」

「そんなこと……言わないで……ください」

鈴蘭の声は「夢を壊さないでくれ」と言っているようにも聞こえた。

ライデンは小さなこどもを苛めているような気がして、口をつぐむ。

シルビエンタだけではない。世界中が夢を見ている。

現実は苛酷で、夢は必要だった。いつかできる理想郷（ネオ・エデン）が、人々の壊れそうな心を、辛うじて

支えている状態だ。
カナリアが崩壊したら、間違いなく世界中で戦争が起こる。
貧しい者は貧困で、弱者は強者に踏みつけられ、死んでいくだろう。
「俺には世界なんか、手に負えない。身勝手なヤツばかりじゃ、滅ぶのは当然だ。それはカナリアの有る無しじゃなく、人間の本質の問題だろう？　俺はもう耐えられないんだ。シルビエンタが殴られるのは見ていられない。皇嗣が壊れていくのを見るのも、もうイヤなんだ！」
カナリアを潰さなければならない。
ライデンはいつしか、そんな妄執に囚われていた。
たとえ、世界中の人間に「お前は悪魔か？」と問われてもかまわない。
悪魔になってやる。
「俺はカナリアをぶっ潰す。そしてお前を故郷へ帰してやる。好きな色の服を着て、好きなヤツと、世界が滅びるそのときまで、自由に過ごせ」
「ライデン……様」
「俺は……悪魔になって、束の間の自由を……お前に与えてやる。それぐらいしか俺は…」
「……ライデン様…！」
涙を散らせて、鈴蘭が走った。
少女は迸る想いをぶつけるように、ライデンにしがみついた。
ライデンは鈴蘭を胸のなかで受けとめた。

言葉か嗚咽かわからないものが、鈴蘭の口から溢れてきた。
「私は……カナリア…潰して…うっ…ほしくない……です。ライデン様には、悪魔になって……ほしく、ないです」
「鈴蘭」
呼ばれて鈴蘭は顔をあげた。
彼女は涙の溢れる瞳でまっすぐライデンを見つめて、こう言った。
「鈴蘭は……ライデン様に『カイザー』になってほしいです」
鈴蘭は、心からそう思います。
鈴蘭は、ライデン様は悪魔より、カイザーにふさわしいと思います。
アルビノの少女は、そんな言葉を連ねる。
「ガラじゃないよ、鈴蘭」
俺はなれないんだよ、鈴蘭。とライデンは心のなかで返した。
俺はクローノイドだから……資格はないんだ。
「いいえ！　そんなことありません。ライデン様が一番……」
「鈴蘭、黙れ」
「カイザーに」
「黙れ」
「ふさわしい……」



黙れと何度言っても黙らない鈴蘭の口を、ライデンは唇で塞いだ。
両手は鈴蘭を抱きしめるために使っていたから、これ以外方法がなかったのだと、自分自身に言い訳する。
「！」
鈴蘭がびっくりしている。
拒まれたら手放すつもりだったが、鈴蘭の身体からは次第に力が抜けていった。
ライデンは唇を重ねたまま、鈴蘭の身体を軽々と抱きあげた。
鈴蘭はされるがままに身を任せ……
ライデンの服の袖を細い指で、きゅっと握った。

＊

カナリアにある皇嗣たちの「学園」には、定められた休暇がない。
強いて言うなら、セッションが一件もない日が「休日」だった。
『皇嗣の皆様、おはようございます。本日、セッションの予定はありません。どうぞみなさま、ご自由にお過ごしください』
ライデンはこの校内アナウンスの声で、目を覚ました。
屋敷のスピーカーが鳴っていることに、不満の声をもらす。

「くそっ……昨日、セッションのあいだに、スタッフがスピーカーを直したな」
直さなくてよかったのに……とライデン。
今日が休日でラッキーだと思う。絆創膏をベタベタとはった顔で、登校したくはなかった。
ライデンのちょうどおヘソのあたりに、鈴蘭の小さな手が乗っていた。
その手の感触が、妙にくすぐったい。
少女はライデンにぴったりとくっつくようにして、眠っている。
あまりにあどけない寝顔だ。泣きつかれ、ライデンにしがみついたまま、三度目のキスの前に寝てしまったという昨日の情況も、苦笑してしまうほどあどけなかった。
そっと頭を撫で、額にキスした。
すると鈴蘭は寝呆けたまま、さらにライデンに擦りよってきた。
悪魔になって、カナリアをぶっ潰す！　と叫んでいた昨日の自分は、今、すっかりナリを潜めている。
――私は……カナリア…潰して…うっ…ほしくない……です。ライデン様には、悪魔になって……ほしく、ないです。
あの鈴蘭の言葉が、煮えたぎるようなカナリアへの憎しみを一掃してしまったかのようだ。
我ながら、無謀な発言だったと思わないでもない。だがあのときは、抑えようもない怒りで、本当にぶっ潰したいと思った。
今でも仄かに心にくすぶっている。

カナリアをどうにかできないものかと。
シルビエンタたちを、どうにかしてやれないものか、と。
改革。いや、革命？
そのときだった。ポーン……と来訪者を報せるチャイムが鳴った。
時計を見れば、午前九時半すぎだ。
「誰だ、こんな日に」
せっかくの休日に水をさされて、ライデンが不平をもらす。
その横で、鈴蘭がガバッ！　とシーツを跳ねあげて起きあがった。
「はっ！　私ったら、ひぇーっ！」
と冷汗とともに短く叫ぶ。下着姿の自分と上半身裸のライデンをまじまじと見つめ、耳たぶから順々に、顔、首、胸のあたりまで赤くなっていく。
「昨日はなにもなかったぞ」
気にしているのはそれか？　と思いライデンは口にしたのだが、「そそ、そんなことは、どっちでもかまわないのですが……朝まで一緒に眠るというのは、おお恐れ多すぎて、ひぇーっというか、きゃぁーというか……」
バタバタ、バタン！　慌ててベッドから降りた鈴蘭が、床で転んだ。
「どど、どちら様か、見てまいります！」
と寝室を逃げるようにでていく。

バタン、とまた廊下で大きな音がした。たぶん、鈴蘭が転んだ音だ。
「大丈夫か？」
とライデンは、白い肌をピンクに染めていた鈴蘭を思い出して、一言、呟いた。

*

一分たって、ライデンは起きあがった。ラフな部屋着姿でリビングへ向かう。
「鈴蘭、誰だった？」
と玄関に向かって声をかけたが、鈴蘭の返答はなかった。
「？」
ライデンはピタリと動作をとめた。
なにかしら「違和感」があった。
鈴蘭の気配がしない。そのかわりに、錆ついた鉄を舐めるような、ザラリとした不快感がした。
ライデンがふと、庭を振りかえった瞬間――家具の死角から、一本の長剣が飛びだしてきた。
ライデンは半身を返し、その剣を脇で挟んだ。庭に面した窓ガラスに、その剣と黒ずくめの男が映っていたのだ。

「何者だ?」
黒い布で一切を覆う男に、ライデンは問うた。まるでアラブの強盗かなにかを連想させる。頭髪も顔も、みんな黒い布で隠しているからだ。
剣も競技用のものではない。両刃の磨かれた、本物の長剣だ。
男は答えず、ライデンに封じられた剣を手放すと、漆黒のマントのなかからもう一本、剣を取りだした。
ライデンの心臓めがけ、そのまま突いてくる。
ライデンは風になびく葦のように、ふわりと仰け反って剣を躱した。
瞬時に驚くほどの柔軟性を見せ、トンと軽く床を蹴る。
謎の剣士が手放した剣を握ると、間合いをとった。
「鈴蘭はどこだ?」
男は跳躍した。
ライデンはリビングの机を、片腕を軸にヒラリと飛び越えた。
途中、脇に鈍痛が駆けぬけ、わずかに眉をひそめる。
昨日、スタンレー・ファーナムと喧嘩をして、肋骨にひびが入っていたことを思い出した。
ライデンは狭い廊下を走った。男はすぐさま追いかけてきた。
どちらの足音も軽い。
ライデンが客室に飛びこみ、床の間にある日本刀に手をのばす。相手の剣は細すぎて、手に

馴染まなかったからだ。
振り向きざまに鞘を投げ捨て、相手の手元に向かって一閃した。
男は器用に手首を翻し、紙一重でライデンの刀を避けた。
そのまま攻撃に転じ、ライデンの胴を狙う。
「くっ……」
避けようとして、床の間の壁に阻まれた。
ライデンのシャツが大きく切り裂かれる。
「どうして俺を殺そうとする？」
闇討ち、というには日が高いが、相手は紛れもなくライデンの命を狙っていた。
「殺せと命じられたのか？　それともお前の独断か？　いい加減、覆面をとれ。エリクソン」
名前を呼ばれた瞬間、男にわずかな隙が生じた。
ライデンは相手の剣の柄に向かって、強烈な回し蹴りを放った。
剣が弧を描いて飛び、天井につきささる。
「顔を隠しても無駄だ。剣がみんな教えてくれる。昨日、あれだけやりあえば、クセを摑むのには十分だ」
ライデンはそう言って、刀を峰に裏返した。過剰防衛にならないためだ。
「君は己れが……どれほど害悪か……わかっていない」
初めて、男は話した。

フードと覆面を静かに外し、黒いマントを脱ぐ。
ライデンが予期していた顔がそこにあった。
ラーシュ・エリクソン。スカンジナビア共和国の皇嗣。
北欧系の美男子で、フェンシングの達人だ。
「あと三ヵ月あれば、我々七葉の悲願は達成された。……あと三ヵ月で『カイザー』は誕生していたんだ！　君さえ来なければ！」
「そんなこと知るか。もう一度、訊く。鈴蘭はどこだ？」
「シルビエンタの心配をしている暇はないと思うが？　あれはホームのスパイだ。気を許すなと忠告したはずだぞ」
「関係ない！　鈴蘭はどこだ!?　エリクソン！」
ライデンが怒鳴った。その燃えるような怒気に、エリクソンはうっとうしそうな顔をして「玄関で眠っている」と返した。
「君は自分が正しいと思いこんでいるだろう？　雷電・E・シャフト」
「じゃ、お前たち七葉は正しいのか？　アルクス・ケインをカイザーに擁立することは、正しいことなのか？」
「ほんの一週間前に来た君に、五年ここにいる我々の気持ちが……わかってたまるか！」
ライデンを射殺すような眼差しで、エリクソンは叫んだ。
「一ヵ月でも早く、ここをでたい。いや、一日だって早く！　もう一時間だって耐えられない

と感じている皇嗣がどれくらいいると思っている!?　カナリアを脱出すること。それが全ての皇嗣の悲願なんだ！」

エリクソンがひらりと跳躍した。天井から剣を引きぬくと、ライデンに向かって突きだす。

その剣を峰で受け、ライデンは考えた。

彼らはもう、理想のカイザーを求めてはいないのかもしれない。

あるいは、理想など実現しないと結論づけ、手っ取りばやく、世界を支配してくれそうなカイザーを望むようになってしまったのだろうか。

それがアルクス・ケインなのか？

それとも、アルクス・ケイン以外にも誰か「候補」がいるのか？

「アルクス・ケイン様と七葉の強さは絶対でなければならない。このまま無敗で三ヵ月、支配力を強めれば、強情な反対派もなすすべがなくなるはずだった。……なのに、君は私を負かし、磐石な支配体制に、亀裂を入れてくれた！」

エリクソンは渾身の力で打ちこんできた。

「それは……！　負けた私の罪でもある。だから、私は今日ここで君を排除する！」

捨て身で来たのか、とライデンはエリクソンの覚悟を知った。

他国の皇嗣を殺せば、自分もただではすまない。

そうとわかっていて、エリクソンは戦いに来たのだ。

*

海から吹く生暖かい風が、真緑の街路樹の葉をなびかせている。
空にはすでに、貫禄のある白熱の太陽が居座っていた。
「……う……いたっ……」
頬に冷たいものが流れる感触で、鈴蘭は意識を取りもどした。玄関の扉を開けたとたん、黒ずくめの男に鳩尾を殴られた……？　鈴蘭の記憶はそこで途切れていた。
あの男は？
鳩尾の痛みに顔をしかめ、ゆっくり起きあがり、顔と服が濡れていることに気づく。
だれかに大量の冷水をぶっかけられたらしい。
「雷電・E・シャフトはいるか？」
冷水に負けぬ冷ややかな問いに、鈴蘭ははっとして前を見あげた。
日差しのせいで、眩しく光る石畳のうえに、ペットボトルを片手にした男が立っていた。
五百ミリのミネラルウォーターはほとんど空だ。全部自分が被ったのだろうか？
屋敷に面する路上に、一台の高級車が停まっている。
さて、このサングラスをした背の高い皇嗣様はどなただったろう？　と鈴蘭は考えこんだ。
どこかで見たことがある気がするのだが、思い出せない。
アイボリーの麻のスーツ姿だった。リゾートに来た「若」のようだ。

にゃーとネコが鳴いた。
白ネコ。いや、アルビノのネコは、彼の腕のなかにいた。眩しそうに目を細めている。
「そこをどけ」
と静かなトーンで命令され、鈴蘭はこう返した。
「あの……失礼ですが、どちら様でしょうか？」
相手は答えなかった。その代わりにサングラスをとった。
鈴蘭の身体が電流にうたれたように硬直する。
色の違う二つの瞳を見たとき、鈴蘭はようやく彼の名を思い出した。
黒い制服、あるいは浅葱色の軍服だったなら、すぐに気づいたはずだ。
「ア……アル……アル……」
鈴蘭は四つんばいで反転し、玄関の扉を開けた。腰が抜けて立てなかったのだ。
「ご主人……様！　ライデン様！　おおおお、おお、お客様……お客様です！」
鈴蘭は逃げ惑う子羊のように、四つんばいのまま屋敷に入ると叫んだ。
カナリアの休日。雷電・E・シャフトの屋敷に、もっともカイザーに近いといわれる男、アルクス・ケインが来訪した。

＊

鈴蘭が「お客様！」を連呼したとき、ライデンは石庭の岩から岩へ、軽々と跳躍していた。
エリクソンとの私闘は、狭い屋内から中庭へと移動していたのだ。
鈴蘭が無事だったことを声で判断し、ライデンはホッとした。
「鈴蘭、入ってくるな！」
真下で剣をかまえるエリクソンを睨みながら、怒鳴りかえす。
「でも、お客様！」
としつこい鈴蘭に「追いかえせ！」と命令する。
すると、鈴蘭は「無理！　できません！」と叫びかえしてきた。
ちらっと屋内を窺う。
「よそ見をしていると、後悔するぞ！」
とエリクソン。
殺気を漲らせたエリクソンの頭上を飛び越え、ライデンは一回転して庭に降りたった。
その背中にエリクソンの剣が迫る。
予測していたライデンが、さらに前転して躱した。
そのとき、リビングで四つんばいになっている鈴蘭を、視界の端にとらえた。
その後ろに「客」がいることはわかった。
だが暗くて……というより屋外が明るすぎて、ライデンには肝心の顔が見えなかった。
そう、目の色を判別することはできなかったのだ。

「こんなときに……誰だ？」
と呟くと、半身をかえし、エリクソンの剣を刀の峰で受けた。
カン！　と剣と刀が悲鳴をあげる。
すぐさま横転し、エリクソンとの間合いをとった。
にゃー……。
ネコの鳴き声がした。
エリクソンがはじめてライデンから視線をはずしたのはこのときだ。
エリクソンは白いネコを見ていた。それも、恐怖で凍りついたような眼差しで。
ライデンもリビングの様子を一瞥する。
腰がぬけて立てない鈴蘭の膝のうえに、「誰か」が白いネコを放り投げた。
その次の瞬間だった。
リビングの窓ガラスが全壊した。
壮絶な音をたててガラスを吹き飛ばし、長い「蛇」が二人に襲いかかった。
いや蛇ではなく、自在に伸縮を繰りかえす特殊な鞭だった。全長、五メートルはありそうだ。
鞭は庭の石畳を打ち砕き、灯籠を横倒しにし、ライデンの頭髪の一部を引き千切った。
反転した鞭は、池に渡されていた石橋を叩き割り、低木を分断し、エリクソンの首に絡みついた。
ライデンは度胆をぬかれた。

普通の鞭ではない。機関銃なみの速さと破壊力だった。
それが怒り狂う毒蛇のように、縦横無尽に跳梁したのだ。
「アル…クス……様」
カタンと、エリクソンの手から剣が落ちた。首に絡みついた鞭を両手で握りしめる。
「人気者だな、雷電・E・シャフト」
相変わらず物静かな声だった。そう、この暑いカナリアで、雪原を連想させるような声だ。
彼はリビングから一歩も動いていない。だというのに、彼の目の前に広がる庭は破壊し尽くされている。
静寂と破壊。これこそアルクス・ケインを象徴するものなのかもしれない。
「あんたも……俺を殺しにきたのか?」
ライデンは刀を両手で持つと、下段にかまえた。
ケタの違う強さだと思った。あの鞭も、刀でどうこうできるものではないだろう。ひょっとすると、アンバーの白兵戦用新兵器かもしれない。
相手はアルクス・ケインだった。軍事国家の現国王で、カイザーにもっとも近い男。
逆らう者は許さず、セッションで多くの国を滅亡においやった男だ。
「あるいは、と言っておこう。先客のせいで気が削がれたが……」
あっ……と声をたてて、エリクソンが膝から崩れた。
エリクソンは一言も言い訳しない。苦しくて声がでないのか、恐ろしくて声がでないのか、



どちらかだ。その様子を一瞥し、ライデンのほうが声をうわずらせた。
「このままだと、窒息するぞ」
「君に都合の悪いことではあるまい」
「あんたの大事な七葉だろう？」
「弱い者は名乗るべからずだ。昨日、君に負けた時点で更迭した」
「……」
平然と語るアルクス・ケインの前で、ライデンは固唾をのんだ。
すでにエリクソンの顔色は赤黒く変色している。
徹底した冷酷さを貫こうというのか？
これがアルクス・ケインの強さなのか？
強いとは、冷たいという意味か？
「放してやれ。本当に死んでしまうぞ」
「殺す気はない。が、甘い折檻はしない。私に恥を掻かせただけでなく、私の出鼻を挫いた」
エリクソンが一言も発言しないまま庭に伏したとき、アルクス・ケインはようやく長い毒蛇を手元に戻した。
「鈴蘭！　救急車を呼べ！」
ライデンが叫んだ。鈴蘭は声に弾かれたように立ちあがると、ネコを抱えて走った。
炎天下の庭から、エリクソンの身体をゲスト用の寝室に運んだのはライデンだ。

アルクス・ケインはというと、まったく関心がなさそうに、そして当たり前のように、リビングのソファに座って、長い足を組んだ。
ライデンには、アルクス・ケインが理解できなかった。
「あんた、一体、なにを考えている？」
彼の前に突っ立って、ライデンは問うた。
「そうだな。一言で言うと、なにが必要でなにが邪魔かだ」
「なにが必要で、なにが邪魔か？」
「人もモノも、それが表裏一体なのだ。わかるか？　雷電・E・シャフト。例えば『兵器』だ。有事の際には必要だ。恒久的平和が訪れたなら邪魔になるだろう。今は有事だ。だから私は兵器を造る」
「俺には、あんたが恒久的平和を望んでいるようには見えないが？」
とライデンは言いかえした。
「私は、雷電・E・シャフトが世界崩壊の引き金を引こうとしている、と見ている」
これも解釈の違いだ、とアルクスは付けたした。
「これ以上、長引けば、皇嗣も世界も壊れるというのに、君はカイザーの誕生を阻む」
「俺は壊したいわけじゃない。ふさわしいカイザーを選ぶべきだと思っているだけだ」
「では問おう。私はふさわしくないか？」
面と向かって問われ、ライデンは言葉につまった。

「私は、この世にはびこる欺瞞を、牛耳る自信がある。世界中の悪徳政治家も、私欲に溺れる企業家も、束ねてみせる」

ライデンは否定できなかった。

アルクス・ケインなら、やるだろう。誰よりも得意そうだ。

「腐った現在を包括し、一掃してからでないと、新世界は生まれない」

この理屈も否定できなかった。たぶんそれは、正しかったからだ。

ライデンの脳裏に、自国のことしか考えないラギ・常磐・ファン首相の顔が浮かんで……消えた。

「雷電・E・シャフトは理想家だ。あるいはロマンティストだ。もっといい『ネオ・エデン』があると思っている。だが、具体的には何一つ、わかっていない」

俺は……とライデンは呟いた。

「カイザーの資質は、冷酷な強さじゃないと思うだけだ」

「人間性か？」

「そうだ」

「スタンレー・ファーナムが三年前、声を大にして訴えていた内容と同じだな。その彼が今どういう状態か、見ればわかるだろう」

「追いつめたのはあんただ」

「これも表裏だ。彼はたしかに人気があった。だが追いつめられて豹変した。人間性は両刃の

剣だと、彼は自らの脆さで知らしめた。もはやその議論は決している。人間性では、世界はまとめられない」

「……」

「五年。皇嗣たちは試行錯誤した。だれがカイザーにふさわしいか？　選択肢は絞られつつある。はっきり言おう。途中からしゃしゃりでてきて、余計な口を挟むな。雷電・E・シャフト」

目障りだ、とアルクス・ケインに言われたとき、「君さえ来なければ」と怒鳴ったエリクソンを思い浮べた。

「俺は……ただ、邪魔なだけか？」

どうしてそんな負け惜しみのようなことを訊いたのか、ライデン自身にもよくわからなかった。ただ、一言も反論できなくて、悔しかったのは確かだ。

「途中から来た皇嗣は……俺だけじゃないはずだ」

「そうだ。だが、悲しいかな、彼らの実力はたかがしれていた。君は違う。君は実力のある皇嗣だ。ゆえに邪魔にもなり、必要にもなる」

「必要？　俺が必要になるとは、どういうことだ？」

「七葉に入れ。君が私に従うとき、その力は邪魔なものではなく、必要なものになる」

アルクス・ケインは断言した。色の違う二つの瞳は、高圧的にライデンを勧誘している。

すごい自信だとライデンは思った。悪徳政治家同様、ライデンを手玉にとってみせる。そう言っているのだ。

「……その話は断ったはずだ。俺はあんたの下僕にはなれない」
「どうして？」
問いかえされると思っていなかったライデンは「どうしてって……」と言葉につまった。
「俺は……従順じゃない。とことん納得しないと従わない。きっとあんたとは気があわない」
「だからどうだという？　そんなことは承知している」
はぁ、とライデンはため息をついた。そんな理由で拒むのは、いかにもガキだと言われたような気がしたのだ。
「ともかく、俺はあんたとは気があわない。だからこの話は二度とするな」
「よかろう。だが、いいか。私の邪魔はするな。私は三ヵ月以内にカイザーになる。妨げる者は全力で排除する。君の素行次第で、東ア連は世界地図から消えることになる」
アルクス・ケインが「全力」と言ったとき、ライデンの背中を冷たいものが駆けぬけた。これは脅迫ではなく、本気だ。そう直感したからだ。
「それがあんたのやり方か？　なら俺も俺のやりたいようにやらせてもらう」
「やりたいようにとは？」
「七葉を解体し、カナリアを変革する」
雷電・E・シャフトは、ソファにくつろぐアルクス・ケインに負けじと言いかえした。

終章　降りしきる花に想いを乗せて

休日があけて次の日。

雷電・E・シャフトのスカンジナビア共和国への『決議』が、コロセウムに波乱を招いていた。実際にライデンが決議を下したのは二日前。すでに全世界がそれを知るところにある。

「あいつ、絶対におかしいぞ」

「身体は動くが、脳は動かないタイプとみた」

「おかしいというより、可笑しい。前代未聞だ」

などという噂話で、コロセウムは持ちきりだ。

決議の内容はこうだ。

「スカンジナビア共和国は、アンバーに依頼され製造している最新型軍用機を使い、東アジア連合共和国の地方都市、ウランバートルにブーゲンビリアの花を降らせよ」

当然、これを聞いて東ア連の首相は激怒した。

『いいか雷電・E・シャフト！　今度こんな「嫌がらせ」をしたら、お前は即刻、クビだ！

強制送還！　国家反逆罪で投獄！　終身刑だ！』

「やれるものならやってみろ」

首相は二メートル先からでも聞こえそうな声でがなりたてたが、ライデンは気にしなかった。テレビのリモコンを押すような顔で、電話を切って、おしまいだ。

今、ライデンはコロセウムの自分の席に座っている。横には鈴蘭が、忠犬のような眼差しで座っていた。中央で行なわれる「Dチェス」を観戦中だ。

小国同士の戦いで、おまけにどちらも攻めるのではなく守りに撤していたから、ゲームとしての面白みには欠けていた。

ライデンもあくびをかみ殺す。

「特別席」にアルクス・ケインの姿はない。報告役らしい七葉が一人、座っているだけだ。

こんなもの、見るだけ時間の無駄、ということなのかもしれない。

スタンレー・ファーナムの姿もない。彼も興味がないセッションは、サボタージュするタイプらしい。

「見ろ、雷電・E・シャフトの顔」

「ああ。スタンレー・ファーナムと殴りあったらしいな」

真後ろから聞こえてきたヒソヒソ話に、ライデンはうんざりした。

せめて当人のいないところでしてくれ、と言いたい。

「私闘は厳禁だろう？」

「ところが双方、『これは喧嘩だ』と言いはって、お咎めなし」
「例のシルビエンタの争奪戦だったと、俺は聞いたぞ」
「たしかに、雷電・E・シャフトの横に座っているよな。ってことはヤツが勝ったのか」
「それより、エリクソンが七葉から落ちた話は聞いたか？」
「聞いた聞いた！　雷電・E・シャフトにやられたからには、こうなると予想していた」
「次の七葉がすでに決まっている話は？」
「それは本当か？」
「ああ。きっと今、『就任の儀』をやっている」
「俺はこんなくだらないチェスじゃなく、そっちを見たいね」
「ではアルクス・ケインの『夏の宮殿』へ行ってみたらどうだ？」
「めっそうも。あそこは無断で入ったら、無事にでては来れない魔の宮殿だぞ」
魔の宮殿。
言い得て妙とはこのことだ、とライデンは思う。
その魔宮には、毒蛇を操る魔王が住んでいて、世界征服を企んでいるのだ。
「で、その新任の七葉なんだが、これがまたびっくり……」
いつのまにか、ライデンは背後の噂話に聞き耳をたてていた。
残念なことに、チェスの試合より、よほど興味深かったのだ。

*

「なんで……あんなチェスをたてつづけに五時までやるんだ。……ああ、身体が固まる」
赤い太陽がカナリアを朱色に染めている。
ライデンは腰に手をあてて、ぼやいた。
「おまけに最後は時間切れで引き分けって……」
「それは結果ですから、仕方がありません。ライデン様」
西日を浴びて朱色に染まる鈴蘭は、ライデンの後ろから言葉を返した。
「俺はチェスはしない。こんなにまだるっこしいのは……嫌いだ」
「でもライデン様。相手と競技種目でもめた場合はチェスになります。そのときに備えて、チェスの練習をなさってください。鈴蘭はこれでもチェスは強いですよ」
少女は朗らかに笑った。
大きなリボンがついたモノトーンのメイド服。白いレースのハイソックス。
いささかロリータっぽいが、鈴蘭にはよく似合っていた。
二人はコロセウムをでて、「北門」に向かいだした。
「ライデン様、今夜の夕食ですが、なにがよろしいですか？」
鈴蘭は、背後からライデンの顔を覗きこむようにして尋ねた。
最近、彼女は生き生きしている。なにをするときも楽しそうだ。

「殴られるのではないか」という恐怖とも、決別できたようだった。
「冷凍のフカヒレしゅうまいでいい。あと白米が食べたい。他は任せる」
「わかりました。私、卵焼きが上手になりました。おいくつ召しあがります？」
鈴蘭……とライデンは肩を落とした。
「卵焼きは、夜ではなく朝に食べたい」
「そうなんですか？」
ふと、後ろを振りむいたら、鈴蘭は小さなメモ用紙になにかを書き留めていた。
「卵焼きは夜はダメ……と」
と呟く声を聞いて、ライデンがあわてて訂正する。
「いや、ダメなんじゃない。朝のほうがいいというか……ああ、もういい。今夜、だせ」
「あの……？」
「お前が作りたいものを作れと言っている」
鈴蘭の献身を見ていると、卵焼きは朝食でも夕食でも、どちらでも支障はないと思えてきたのだ。
二人の視界に北門が入った。と同時に、痛烈な嫌味がソテツの陰からやってくる。
「軍用機で花を降らせるぐらいなら、パンを降らせろ。そのほうが、国民は喜ぶ」
顔を見るまでもなく、スタンレー・ファーナムだとわかった。
「お前の「決議」は最低だ。今までこんなにド下手な皇嗣は見たことがない」

「うるさい。黙れ」
ライデンはソテツの葉を押しやると、突っかえした。
自分と同じく、顔に絆創膏をはっているメアトリア合衆国の皇嗣を睨む。
彼の横に新顔のシルビエンタがいた。モデルのように背の高い美人だ。
「ふん。『スカンジナビア』はレアメタルの宝庫だ。その採掘権の一部でも分捕っておけば、東ア連はド貧民国から脱却できたものを」
スタンレーが鼻で笑った。意地の悪い笑顔だったが、青い瞳に憎悪の色はない。
「ドは余計だ」
とライデンが言い返す。
「俺は親切に教えてやっているんだ！」
「嫌味にしか聞こえない！」
「なんだと!?」
ライデンが声を荒立てると、スタンレーも怒鳴りだした。
「このっ！」
「何だ!?」
開始の合図があったわけでもないのに、二人は同時に摑みかかった。
ライデンが足を飛ばした。
スタンレーが引っくりかえる。だが、彼はライデンの胸ぐらを放さなかった。

二人一緒に引っくりかえる。
「鈴蘭、止めるなよ！」
ライデンは叫ぶと、スタンレーとともにソテツの陰でとっ組み合いをはじめた。
「止めません……けれど、お怪我には注意してくださいね」
鈴蘭は呆れたため息とともに、小さく首を横にふった。

*

「いたた……」
一時間後、ライデンは鈴蘭に付き添われて、学園の医療室に向かっていた。
「ですから、お怪我にはご注意ください、と申しあげましたのに」
と鈴蘭が痛々しそうな顔をする。
「あいつはまだ、手加減できないんだよ」
「私にはわかりません。どうしてスタンレー・ファーナム様の喧嘩のお相手をなされるのですか？」
「相手？　相手をしてもらっているのが、あいつだと決めつけることはないさ」
とライデンは言った。
「今回、スタンレーを挑発したのは俺だ。ヤツは親切な嫌味を言ってくれただけさ」

鈴蘭はまだ「わからない」という顔をしている。
「男は、拳で話し合うんだよ」
とライデンが言うと、鈴蘭はさらに「わからない」と言いたげな顔をした。
「喧嘩でストレスを発散していれば、壊れずにすむ。あいつも俺も、いい発散相手を見つけたってことだ。……あ、そうだ。ちょうどいい。医療室でエリクソンの容体を聞いておこう」
ライデンは話を変えた。
「お見舞いでしょうか？　彼は学園ではなく、ホームの入院病棟におられますが」
「いや、情況を聞きたいだけだ。俺が見舞いに行っても嫌がらせにしかならないだろう」
エリクソンが頸椎にダメージを受けたことを、ライデンは鈴蘭から聞いていた。
軽度だという話だが、頸椎に後遺症が残ると、剣が持てなくなる可能性もある。
「エリクソンのやったことは許せないが、あの剣技が失われるのは惜しい。あいつの腕はスカンジナビアの宝だろうに」
容体が安定したら、彼は本国へ強制送還される。ライデンの命を狙った罪でだ。
ところが首の怪我については「事故」と処理された。事を荒立てたくはないが、「ホームもあの男の言いなりか？」と思わなくもない。
石橋をも叩き割る鞭を、人の首に絡ませた人物のことを、ライデンは思い出した。
「ま、引き千切らなかっただけマシか」
アルクス・ケイン。

力を調整していた。石を砕く武器で、人の首を落とさずにすませるとは、まさに神業だ。
いや、魔王の業か？
思いかえすごとに、背筋が寒くなる。
冷静になればなるほど、アルクス・ケインの強さが、身に染みるのだ。
廊下を折れ曲がったときだった。
「！」
ライデンはその一群を見たとき、鈴蘭を庇い、二、三歩後退した。
浅葱色の集団。浅葱色はきな臭い色だ、などと思う。
「また喧嘩か？　相手はスタンレー・ファーナムだな」
物静かだが、底知れぬ畏怖を抱かせる声が響いた。
それはアンバーの軍服をきっちり身につけた、アルクス・ケインその人だった。
彼の左右には「七葉」がいた。
アンバーの軍服とよく似た、浅葱色のロングジャケットを身につけている。そう、エイカースーという亡国の金髪美女が、ライデンに羽織らせようとした、あの衣装だ。
学園最強の「軍団」とも呼べる七葉と、ライデンは廊下で対峙した。
鈴蘭が震えている。当たり前だ。七葉には一人一人、独特の威圧感がある。
遠目で見るぶんにはいいが、至近距離で全員を相手にするものではない。
おまけに、アルクス・ケインが中央にいる。

彼は「取り巻き」の威圧感を包括し、そのうえに自分の威圧感を相乗させるのだ。
まさに大魔王だった。
「……そいつが新しい七葉か？」
さっさと通りすぎたいのは山々だったが、ライデンは口を開いた。
エリクソンの代わりに七葉に大抜擢された偉丈夫のことが、どうしても気になったのだ。
「そうだ」
とアルクス・ケインは短く答えた。
仲が悪いはずなのに、意外や意外、対話が成立している。
無視を決めこむといった小賢しさを、お互い持ちあわせていないからだろう。
「なぁ、あんたの人選の基準はなんだ？」
ライデンが顔を歪めて質問する。ちらっと新顔を見つめると、相手は親指をつきだし「Ｇｏｏｄ！」とばかりに合図した。
そう。それは、ライデンを救ってくれたムサラディン・アリムだったのである。
「七葉に加わる気のない君が、気にする必要はないと思うが？」
「そうだが……やっぱり気になるだろう？　この人選は。そいつはまだＢランクだし」
「ではヒントをやろう。君がこの男を人気者にしたてあげたのだ」
ライデンは「ん？」とした顔で考えた。
たしかに、コロセウム中に響く声で「ムサラディンはすごいよ」というような発言をしたの

はライデンだった。とはいえ、あの程度でアルクス・ケインが「お株を奪われる」と思うはずがない。

ただ、彼を取りこむことで、周囲が七葉に対する印象を変えることは確かだ。

「彼を入れれば……七葉の人気があがる？」

とライデンは眉間を細めて返答した。

「正解だ。すぐ気づくところをみると、単なるバカではないようだ。安心した」

「……」

ライデンは口をへの字に結んで押し黙った。

「私は『必要』か『邪魔』かで、すべてを判断する。すなわち、取りこむメリットがあれば、取りこむ。アルビノが勝手に決めるランクなど、関係ない」

「けれど、七葉は最強でなければならない、だろ？」

「そうだ。邪魔になったら切り捨てる」

「人もモノも一緒か？」

「一緒だ」

やっぱり、こいつとは気があわない。ライデンはそう確信した。

ライデンはムサラディンに問いたかった。こんな冷酷な男に、なぜ加担するのかと。

彼も割り切っているのだろうか？　それとも、彼の強者を敬う戦士の気質が、アルクス・ケインをカイザーとして認めるのだろうか？

はたまた、彼の国の情勢が原因か？
七葉に入れば、アンバーは後ろ盾になってくれる。
ライデンの途方もない『決議』のせいで、少なからず痛手を被った彼の国は、アンバーの経済援助で救われるのだ。
「少しは感謝してほしい。私は君の尻拭いをして回っているようなものなのだ」
ズケズケと指摘されて、ライデンは多少、傷ついた。
いつだって、アルクス・ケインの言葉には反論の余地がない。
人もモノのように扱う男だが、その手腕は認めざるをえなかった。
彼は神のような視点で、世界のバランスをとり、魔王のような心で、世界を支配すべく動いているのだ。
ふと、ライデンは思った。
この男は――カイザーに向いているのかもしれない。
そう思った自分を、すぐさま打ち消す。
こんな男がカイザーになったら、人とモノが同価値になってしまう。
「雑談がすぎたな。行くぞ」
アルクス・ケインは五人の取り巻きをつれて、ライデンと鈴蘭の横を通りすぎた。
ライデンはそのとき、わからなくなっていた。
一体、カイザーとは、なんだ？　どんな人間が、ふさわしいのだ？



アルクス・ケインは、本当に魔王なのか？
自分はこのカナリアを、どう変革すればいいのだ？
「そうだ、ブーゲンビリアの花は、いい決議だった」
通りすぎたアルクス・ケインが、ライデンを振りかえった。
「毒にも薬にもならないって、言いたいんだろう？」
とライデンは不貞腐れて返した。
「いや、アンバーの新型軍用機に対する国際社会の批判が、緩和した。いささかメルヘンチックではあるが、民衆が一つになれるいい余興だ。私もせいぜい利用させてもらう」
「……！」
ライデンはムカついてきた。
どうして俺は、こう裏目にでるようなことしかできないんだ！　というか、これじゃアルクス・ケインに加担したも同じじゃないか！
「ああ……ったく俺は……！　くそっ！」
とライデンは人目もはばからず、自分を罵った。
くくく……と誰かが笑った。
七葉の中心から声が響いて、ライデンよりむしろ七葉が驚く。
ライデンの顔を見つめ、アルクス・ケインが艶やかにほほ笑んでいた。

＊

数日後、スカンジナビア共和国は、ライデンの『決議』を実行した。
ライデンはそれを鈴蘭とともに、テレビで見た。
赤やピンク、紫や白。そして黄色。さまざまな色のブーゲンビリアの花が、これから冬を迎えようとするウランバートルに降った。
人々は低空飛行する軍用機に畏怖の目を向けつつも、降ってくる花を両手で受けとめた。
こどもたちはおおはしゃぎだ。
世界中のマスコミが、ウランバートルに押しかけてこの情況を取材している。
「きれいですね。まるで夢の国みたい」
と鈴蘭が言った。ライデンの座るソファの端に、ちょこんと遠慮して座っている。
「あとの掃除が大変そうだ」
とライデンは返した。
二人の目の前の机には、たくさんの古い手紙を入れたダンボール箱があった。
ツェ・ツェンが爽矢に送った手紙だ。すでに空輸の手続きをとってある。
母国にある爽矢の墓に、入れてやるつもりだった。
結局、爽矢の自殺の原因はわからなかった。
本国の気のあわない首相に問いあわせてみたが、爽矢の遺言は『途中で権利を譲渡する自分

を、お許しいただきたい』の一文だけだった。
「爽矢は疲れたのかもしれないな」
ライデンはふと、そう感じた。
七葉として、アルクス・ケインの側に傅くことは、大変なことだと思うからだ。
「爽矢は一日も早く、カナリアをでたかった。重い病状だったツェ・ツェンを見舞うために。だから七葉に入り、アルクス・ケインに協力した。でも途中で彼女は亡くなり…独りになった爽矢は、つらい思いをたくさんしたんだろう」
それが真実かどうかわからない。死んだ者の気持ちは、知りようもないからだ。
ライデンは今でもときおり「幻影」を見る。
庭にブーゲンビリアの苗木を植えている、爽矢の幻影だ。
どうしてこんなものが自分に見えるのか、ライデンにはわからない。
だが、最近は慣れてきて「また見える」程度で終わらせている。
考えても答えがでないことを、くどくどと考えるのは苦手だった。
「南国に咲くブーゲンビリアの花を見るのが……ツェ・ツェンの夢だった」
テレビを見ながら、ライデンは呟いた。
画面には、花を髪に挿して、喜んでいる年ごろの女性が映っている。
ツェ・ツェンの手紙の内容を、ライデンは思いかえす。

『いつかきっと元気になって、咲き乱れるブーゲンビリアを見に行きますね。
そこで、爽矢様とお会いできたら、最高！』

「爽矢が庭にブーゲンビリアばかり植えたのは、そのせいだったのかもしれないな」
俺は爽矢の「弟」だからさ。とライデンは自分に語る。
ツェ・ツェンの眠る大地に、花を贈りたかったんだ。
爽矢の代わりに……。
雷電・E・シャフトは目を閉じた。
そして、ふっとほほ笑んだのだった。

あとがき

こんにちは。尾久山(おくやま)ゆうかです。まずはｆ－Ｃｌａｎ文庫創刊、おめでとうございます！この栄えある機会に巡りあえたことを、とても幸運に思います。しかしあれですね。創刊ラインナップって、意外にプレッシャー強め。胃のあたりがチクチクしています。

＊黒いのは、お好きですか？

書きたかったんですよ、このお話。きっかけは友人との携帯メールでした。

「黒い王子がたくさんでてくる学園モノっていいよね。名づけて『支配者学園』とか？」

忘れもしません。あれは二〇〇八年北京オリンピックの開会式の日でした。どうしてはっきり覚えているかというと、メールに夢中になって、開会式を見逃したから（笑）。

そのときから三年ごしで、ようやく発表する機会に恵まれたわけです。

本当は主人公のライデンも「真っ黒なヒーロー」になるはずだったんです。でもそれじゃ鈴蘭(すずらん)があまりに可哀想な気がして…。というか、初めは鈴蘭も登場しない、黒王子ども一色の予定だったんですけれど！　ああでもない、こうでもないと試行錯誤を繰りかえし、結果、こんなお話になりました。ということで、あとがきを先にご覧の方は、ぜひ本文を読んでみてくだ

さい♥

＊私のバイブルは『ノエイン』。あなたは？

このお話は近未来…というより、並行世界（パラレルワールド）という捉え方で書いた物語です。私たちが生活している「現在」と近似値にある、もう一つの世界では「こんなこと」が起こっている…みたいな。だから、ハリウッド映画にありそうな超科学は存在しません。それどころか、携帯電話が使えない。絵文字やデコメールも無理。しょうがないから、手紙は便箋を使う。便箋が…そうですね、平均、三千円の世界です（高っ！）。

並行世界といえば、時空を超える系のＳＦにもよく出てくるワードですよね。

実は私、『ノエイン』（©赤根和樹（あかねかずき）氏・サテライト）というＳＦアニメの大ファンなんです。ＤＶＤｂｏｘをすでに持っているのに、ブルーレイｂｏｘも買おうかと思うほどに。

激しく、切なく、愛と友情と世界を語る。という観点においては、私のバイブルとも言うべき作品です。

本作はどうでしょうか。激しく、切なく、愛と友情と、世界を語れたでしょうか？

この作品を発表するにあたり、「必然」というものを色々と感じました。このお話をすると長くなるので、またの機会に。

最後に、形になるまでに、多大なご苦労をおかけした方々に心からお礼申し上げます。

イラストを担当していただきました、明咲トウル先生。本当にありがとうございました。お忙しいことは重々承知のうえで、お願いしてしまいました。とりわけアルクス・ケインは、どうしても明咲先生じゃなきゃ！　って感じていました。やっぱりサイコー♥

それから、担当氏にお礼を。何度も何度も…相談にのっていただき、ありがとうございました。ええっと、これからはできるだけ手間のかからない、いい子を目指しますので（そこを目指すのか!?　目標低っ！）末長くよろしくお願いします。

それでは、みなさんとは機会がありましたら『カイザー養成学園2　君は○○を△△する。（どこまでも仮）』でお会いしましょう！

二〇一一年　九月　　尾久山　ゆうか



f-Clan文庫

カイザー養成学園

君は世界を支配する。

f-Clan文庫をお買いあげいただき、ありがとうございます。
この作品を読んでのご意見・ご感想をお待ちしております。

ファンレターの宛先

〒102-0072　東京都千代田区飯田橋3-3-1
株式会社三笠書房　f-Clan文庫編集部気付
尾久山ゆうか先生係 / 明咲トウル先生係

f-Clan文庫WEBサイト http://f-clan.jp/

著　者――**尾久山ゆうか**（おくやま ゆうか）
挿　絵――**明咲トウル**（あさき とうる）
発行所――**株式会社三笠書房**

〒102-0072　東京都千代田区飯田橋3-3-1
電話（営業）03-5226-5744
　　（編集）03-5226-5760

印　刷――誠宏印刷
製　本――若林製本工場

ISBN978-4-8379-3602-2 C0193

ⓒYUUKA OKUYAMA,TOURU ASAKI Printed in Japan.
＊本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。
＊落丁・乱丁本は当社にてお取り替えいたします。
＊定価・発売日はカバーに表示してあります。


ケガレの乙女
著
麻木未穂
Illustration
黒葉・K
信じるべきは、神か父の仇か——!?
異界の者の血を引く「ケガレ」のマホソは、父の仇を討ち、国を統べる帝神から授かった使命を果たすため宮都へ向かう。仇の男を見つけるが、彼は異端の皇子で……。

F3603

◆ 好評発売中! ◆

f-Clan文庫



男を惑わす美貌の天狐と、
唐変木な半神が大活躍!?

傾国の魔性——のはずが、どこまでも無邪気な天狐の李樹（性別不明）。唯一惑わされない天帝の甥・黒鴉は、人界の危機に李樹を送り込み、監視役を務めるが……!?

F3601

◆好評発売中!◆

f-Clan文庫



竜宮ホテル＋迷い猫

著者 村山早紀

イラスト 遠田志帆

竜宮ホテルが、
あなたをお待ちしております——。

猫の耳としっぽが生えている少女と出会った、作家の響呼。
少女と共に、今はアパートとなっているホテルで世話になるが、そこは美しくも不思議な場所で……。

F3600

◆好評発売中!◆

9784837936022

1920193005905

ISBN978-4-8379-3602-2
C0193　¥590E

発行：三笠書房

定価：本体590円＋税

Story

世界を平和的に統一するため、対話（セッション）によって帝王（カイザー）を決めようと各国の皇嗣たちが集められた孤島の学園。だが、亡兄の跡を継いだライデンが目にしたのは、対話ではなく、力による戦い（セッション）だった。メイドの鈴蘭の怯えから、ライデンは重圧により壊れていった皇嗣たちの実情を知る。そして帝王の座へ王手を掛けんとする、巨大軍事国家の国王アルクス・ケインの非情な行いに畏怖を抱くが……。